て自己と爲すと云ふ處に至つて豁然として大悟す。後に一本の參同契を作る。亦此の意を出でず。看よ他の恁麼に問ふことを。且らく道へ什麼の根にか同じく那箇の體にか同じき。這裏に到つて也た妨げず奇特なることを。豈に他の常人の天の高く地の厚きことを知らざるに同じからんや。豈に恁麼のこと有んや。陸亘大夫恁麼に問ふ。奇なることは則ち甚だ奇なり。只是れ敬意を出でず若し敬意是れ極則と道はゞ、世尊何が故に更に花を拈し。祖師更に西來してなにをかなさん。南泉の答處衲僧の巴鼻を用ひて佗のために痛處を拈出して他の窠窟を破る。遂に庭前の花を指して大夫をよんで云く。時の人此の一株の花を見るに夢の如くに相似たりと。人を引いて萬丈の懸崖上に向つて打一推して他の命をして斷せしむるが如し。儻若し平地上に推倒せば彌勒佛の下生にも也た只命の斷ずることを解せざらん。亦人の夢に在るが如し。覺んと欲して覺めず。人に喚醒せらるゝに相似たり。南泉若し是れ眼目正しからずんば必定他に搽糊し將ち去られん。看よ他の恁麼の說話也た妨げず會し難きことを。若し是れ眼目定動して活きる底ならば聞き得て醍醐の上味の如くならん。若し是れ死底ならば聞き得て翻つて毒藥とならん。古人道く若し事上に於いて見ば常情に墮在せん。若し意根下に向つて卜度せば卒に模索不着ならん。巖頭道く此れは是れ向上人の活計只目前の些子を露はして電の拂ふに如同すと。南泉の大意此くの如し。虎兕を擒へ龍蛇を定むる底の手脚あり。這裏に到つて也た須らく是れ自ら會して始めて得べし。

道ふことを見ずや向上の一路は千聖も不傳。學者形を覓ること猿の影を捉ふるが如しと。看よ他雪竇の頌出することを。

【字解】一。心を理性の中に留めて肇論を遊泳す。　心を心性に留めて肇論をもてあそんだと云ふ。

二。生融叡と同じく羅什門下にあり。　羅什門下の四哲の中で道生は初め廬山に居ること七年。慧叡慧嚴と長安に行つて羅什に隨つた。後建康に還り青園寺に居つた。元嘉十一年の十一月廬山の精舍にあつて大衆を敎化しつゝ安然として示寂した。道融は汲郡林慮の人で十二歲で出家したが後羅什に隨つて翻經の助けをした。什の示寂後は長安から彭城に歸つて常に講說をして居つたが隨從する徒衆三百の多きに達したと云ふことである。七十四歲の高齡を以て彭城で示寂せられた。著書には法華大品金光明等の註疏がある。僧叡は魏郡長樂の人で年十八にして僧賢法師の弟子となり二十四歲にして什門の人となりた。四方願生の行者であり春秋六十七と云ふに四方を合掌してなくなつたと云ふことである。肇法師は是等の諸師と共に羅什門下の四哲と稱せられて羅什の弟子三千中の傑物であつた。

三。四論。　既に申した通り物不遷論寺の四論である。

四。至人は空洞にして象なし。　肇論の第四涅槃無名論の文で萬物を會して己となす處の至人の境界を申したものである。

五。古人道く靈乾坤大地等。　雲門大師の法を嗣いだ緣密圓明大師の申された言葉である。

六。石頭因みに肇論を看る。　南岳石頭の希遷禪師は唐の天寶の初めに衡山の南寺に往かれた。後其の寺の東に大石あり。狀臺の如きところがある。その上に庵を結んで其處に居られたから時の人が石頭和尙とよんだと云ふことである。和尙はある時肇論に萬物を會して己とするものは其れ唯聖人歟とある文を見て豁然大悟されたが後に竺土大仙心云云と云ふ彼の有名な參同契一篇を著はされた。

七。道ふことを見ずや向上の一路千聖も不傳。　これは盤山寶積禪師の申されたことである。這箇向上の一路に至りては、黃面の老子も說くに由なく、歷代の祖師も傳ふるに由なしで何とも人に尋ねることは出來ぬからお互ひに一路之れ何物

ぞと是非とも參得しなければならぬと云ふ。

第五節　頌

聞見覺知非一一　一一森羅萬象無有一法。七花八裂。眼耳鼻舌身意一時是箇無孔鐵鎚。　山河不下在鏡中觀我這裏這箇消息。長者自長短者自短。青是青黄是黄。爾向什麼處觀。　霜天日落夜將レ半　引爾入草了也。徧界不曾藏。切忌向鬼窟裏座。　誰トニカ共澄潭照レ影寒有麼有麼。若不同床眠焉知被底穿。愁人莫向愁人說說向愁人愁殺人。

【讀方】　聞見覺知一一に非ず。森羅萬象一法もあることなし。七花八裂。眼耳鼻舌身意一時に是れ無孔の鐵鎚。山河は鏡中に在て觀ざれ。我が這裏這箇の消息なし。長者は自から長く短者は自から短かし。青は是れ青黄は是れ黄。爾什麼の處に向つてか觀ん。霜天月落ちて夜將に半ならんとす。　爾を引て草に入り了れり。徧界曾つて藏せず。切に忌む鬼窟裏に向つて座することを。誰れと共にか澄潭影を照して寒き。　有りや有りや。若し同牀に眠らずんば焉んぞ被底の穿つを知らん。愁人は愁人に向て說くこと莫れ愁人に說向すれば人を愁殺す。

【字解】　一。森羅萬象一法もあることなし。　聞見の覺知のところこれは何を云はれたものであらう。天地も萬物も自己も他人も本來無一物であつたものではないに。

二。七花八裂。　森羅萬象一々自彊を守りて猫は猫杓子は杓子で唯我獨尊。他人の御厄介にはなつて居りませぬと云ふ。

三。眼耳鼻舌身意一時に之れ無孔の鐵鎚。　眼は眼で獨立耳は耳で獨立。眉毛は眉毛。鼻孔は鼻孔各々獨立自尊で無孔の鐵鎚と同樣決して他から手はつけられぬと云ふ。

四。我は這裏這箇の消息なし。　此の方などは始めからそのやうな彼れ此れのと沙汰をしたことはない。

五。長者は自ら長く短者は自ら短し。　鶴の脚は鶴の脚、鴨の脛は鴨の脛であるから、長いも短いも只其の儘でと云ふ。

六。青は是れ青黄は是れ黄。諸法各々獨立自尊で少しも他の役介にはなり申さぬと云ふ。此れが法華經に諸法住法位世間相常住と說かれてある所以である。

七。爾什麼の處に向つてか觀ん。　然し鏡中に在つて見ざれ卽ち自己の心を判斷することを許さぬと云ふならばどこでどうして見たものであらう。

八。爾を引て草に入り了せり。　到頭雪竇の古狸に妙なところへ引きづりこまれたと其の慈悲の深きを讃嘆する。

九。徧界曾つて藏せず。　夜半の光景その儘にして十方法界一枚の現成公案ぞと云ふ。

一〇。切に忌む鬼窟裡に向つて座することを。　皆さん月落ちて夜がふけたからとて何も見へない暗黑裡の墓場で腰をすえてはなりませぬぞ。定めし狸が出ることであらうぞと注意する。

一一。有りや有りや。　雪竇が誰れと共にかと申さるゝが同道の者はあるかなと云ふ。

一二。若し同牀に眠らずんば焉んぞ被底の穿つを知らん。　被底は被ひ物の底で蒲團の裡のことであるから、一所に抱かれて寢て居るものでなければ到底蒲團底の破れはわかるまいと云ふ。

一三。愁人は愁人に向つて說くこと莫れ愁人に說向すれば人を愁殺す。　同病相憐れむと申して南泉も雪竇も皆此事について千辛萬苦せられたものであるが、我も又同樣であつたから、其の樣な話を聞けば眞に同情の感に堪へぬと云ふ。

【講義】　聞見覺知一一に非ず。此の一頌は七言四句の絕句體である。第一句のこゝろは眼では見耳では聞き鼻では嗅き舌では味ふと眼耳鼻舌身意の六根が夫れ夫れ色聲香味觸法の六境に對して。あれは花である月であると見分け。之れは琴である笛であると聞きわけるので、何も眼が耳

の役介にもならず、花が月の役介にもならぬ。花は自ら咲き鳥は自ら謠ふ。六根各々自位に住し萬象自ら法位に住して森々羅々ことゞ〳〵く千差萬別である。猫は鼠を追ふてニャンとなき、犬は盗を守つてワンと鳴く猫が鼠を取るに犬の加勢を乞ふ氣使ひもなく、犬が賊を追ふに猫に留守番を求めたと云ふ話もきかぬ。萬物事々物々現成公案その儘であるに。何の用あつてか同體だの一體だのと餘計な心配をして無疵の天地萬物を疵物にするのであるぞ。山河は鏡中に在つて觀ざれ。山河は天地萬物の代表者として擧げたのである。何も天地の萬象を態々自己の心鏡の中に推しこめて見るには及ばぬ眼に色を見る當體其の儘に十方法界沙門の一隻眼で其の他に性の心の一體の同根のと餘計な閑葛藤を弄するには及ばない。松は千年の翠を保つと云ふが葛藤のためには枯れると云ふから皆さん馬鹿な心配はしないが宜しいぞと云ふ。霜天月落ちて夜將に半ならんとす。三更夜が更けて草木も眠る丑滿の時には月將に西山に沒せんとして怪鳥一聲耳をつんざく。偖こう云ふ時に誰ありてか物好きにも月を求めて水邊に逍遙するものがあらう。誰と共にか澄潭影を照して寒き。鏡の如く澄みわたつた碧水に、將に沒しなんとして彼の山に傾いた月影の物すごくも水面に映つるのはこれはそも〳〵如何なる道理であらう。月と水、水と月、月が水を戀ひ慕ふたのであらうか水が月にあこがれたと云ふのであらうか。月に映つる權利があるのであらうか水にうつす義務があるのであらうか。イヤ〳〵。月影はどこ迄もつきかげ。澄潭はどこまでも澄潭で各々箇々獨立であらう。諸君餘計なことはさしおいて我れと我が眼をさましてごらうじ清風颯々氣自ら冷しの感があるであらう。

第六節　頌評唱和譯

南泉は小睡語雪竇は大睡語然も夢を作すと雖も、却つて箇の好夢を作し得たり。前頭には一體と說き這裏には不同と說く。聞見覺知一一に非ず山河は鏡中に在つて觀ざれと。若し鏡中に在つて觀て然して後方に曉了すと道はゞ則ち鏡處を離れず。山河大地草木叢林鏡をもつて鑑みることなれ。若し鏡をもつて鑑みば便ち兩段とならん。但只山は是れ山水は是れ水法々法位に住して世間相常住なるべし。山河は鏡中に在つて觀ざれと。且らく道へ什麼の處に向てか觀ん。還つて會すや這裏に到つて霜天月落ちて夜將に半ならんとすると向ふとす。這邊は儞がために打併し了れり。那邊は儞自ら相はかれ。還つて雪竇本分の事を以て人のためにするを知るや。誰と共にか澄潭影を照して寒き。復自ら照すとせんや復人のために照すとせんや。須らく是れ機を絶し解を絶して方に這の境界に到るべし。卽今也た澄潭を要せず也た霜天月の落つることを要せず。卽今作麼生。

【字解】一。南泉は小睡語雪竇は大睡語。　南泉和尙が花をさして時人此の一樣の花を見ること夢の如くに相似たりと云ふ

たは卽ち南泉の寐語であつて、雪竇が一頌葛藤を打したは卽ち雪竇の寐語の餘りである。お互ひに朝寢坊の野良坊主には相手にならぬが宜しい。

二。鏡中に在つて觀る。　汾陽善昭禪師の頌に森羅及び萬象總に鏡中に在つて圓しと申してあるが今は卽ち自己の心鏡で萬物を見萬物を判斷することである。

三。法々法位に住して世間相常住なり。　これは法華方便品の文である。雲門錄に是法住法位世界相常住。師云く釋迦老師其の處にか去ると見へて居るが、要するところ、猫は猫、杓子は杓子、各々自位を守つて獨立自尊。少しも犬や釜の役介になつて居らぬことを申したものである。

四。那邊は爾自ら度れ。　人人各々目をさまされば知れぬ處であるから、各自に氣をつけて額をうたぬやう。擧丸で蹴つまづかぬやう心掛ければならぬ。

第四十一則　趙州大死底人

第一節　垂示

垂示云。是非交結、處。聖亦不レ能レ知。逆順縱橫、時。佛亦不レ能レ辨。爲二絕世超倫之士一。顯二逸羣大士之能一。向二氷凌上一行。劒刃上走。直下如二麒麟頭角一。似二火裏蓮花一。宛見二超方一。始知同道。誰是好手者。試擧看。

【講義】　是非交結の處、聖も亦た知ること能はず、逆順縱橫の時は佛も亦辨ずること能はず。絕世超倫の士たるものは逸羣大士の能を顯はす。氷凌上に向つて行き劒刃上に走る。直下に麒麟の頭角の如く火裏の蓮華に似たり。宛かも超方なるを見て始めて同道することを知る。誰れか是れ好手の者ぞ。試みに擧す看よ。

【字解】　一。逸羣の大士。　尋常一樣の群集を超越した人と云ふことで、傳灯錄の註には、諸方趙州投子を謂つて逸羣の用を得とすと見へて居る。

二。麒麟頭角。　青原和尙の語に象角多しと雖も一麟足れりと申してあるが、鹿や牛の角ではいかぬ麟角の如き出格のものでなければならぬと云ふのである。

三。火裏の蓮華。　涅槃經に譬へば水中に蓮華を生ずるが如き希有とするに足らず。火中に生ぜば是れ乃ち希有なり。人あり て之れを見ば歡喜を生ぜんと申してある。火中の蓮華は誠に不可思議で稀有のものであると云ふことである。

【講義】　是非交結の處等。永嘉大師が證道歌に或は是或は非人識らず逆行順行天も測ること莫しと申されたと同じことで不可思議向上の行履を論じたものである。是非交結の處と云ふは、彼の第三十一則麻谷持錫の話に於いて、章敬は是々と云ひ南泉は不是不是と云ふたと申してあつたが、これは果して何ちらが是でどちらが非であらう。或は是も非も一致のものであらうか。兎も角其の是非諾訛して分明ならぬ　ところのことである。卽ち禪機を商量する上に於いては、或は是と云ひ或は非と云ひ或は又是とも非とも判然と決斷することが出來ぬ處がある。その是非交結の處は聖も知ること能はず。よし等覺の大士にしても判決を下し得られぬことである。逆順縱横の時は佛もまた辨ずること能はず。これは作家の宗師が人を接化せらるゝに當りて、或は逆に或は順に或は縱に或は横に自由自在時に臨み機に應じて手段を施こされる。こゝになると何處に其の眞意があるとも分らぬので如何やうな四智圓滿の佛陀でも容易に之れを辨明することは出來ぬ。同じ佛陀の中でも彌陀の六八願と藥師の二六の願とは其の立場がちがふ。同じく春風に催されながらも花は紅に柳は綠であつて。鳥は謠ひ蝶は舞ふのである。花の三昧には柳はあづからず蝶の悟りは鳥の知つたことではない。花は花蝶は蝶月は月風は風であつて、其の境界に至りては容易に他から窺知することは出來ない。こゝが自受法樂の境界である。絕世超倫の士たるものは逸群大士の能を顯はす。佛とか聖とか云ふ出格非凡の境界に居つて佛を呵し祖を罵しる底の絕世超倫の禪子であつたならば始めて聖も知る能はず佛も辨ずる能はざる底の消息に通ずることが出來る是の境界の人を逸群の大士と云ふのであるが。この逸群の大士と云ふも假りに名けたまでのことで。聖と云ふも當らず佛と云ふも當らず。たゞ定式の境界を超越した人に對して假りに名けたまでゞある。氷凌上に向つて行き劒刃上に走る。劍樹刀山も何のその鑊湯爐炭。熱鐵羅網鐵牀銅柱と、行き得べからざる處に自由に行き走り得べからざる處を自在に走ると云ふが逸群の大士の妙用である。直下麒麟の頭角の如く火裏の蓮華に似たり。麟角は出格の義で火裏の蓮花は希有の義であるから誠に希有難得で不思議なことであると云ふのである。宛かも超方なるを見て始めて同道なるを知る。敎家に唯佛與佛の知見と申すことがあるがそれと同じ意味で其の超佛越祖の境界に至り得た人と到り得た人との相見であつたならば。始めて同道唱和が出來ると知音のさまを申したものである。誰れか是れ好手の者ぞ。これは誰か耻かしからぬ敵手はあるかなと本則を喚び出す順備としたもので試みに擧す看よと例の如く趙州投子二大老の出格逸群なる因緣を提出せられた。

第二節　本　則

擧趙州問投子。大死底人却活時如何。有恁麼事。賊不打貧兒家。慣曾作客方憐客。投子云。不許夜

行一投レ明ニ須レ到。看樓打樓。是賊識賊。若同床臥。焉知被底穿。

【讀方】　擧す趙州投子に問ふ。大死底の人却つて活する時如何。恁麼の事あり。賊は貧兒の家を打せず。曾つて客と作るに慣れて方に客を憐れむ。夜行を許さず明に投じて須らく到るべし。　樓を見て樓を打す。是れ賊は賊を知る。若し同床に臥せずんば焉んぞ被底の穿てるを知らん。

【字解】　一。趙州投子に問ふ。　趙州は申す迄もなく觀音院の從諗禪師で馬祖大師の法を嗣がれた人である、投子は舒州投子山の大同禪師と申して翠微無學禪師の法を承けられた高僧である。

二。大死底の人却つて活する時如何。　大死底と云ふは、佛法玄妙是非得失一切を放却して死漢の如くなり果てたところで大悟徹底と空無相三昧の大寂定に入つたところを申したのである。活する時と云ふは其の無心寞に入つて爰ぞと尻と据えず に再び活し來つて大活現前と出るところである。彼の岩に激し流に逆つて瀧となり瀨となりて蹇々と流れ來つた河が一度大洋に歸すると云ふと風のどかに波靜かに一面鏡の如くであるが、然しながら此の鏡の如く平和な水が時に或は白浪滔天と天地もくつがへさん計りに荒れることがある。そこを却つて活を得たと申すのである。

三。恁麼の事あり。　ソうそんなこともあつた。一度その時節がなくてはならぬと云ふ。

四。賊は貧兒の家を打せず。　サスがは大賊の趙州であるから貧乏人の家には目をかけずに投子山の大富豪を襲ふたのであると云ふ。

五。曾つて客となるに慣れて方に客を憐れむ。　趙州も自分が兼て旅をして雪に雨に幾多の難義をせられたのであるから友人の投子がどうであらうぞと同情の念が深いのであると云ふて、なんと皆さん之れは佛種をして斷ぜざらしめんがための趙州の心使ひであるからこの大恩を忘れてはなりませぬぞと注意する。又。聖能く聖を知ると申し同病相憐むとも申して同じ種類の病人であるから趙州は投子にはひとしほ同情が深いと云ふ。

六。夜行を許さず明に投じて須らく到るべし。　夜分では分らないから明朝くるが宜しいと云ふのであるが。これは趙州が本來無病の處に死するの活きるのと二途に渉つて居るものであるから、貴公は顏を洗つて出なほすがよからうと申したものである。然し投子の答話にも夜と晝と明と暗との二途があるがこれはなんとしたものであらう。兎に角之れが横綱同士の取組である。

七。樓を見て樓を打す。　風を見て帆を使ふのが舟乘りの名人である投子和尙も好い折を見られたものぞと投子の作略を稱揚する。

八。是れ賊は賊を知る。　蛇の道は蛇が知ると云ふが投子もさるものであると云ふ。

九。若し同牀に臥せずんば焉んぞ被底の穿てるを知らん。　同じ寢牀に抱かれて寢たものであるからお互ひに內情を知り合ふて居ると云ふ。

第三節　本則提唱

趙州問ニ投子一大死底人却活時如何。下語云。旬裏呈レ機。

死んだ者が却つて活せうずるやうに云ふたが賊なり。

先師下語に探竿影草。

投子云不レ許ニ夜行一投レ明ニ須レ到。下語云。勘破了也。

夜行と云ふは賊ぞ。投レ明と云ふはあきらかに投じて見れば賊の上を知ると云ふ義。いかに賊を云はるゝとも夜行を許さずと云ふた也。夜行は盜人也。又云く深辨ニ來風一。先師云く深辨ニ來風一と云

ふ心を辨ぜよ。句面はとりあはず此の古則に限つて賊と機の方備つて云ふた處が投子の働なり。先師下語に月在二青天一水在レ瓶。洞中山色四時好。

大死底人却活時如何。句裏呈レ機劈面來。

大死底の活すると云ふたは賊なり。されども投子を如何と試みた機あり。故に面は機の方の句を用ふる也。

投子云不レ許二夜行一投レ明須レ到。深辨二來風一勘破了也。

夜行を許さゞるは、盗人こそ夜あるきをすれ。夜あるきは無しぞ。明かい日中に來れと云ふ心なり。能く向ふの句を勘破して云へり。此古則は境界のまぎるゝ古則也。先師云く古則の境界を辨せよ。機の境界なり。又賊と關とは同物なり。機と云ふは詞には出さずして意の中に賊のあるを云ふぞ。又關と賊とは詞にキラりとあらはるゝを云ふなり。先師以來此の古則ならでは辨じ分け難しぞと批判なり。又大死底の人却りて活する時如何と見たところ平々なやうなれども問頭に句裏呈機ぞ。又答話も夜行を許さず明に投じて須らく到るべしとは是れも直に云ふて詞に露はさずして意に毒氣を含む也。此の辨常の人には許さゞるなり。

趙州問二投子一大死底人却活時如何。句裏呈レ機。

一度死したるものは再活せぬ者ぞ。却つて活すると云ふが賊ぞ。句裡呈レ機はつけまい句ぞ。還老賊などゝ云ふ句をつけてよきことなれども、先師以來つけ來る程に今もつくる也。句裏呈機の句は機の句なり。一句の中に機を轉ずる心ある程に却つて活すと云ふ時は惡しいぞ。

投子云不レ許二夜行一投レ明須レ到。鏡在二機前一。勘破了也。

餘りに夜あるきな召されぞ。白晝に御出あれ。餘り盗人な召されぞ正直に御入りあれと云ふぞ。却活と云ふ心を見ぬいて鏡にうつつて見た如くなぞ。勘破了也は却活する處を見すまいたと云ふこゝろ。

【請益】不レ許二夜行一投レ明須レ到と云ふから前を見はなれとも。衲僧向上には何事も一邊にはないものぞ。機なれとも關の方もあり。關なれども機の方もあり。一方向きではないぞ。初の拶。何故に語は賊の言句なるに機の境界には用いたぞ。此の古則には言句の上に一つも心なし。趙州の子細ありて笑裏に鋒を藏して投子を勘辨せられた程に機の境界が面で關がうらぞ。言句の上には心なし。只投子を如何んと州の勘辨しられたこと機が面也。

趙州問二投子一大死底人却活時如何。句裏呈レ機。

大死底の者は何としていきかへらうことぞ。それを問ふは趙州の句中を以て如何と試みられたなり。

投子云不レ許二夜行一投レ明須レ到。勘破了也。

趙州の句中をやがて投子の心得へて、盗人こそ夜はあるけ。白晝に來て道はれよ。法度たゝしき砌左樣の盗人をば許すまいぞと云ふなり。是れに機と賊が備つたぞ。投レ明須レ到と云ふが機なり。一僧あり有る祖師に問ふ。大死底の人却つて活する時如何。師云く墻壁有レ耳。左樣な白々しいことな云ひぞ。墻壁にも耳が有りて人が聞き知らうぞ。

第四節　本則評唱和譯

趙州投子に問ふ。大死底の人却つて活する時如何。投子他に對して道ふ。夜行を許さず明に投じて須らく到るべしと。且らへ道へ是れ什麼の時節ぞ。無孔の笛氈拍版に撞着す。此れ之れを驗主問と謂ひ亦之れを心行問と謂ふ。投子趙州諸方皆之れを逸群の辯を得とほむ。二老の承嗣同じからずと雖も、看よ他の機鋒相投じて一般なることを。投子一日趙州のために茶筵を置いて相待す。自ら蒸餅を過ごして趙州に與ふ。州管せず。投子行者をして胡餅を過ごして趙州に與へしむ。州行者を拜すること三拜且らく道へ他の意是れ如何。看よ他盡く是れ根本上に向つて此の本分の事を提げて人の爲にすることを。僧あり問ふ如何なるか是れ道。答へて云く道如何なるか是れ佛。答へて云く佛。又問ふ金鎖未だ開けざる時如何。答へて云く開。金鷄未だ鳴かざる時如何。答へて云く這箇の音響なし。鳴て後如何。答へて云く各自に時を知ると。投子平生の問答總べて此の如し。看よ趙州問ふ。大死底の人却つて活するの時如何。他便ち道ふ夜行を許さず明に投じて須らく到るべし。直下擊石火の如く閃電光に似たり。他の向上の人に還して始めて得ん。大死底の人都べて佛法の道理玄妙得失是非長短なし。這裏に到つて只恁麼に休し去る。古人之れを平地上に死人無數荆棘林を過得せば是れ好手と謂ふ。也た須らく是れ那邊を透過して始めて得べし。然も是の如しと雖も如今の人の這般の田地に到ること、早く是れ得難し。或は若し依倚ありて解會するあらば則ち沒交渉。喆和尚は之れを見不淨潔と謂ひ。五祖先師は之れを命根不斷と謂ふ。須らく是れ大死一番して却つて活して始めて得べし。浙中の永和尚道く、言鋒若し差はゞ鄉關萬里直ちに須らく懸崖に手を撒じて自ら肯じて承當すべし。絶後に再び甦へらば君を欺くことを得ず。非常の旨人焉んぞ虔さんや。趙州の問意此の如し。投子は是れ作家亦他の所問に辜負せず。只是れ情を絶し迹を絶す。妨げず會し難きことを。只面前の些子を露はす。所以に古人道ふ親切を得んと欲せば問をもち來つて問ふと莫れ。問は答處に在り答は問處に在りと。若し投子に非んば趙州に一問せられて也た大に酬對し難からん。只他は是れ作家の漢なるが爲めに舉着せば便ち落處を知る頌に云く。

【字解】一。無孔笛氈拍版に撞着す。笛には孔がありてそれを吹て音聲を出して始めて笛と云ふことが出來るのである。又拍版は木を以て作つたもので之れを拍つて聲を出し節を以て音樂を奏するのである。今趙州投子の兩老は云はゞ一人は無

孔底の笛で一人は氈作底の拍版であるが。(氈は毛で以て作つた織物)この孔のない笛を吹き毛氈で作つた版を拍つたならば果してどんな音聲が出で如何なる曲節があるであらう。

二。驗主問と云ひ亦心行問と謂ふ。　汾陽禪師十八問の第七でありて、趙州が投子に向つて此方の心やりを以て其の脚下を勘檢しやうと思ふて拶しかけたが卽ち驗主問で又心行門である。

三。二老承嗣同じからず。　趙州は南泉の法を嗣いだ人であるから南嶽下の兒孫であり。投子は翠微の法を嗣いだ人であるから青原下の兒孫である。

逢磨大師……大鑒慧能―┬―南岳懷讓―馬祖道一―南泉普願―趙州從諗
　　└―青原行思―石頭希遷―丹霞天然―翠微無學―投子大同

四。蒸餅。　蒸し餅か饅頭のことであらう。

五。州管せず。管は管帶でそしらん顏をして居ることである。

六。州行者を禮すること三拜。趙州錄には沙彌とあるがどちらでも宜しい。趙州は投子より蒸饅頭をもらうてもそしらん顏をして居りながら。沙彌に向つて三拜したと云ふことであるが。之れは趙州が直ちに本分の事を提げ來りて尊卑高下を立てぬところで。卽ち本分の上には投子も沙彌も尊も卑も老幼もないのである。

七。如何なるが是れ道答へて云く道。　道とは何物であらう。國道であらうか縣道であらうか是非とも調べて見なければならぬ處を投子は答へて「ハハヽ道かのふ」と云ひ如何なるか是れ佛。と云へば其の藥師佛なるや釋迦佛なるやを答へずして只佛かのと云ふ。此れが投子和尙の平生の問答であつて全く思慮分別に涉らずに花と咲き鳥と謠ふ。月の悟りは風には會せないと云ふがこの意は參究せなければ分るまいと思ふ。

八。古人之れを平地上に云云。　これは雲門大師の上堂の語であると見へて竹庵珪禪師の錄には小參に云く平地上に死人無數等と雲門の語が引いてある。

九。那邊を透過して始めてうべし。　何も變つたことはない依然として舊時の人で相も變らぬ槁木老僧であるとは云ふ。

一〇。或は若し依倚なり。　佛により祖師により他人に泣きついて得たのなればそれは沒交涉であるぞと云ふ。

一一。詰和尙。　眞如墓詰禪師なり。　翠岩可眞の法嗣。

一二。浙中の永光和尙。　蘇州永光院の眞禪師は。雲居山道膺禪師の法を嗣いだ人で此の語はその上堂の語である。浙中は蘇州は西浙の中にあるから浙中と云ふのである。

一三。古人道ふ親切を得んと欲はゞ等。　首山省念禪師の申された言葉である。和尙は法を風穴延沼禪師に嗣がれた方である。

第五節　類則提唱

其一　投子過蒸餅與趙州

投子一日爲趙州置茶筵相待。白過蒸餅與趙州。下語云。魚行水濁。

蒸餅は蒸し餅ぞ。句中の方よりしたぞ。

州不管。下語云。鏡在機前。勘破了也。

句中を心得へて管せざるなり。不管は肯せざる也。勘破了也は、投子の句中を能く勘破して管せられざるなり。

投子令行者過胡餅與趙州。下語云。要二俱勘過。

州も投子も互に句中を勘過してみられた也。蒸し餅がいやならば胡餅をきこし召せと也。

州禮行者三拜。下語云。白雲籠峰頂終不露崔嵬。

遂に鋒芒をあらはさずおしかくして胡餅を賜はるを祝着したと云ふ體をして行者を禮したぞ。蒸餅は饅頭の餡のなきもの也。又云く。句中を終に露はさず推しかくして行者を禮せられたぞと云云。

其二　投子平生問答

有僧問如何是道。答云道。下語云。百花春到一時開。

僧が道と問ふた程に道と答へたまでよ何の道理もない答話ぞ。百花春到れば一時に開くの句も何の道理も無い方ぞ。常には爲人なれどもこゝは現成ぞ。

如何是佛。答云佛。

下語も辨も共に同上。

又問金鎖未開時知何。答云開。下語云。將概披概。

百花春到一時開は開けと云ふと開けたはと云ふと兩意なれども落居同じことなり。未開と云へば早や開けたは也。又開かずんば開け也。未開と云ふ問話を追取つて答へて直指したほどに將概披概なり。何と直指したぞなれば百花春到れば一時に開けよの語に就いて直指したゆへ未開と云ふ開の字に就いて答へたも言葉について直指した方也誰が爲めに開くと云ふも語に就いて直指した方だ。

金鷄未鳴時如何。答云無這箇音響。下語云。車不横推。

這箇の者には何事に音も響も有ふぞ。音響なしと云ふたはマッスグなる道理ぞ。這箇とは本分なり。私に云く金鷄を本分と用いて答へたか。

鳴後知何。答云各自知時。下語云。理無曲斷。

鳴後は時の至るを知るとマッスグに答へたぞ。

第六節　頌

活中有眼還同死兩不相知。翻來覆去。若不蘊藉爭辨得這漢細素。藥忌何須鑒作家若不驗過爭辨端的。過着試與一鑒又且何妨也要問過。古佛尚言曾未到頓是有伴。千聖也不傳山僧亦不知。不知誰解撒塵沙即今也不少。開眼也着合眼也着。闍黎恁麼舉落在什麼處。

【讀方】 活中に眼あり還つて死に同ず。兩ながら相知らず。翻へし來り覆がへし去る。若し蘊藉ならざれば爭でか這の漢の細素を辨得せん。藥忌何ぞ須ゐん作家を鑑みることを。若し驗過せずんば爭でか端的を辨ぜん。過着して

試みに一鑿を與ふる又且つ何ぞ妨げん。也た問過せんを要す。古佛尙ほ言ふ曾つて未だ到らず輒ひに是れ伴あり。千聖も又傳へず山僧も亦た知らず。知らず誰か塵沙を撒くことを解す。　卽今也た少からず。開眼も也た着　合眼も也た着。闍黎恁麼に擧す什麼の處にか落在す。

【字解】一。兩ながら相知らず。　兩は趙州と投子の二大老を指したるものであると云ふ說があるけれども、これはそうではないので趙州の問ひの死と活との二つを指したもので。趙州死活の二つをも知られぬと見へると云ふのである。

二。翻へし來り覆がへし去る。　死かと思へば活。活かと思へば死で。すいかへしヒつかへし明白せぬことであつて、兩と翻がへり風とくつがへす天公の妙手腕に恐れ入るの外はないと云ふ。

三。若し蘊藉ならざれば爭でか這の漢の縞素を辨得せん。　蘊藉は含蓄包容の義と申して閑雅寬容の姿である。乃ち趙州が投子老漢の死活如何を試めされるためには餘程寬廣博大の量でなくんばならぬと云ふのである。

四。若し驗過せずんば爭でか端的を辨ぜん。　雪竇は何ぞ須ゐんと云はるゝが投子の端的は問ふて見なければ分るまいと趙州を揶揄する。

五。遇着して試みに一鑿を與ふる又且つ何ぞ妨げん。雪竇支障はあるまい。出合つた序でにチヨト當つて見た迄のことである。

六。也た問過せんを要す。　卽今問ふて見なければなるまい我も亦問ふて見やう。

七。輒ひに是れ伴あり。　其の古佛が好い道づれであるから心使ひなく旅行が出來ると云ふ。

八。千聖も又傳へず山僧も亦た知らず。千聖も不識。山僧も不可得であると云ふ。評して、父母未生前に到り了つたであらうにホヤギヤと云ふて忘れましたかと云ふ。

九。卽今亦た少からず。雪竇御自身もチリゴミ撒いて居らるゝであらう。某も又仲間入りぞと云ふ。

一〇。開眼も也た着合眼も也た着。開眼も合眼も塵沙を撒かれてはたまつたものでない。明眼の者一人もながらうと云ふ。

一一。闍黎恁麼に擧す什麼の處にか落在す。　結局落處はどうであらうお互ひに尋れて見なければなりますまい。

【講義】活中に眼あり還つて死に同じ。此の一頌は七言四句の絕句體であつて意味は誠に分りやすい。先づ第一句のこゝろは決死の勇士が戰場に倒れて居て死んだふりをして敵將の隙間を伺ふやうに、又熟練した獵師が熊を獵する時に一旦死んだふりを見せて敵に油斷をさせて於いて、隙間を見計つて得物を撲殺するやうに、趙州和尙は飽く迄も活眼の開けた人であるから決して大寂定中に逸居する樣なことはしない。彼の淨土門の法義に一念發起入正定聚卽得往生住不退轉と。彌陀の願力にすがりまゐらせで往生極樂の妙果を得た上には、決して極樂に長くは腰を据えては居らぬ、還來穢國土人天と元の五濁惡世の生死の稠林に還り來つて思ひの儘に衆生濟度をする。之れが往相きはまりて還相と出かけるところである。今趙州和尙もその通り、他の老作家たる投子を勘驗するために死に同すと死漢と同じやうなふりをして、投子に問ひをかけられたことである。藥忌何ぞ須ゐん作家を鑑みることを。藥忌と云ふは藥の忌み物で。服用する藥に依つては夫れ〳〵食物に忌み物があつて之れを食することを禁せねば藥の功能は顯はれぬ。敎外別傳の宗乘に在りては死活だの迷悟だのと云ふことは大禁物である。然るに趙州はその大禁物たる死と活とを提げて大無病底の老作家たる投子老漢を鑑定しやうなどゝ出かけられたは、誠に餘計な

ことであるによつて、趙州御無用になされたが宜しからうと云ふ。古佛尙ほ言ふ曾つて未だ到らず。サテ其の死活を超越して禁物の好物のと云ふことのない大無病底の境界は、三世の諸佛もまだ到り得ざる處でありて、垂示に麒麟の頭角の如く火裏の蓮華に似たりと云ふ越格超方のところであるが、投子老漢は何と拶せらるゝことであらう。知らず誰れが塵沙を撒くことを解す。塵沙を撒くと云ふは、人の眼に翳を起らせると云ふことで卽ち色々と葛藤を打して言句を弄し伎倆を呈して學人を接化引導する手段のことである。投子老人が夜行を許さず明に投じて來るべしと云はれたところは。誠にお手輕な拶挨、洒々落々たる答へぶりで、丁度塵沙を撒いて人に物を見せしめないのと同じやうに誠に接化引導の好手段であると結んだ。こゝが垂示に冰凌上に行き劒刃上に走るとある味ひで、投子が自由自在の接化の手腕をふるはれたのを稱揚したものである。

第七節　頌評唱和譯

活人に眼有り還つて死に同ず。雪竇は是れ有ることを知る底の人なり。所以に敢へて頌す。古人道く他活句に參して死句に參せざれと。雪竇道く活中に眼あり。還つて死漢に同じく相似たり。何ぞ曾つて死せん。死中に眼あり活人に如同す。古人道く死人を殺盡して方に活人を見、死人を活盡して方に死人を見ると。趙州は是れ活底の人なり。故さらに死問をなして投子を驗取す。藥性忌む所の物を故にもち去つて試驗するが如くに相似たり。所以に雪竇道く藥忌何ぞ須ゐん作家を鑒みることをと、此れは趙州の問處を頌す。後面は投子を頌す。古佛尙言ふ曾つて未だ到らずと。只這の大死底の人却つて活する處古佛も亦曾つて到らず。天下の老和尙も亦曾つて到らず。たとひ是れ釋迦老子碧巖の胡僧も也た須らく再參して始めて得べし。所以に道ふ只老胡の知を許して老胡の會を許さずと、雪竇道く知らず誰れか塵沙を撒くことを解す。見ずや僧あり長慶に問ふ。如何なるか、是れ善知識の眼。慶云く眼あつて沙を撒せず。保福云く。更に撒すべからずと。天下の老和尙曲祿木床上に據つて棒を行し喝を行し拂を竪て床を敲き、神通を現して主宰となるも盡く是れ沙を撒く。且らく道へ如何んか免れ得ん。

【字解】一。古人道く他活句に參して死句に參せざれと。これは德山緣密禪師の申された言葉である。活句下に薦得せば永劫にも忘れず。死句下に薦得せば自救不了也と申して、何事も机の上の議論では役に立たぬから是非とも千辛萬苦水を垂らして働かねばならぬと云ふ。

二。古人道く死人を殺盡して方に活人を見死人を活盡して方に死人を見ると。　これは雲門大師の申されたことである。徹骨徹髓殺しきつたならば活きることもあらう。肉に死して靈に生きると云ふがこのことである。諺にも獅子は其の兒を千仞の深谷に拋却して養育すると申すことであるが、誰れでも一度死んで暗黑を見てこなければ本統に目は醒めるものではない。恐しい。恐しいと思へばこそ彈丸に當るのであるから、なまじな活しだてなどをして却つて死却してはならぬぞと云ふ。

三。古佛亦曾つて到らず。　千聖も不到山僧も不可得であるから何んと皆さん果して這の田地に到り得ることが出來ますかな。

四。碧巖胡僧。　巖は眼の誤りであらう。天竺生れの達磨大師を指したものである。

五。老胡の知を許して老胡の會を許さず。　知つて知らず知らずして知ると申すところで卽ち口先き目先の學問では役に立たぬから是非とも手先き脚先きで覺えて來なければならぬと云ふのである。

六。知らず誰か塵沙を撒することを解す。　棒も喝も竪起拂子も一圓相を畫くも何れも引導接化の活手段に外ならぬが誰れか能く塵沙を撒くことを解するであらう。皆さん果して人の眼に翳を起させることが出來ますかなと云ふ。

第四十二則　龐辭藥山

第一節　垂示

垂示云。單提獨弄。帶水拖泥。敲唱俱行。銀山鐵壁。擬議則闊髏前見鬼。尋思則黑山下打坐。明明杲日麗天。颯颯清風匝地。且道古人還有諱訛處麼。試擧看。

【讀方】　單提獨弄、帶水拖泥。敲唱俱に行ふ銀山鐵壁。擬議すれば則ち闊髏前に鬼を見る。尋思すれば則ち黑山下に打坐す。明々たる杲日天に麗き、颯々たる清風地を匝る、且らく道へ古人還つて諱訛の處ありや、試みに擧す看よ。

【講義】　單提獨弄帶水拖泥。單に提げ獨り弄すと云ふは、些の方便てだても交へずに鎗一本ひつさげて眞蔘に敵陣へ踊りこんで行くやうな姿で宗師家が四の五の論せず單に此の事を提げて學人を接得せらるゝのは卽ち帶水拖泥で漁夫が魚のほしさに醜を忘れて水にひたり泥にまみれる如く、兒を憐れむがために己が醜態を全く忘れた爲人大慈悲の極みである。敲唱俱に行ずれば銀山鐵壁。敲唱は啐啄と云ふも同じことで。敲とたゝけば唱と應ずる、師學對談のときんば問ひつ答へつ其の間に寸分の隙もないことは銀山鐵壁の堅固にして寄りつきやうのないやうなものぞ。

擬議すれば則ち髑髏前に鬼を見る。此の場合に臨んで少しでも躊躇擬議すれば、臆病者が髑髏を見て怖ろしいと思ふて居る中に幽霊が跳り出して來るやうなもの、怖がり小僧が絲瓜を見て南無三寶ブランコ往生ぢやと大聲あげて騒ぎたてるやうなもので。僅かに尋思すれば則ち黑山下に打坐す。少しでも分別に落ちれば早や無間地獄に落ちこんだやうなもので到底浮ぶ瀬はないぞ。諸人卽今之れ如何の境界ぞと眺めて見よ。魔鬼の棲む闇黑界裡に落ちては居らぬか。足が立つか腰が立つか。ナニ足も腰も立たぬとな。此のウロタヘ者奴と云ふ。明明たる杲日天に麗き颯々たる清風地を匝る。されば若し本分の作家とし云ふべくんば恰も旭日の輝き昇るが如く、清風の颯々として面を掃ふが如く、光風霽月如何にも瀟洒たる所がなけらねばならぬ。且らく道へ古人還つて諸訛ありや古人にそんな實例があるかどうか試みに擧す見よ。と本則を提出した。

第二節　本則

擧龐居士辭二藥山一。這老漢。山命二十人禪客一相送至二門首一。也不輕他。是什麼境界。始得。居士指二空中一雪一云。好雪片片不レ落二別處一。無風起浪。指頭有眼。時有二全禪客一云。落二在什麼處一。中也。相隨來也。果然上鈎來。士打一掌。着。果然。勾賊破家。全云。居士也不レ得二草一。棺木裏瞪眼。士云。汝恁麼稱二禪客一。閻老子未レ放レ汝在。第二杓惡水潑了。何止閻老子。山僧這裏也不放過。全云。居士作麼生。龐心不改。又是要喫棒。了呈欺。士又打一掌。果然。雪上加霜。云。眼見如レ盲。口說如レ啞。更有斷和句。又雪竇別云。初問處但握二雪團一便打。是則是。賊過後張弓。也漏逗不少。雖然如是要見箭鋒相拄。爭奈落在鬼窟裏了也。

【讀方】擧す龐居士藥山を辭す。這の老漢怪を作せり。山。十人の禪客に命じ相送つて門首に至らしむ。また他を輕んぜず。是れ什麼の境界ぞ。也た須く是れ端倪を識る底の禪僧にして始めて得べし。居士空中の雪を指して云く好雪片々別處に落ちず。風なきに涙を起す。指頭に眼あり。這の老漢言中に響きあり。時に全禪客といふものあり云く什麼の處にか落在す。中れり。相隨來也。果然として鈎に上に來る。士打つこと一掌。着。果然。勾賊破家。全云く居士也た草々なることを得ざれ。棺木裏に瞪眼す。士云く汝恁麼にして禪客と稱す。閻老子未だ汝を放さゞること在らん。第二杓の惡水潑き了る。何ぞ止だ閻老子のみならや。山僧が這裏も也た放過せず。全云く居士作麼生。龐心改めず。又是れ棒を喫せんと要す。這の僧從頭到尾便ち一掌を着けず。士又打つこと一掌して。果然。雪上に霜を加ふ。棒を喫し了りて欺を呈せよ。云ふ眼に見つゝ盲の如く口に說きつゝ啞の如し。更に斷和の句あり。他のために判語を讀む。雪竇別して云く初問の處においては但雪團を握つて便ち打たん。是は則ち是なり。賊過ぎて後弓を張る。也た漏逗少なからず。然も是の如しと雖も箭鋒相拄ふを見んと要す。爭奈せん鬼窟裏に落在し了れることを。

【字解】一。龐居士。襄州の龐居士は衡州衡陽縣の人で姓は龐名は蘊字は道玄と曰ふ儒者であつたが少にして浮世を厭

ひ眞諦を志求するの念を起して唐の貞元の初め石頭希遷禪師に參して省おり。更に江西に往いて馬祖道一禪師に參し大悟徹底せられた。馬祖の法嗣百三十八人中の隨一であつて僧傳にも載せられてあることである。居士逝去の際には朝野の人士が禪門の龐居士は卽ち毗耶の淨名なりと云ふて哀悼したと云ふことぢやが。詩偈も三百餘篇もありて專門の宗匠も及ばざる位の傑物であつた。

二。藥山。　澧州藥山惟儼禪師は石頭希遷大師の法嗣で靑源行思禪師の法孫である。太和八年二月壽八十法臘六十歲を以て入寂せられた。塔を化城鑒號を弘道大師と賜つた。此の公案は龐居士が馬祖得法の後、諸處の知識等に請益してあるく中元と石頭門下に同參であつた藥山大師の處へ來て入室參禪せられたことぢやが。偖暇乞して歸ると云ふ段になりて、禪師が居士を鄭重に待遇せられる處から門下の衆僧から十人の禪客を撰んで門送居士を送られたことぢやが、それを今錄したものである。

三。這の老漢怪を作せり。　一體此の居士は並々のものでない諸人油斷するなと稱讚した。

四。也た他を輕んぜず。　此の老居士何處が尊いのかの。藥山御丁寧なる待遇ぢや。

五。是れ什麼の境界ぞ。　諸人好く氣を付けて看よ。何が爲めに箇樣な丁重な待遇をせらるゝぞ。

六。也た須らく是れ端倪を知る底の衲僧にして始めて得べし。　此の居士を送ると云ふことは儞等無眼子の知らざること。參禪の大事に於いて能く其の始終を知るものでなければ出來ないことぞと云ふ。

七。好雪片々別處に落ちず。　現在目前の風光をとらへ來りて、別處に落ちずと十人の禪客のために居士が拈じ來られたところで好餌を下して獰龍をつらんとする居士の婆心である。

八。風なきに浪を起す。　居士いらぬわるじやれぢや。餘計なことをせらるゝなよと誥めて座下を顧みて諸人何やら物ありそうなぞ。能く看よと云ふ。

九。指頭に眼あり。諸人見よ。居士の指頭に目玉があるわ。鐵眼銅睛であるから一目に十方法界涯を見とをすであらう。

一〇。老漢言中に響さあり。　諸人能く聞きやれ。別處とは何處ぞ。きゝすてにするなよ。

一一。中れり。　それ云はぬことか居士の鎗玉にあげられたわ。と云ふてよくも中つたぞと冷やかす。

一二。相隨來也。　釣り上げられたの。御伴かな。

一三。果然として鈎に上り來る。　居士の餌にかゝつたぞ、ソレ云はぬことか口惜しい。

一四。士打つこと一掌。　ピシヤリと御見舞申して此の鈍物何ウロヲへたこと云ふ。

一五。着。　好い手が見へた。正にそうあるべきところと贊成した。

一六。果然。勾賊破家。　ソレ見たことか居士の口車に一杯のせられたに。賊を引き入れて破家散宅カラにせられただらうが。と一掌喰はされた處を笑つた。

一七。草々なることを得ざれ。ソウ麁々かしくむやみに打たれるなと愚痴をこぼす。

一八。棉木裏に瞠眼す、　イヤ何と云ふても性根があるまい。生き死人ぢやと云ふ。

一九。鬧老子汝を放さゞることあらん。　偉らそうに貴公は禪客などゝ云ふて居るが今に生死岸頭に立つたら閻王の鐵棒を免るゝこと出來まいぞと誡められたところ。

二〇。第二杓の惡水潑き了る。　前には平手でピツシヤリ今度は口を極めて惡水を全禪客の項逢からザブリ。之れが居士の大慈悲の惡手脚である。

二一。何そ止鬧老子のみならんや。　山僧が這裡も也た放過せず。鬧覽の裁判迄に及ばぬ悶悟抔も許すことでないぞ。

二二。麁心改めず。　性根玉のない奴ぢや。亦何やらグズツキやる。三十棒がほしいのか。

二三。又之れ棒を喫せんを要す。　まだ食いたらぬか。

二四。這の僧從頭到尾便を着けず。　どこ迄も不都合なやつぢやほどに。勘忍はならぬと云ひもあへず。

二五。士又うつこと一掌。ピシヤリと御見舞申した。

二六。果然。　それ希望通りである。
二七。雪上に霜を加ふ。　かされ〳〵の醜態ぞ。
二八。棒を喫し了りて、欵を呈せよ。ソレ白狀せよ又御見舞申すぞとどこ迄も居士の婆心。
二九。　眼に見つゝ盲の如く口に說きつゝ啞の如し。此の鈍坊主奴。目前にチラつく好雪片々が見へぬのか又其の落處が云へぬのか。盲啞兼帶の木偶めが舌でもかんで死んで仕舞へと云ふ。
三〇。更に斷和の句あり。　斷和の句は譬へば二人爭ひ競ふことありて官に陳べ告ぐれば。官卽ち之れを斷つて或は其の一勝一負の者を斷り。或は二人を斷つて、俱に爭ふべきことなからしめて之れを和すべしと云ふが如しと云ふから。絕交などたして居る人の間を仲裁して仲なほりさせることである。そこで今は、居士は喧嘩の仲直りのやうな云ひ分をせられるが夫れには及ばぬことであると云ふのである。
三一。他のために判語をよむ。　居士判決狀を讀みきかせられるゝのの。
三二。雪竇別して云く云云。雪竇の別語で老人が自家所見のある處を述べらるゝのぢや。我れ雪竇ならばそんなくだしいことはせぬぢやて。最初から雪玉こしらへてブツケてやるのぢやと云ふ。
三三。是は則ち是なり賊過ぎて後弓を張る。雪竇よいはよいが賊過ぎての棒ちぎり。後の祭で何の役にも立たぬと云ふ。
三四。也た漏逗少からず。　雪竇雪を握るつてイラヌことぢや。我れ圖悟ならば初めから横面ぢやと云ふ。
三五。然も是の如しと雖も箭鋒相拄ふを見んと要す。　箭鋒相拄は寶鏡三昧にも出てある語で弓の名人が互ひに双方から射た矢が途中でカチリと出合ふて落ちたと云ふ故事で。雪竇と居士が箭尻を合はそうと思はるゝやうであるが名將の立ち合であるから定めし一段の見物であらうと云ふ。
三六。爭奈せん鬼窟裏に落在し了れることを。　何と云ふても後の祭り。丁稚どもの空評議で役には立たぬ。

第三節　本則提唱

鹿居士辭藥山。山命十人禪客相送至門首。居士指空中雪云好雪片々不落別處。下語云。紙尺在手。挽鈞搭索。

禪客を嘲弄して云ふたぞ。先師下語に盡大地是白漫々。逼界白漫々。

時有全禪客云落在什麼處。下語云。只見雖頭利不知鑿頭方。

本分計を心得へて句中を見はずしたぞ。又。狂狗趁塊。實頭なる禪客なり。先師下語に蹉過也不知。

士打一掌。下語云。劈殺人。痛處下針錐。

ヒツゝメテの心也。痛處下針錐。句中をみはづしたを打つていためたぞ。又云く直罰爲人したぞ。先師下語に無孔鐵鎚當面擲。

全云居士又不得草々。下語云。一處不通兩處失功。棺木裏瞪眼。

爲人して打たれたれども句中を心得ずして草々と云ふたぞ。左樣に麁々に人を打つものかと隨分と思ふて云ふたぞ。草々は聊爾の義なり。先師下語に可痛可悲。

士云汝恁麼稱禪客圖老子未放汝在。下語云。白棒不在手耶。

左樣のふぬけた禪客ならば閻老子の前をば什麼として通らうぞと云へり。未だ汝を放さゞるあらんと云はうよりも。何故に打たなんだぞと見かけてしたる下語なり。先師下語に獅子咬レ人。倚レ天長劍逼レ人寒。

全云、居士作麼生。下語云。鈍鳥逆レ風飛。死來多少時。

先師下語に切忌隨レ他。

士打一掌云、眼見如レ盲、口說如レ啞。下語云。要レ知二痛痒一。痛處下二針錐一。

爲人して云ふたなり。先師下語に前箭猶輕後箭深。

雪竇別云、初問處但握二雪團一便打。下語云。大遲生。可惜許。

雪竇雪團を握つて便ち打せんと云はれたは好答話なり。然れども事畢りて後の言句たる間太だ遲生と云ふ也。又初問の答話に打か喝するかする處を全禪客句中を見はずしたぞ。此の雪竇ならば雪團を握つて打せん物を。あつたらものをと云ふ心で可惜許と下語する也。又云く臨濟宗の眼から見下して太遲生と云ふ也。居士は向上の者ぢや。其れ棒喝を下さゞる處を別して後に云はれたは太だ遲いぞと見かけて云へり。先師下語に斬レ釘截レ鐵。劍握二甑人手一。

第四節　本則評唱和譯

龐居士は馬祖石頭の兩處に參す。頌あり。初め石頭に見みへて便ち問ふ萬法と侶たらざる是れ什麼人ぞ。聲未だ斷せざるに石頭に口を掩却せられて箇の省處あり。頌を作つて道く。日用の事別なし。唯吾れ自ら偶諧す。頭頭取捨に非ず。處々張乖を設し。朱紫誰れか號を爲す。青山點埃を絶す。神通并びに妙用。水を運び及び柴を運ぶと。後に馬祖に參して又問ふ萬法と侶たらざる是れ什麼人ぞ。祖云く爾が一口に西江水を吸盡せんことを待つて卽ち汝に向つて道んと。士豁然として大悟す。頌を作つて云く。十方同聚會。箇々學無爲。此れは是れ選佛場。心空及第して歸ると。佗は是れ作家なるがために後に列刹相望んで至るところに競ひ譽む。藥山に到つて盤桓すること既に久し。遂に藥山を辭す。山佗を至重して十人の禪客に命じて相送らしむ。是の時雪の下るに値ふ。居士雪を指して云く。好雪片々別處に落ちず。全禪客云く、什麼の處にか落在する。士便ち掌す。全禪客既に令を行ずること能はず。居士令一半を行ず。令行すと雖も全禪客恁麼の酬對也た是れ他の落處を知らざるにはあらず。各々機鋒あつて卷舒同じからず。然も居士の處に到らざることあり。所以に他の架下に落つ。他の殼中を出ずと雖も、居士打し了りて更にために道理を說いて云く。眼見て盲の如く口說て啞の如しと。雪竇前語に別して云く、初問の處に但雪團を握つて便ち打んと。雪竇恁麼に他の問端に辜かざらんと要す。只だ是れ機遲し。慶藏主道く。居士の機掣電の如し爾が雪團を握んことをまたば幾れの時にか到らん。聲に和して便ち應じ聲に

和して打せば、方に始めて勦絶せんと。雪竇自ら佗の打處を頌して云く。

【字解】一。石頭に口を掩却せられて。　居士口が臭くて鼻向けならぬわ。だまれと云ふ。

二。日用事別無し等。　行住坐臥疑るも起きるも別のことはない。自受法樂で自分獨りが樂しむのである、頭々取捨に非ず。何も是か非のと云ふに及ばぬ。順の逆のと論ずに當らぬ。赤いの紫のと由なきことぢやと云ふ。

三。十方同聚會箇々學無爲。　人人行住座臥都べて無爲の學道であり一擧手一投足都べて此れ道場である。

四。列剎。剎は浮圖のことで諸寺諸山と云ふ程のこと。

五。盤桓すること久し。盤桓は進まざるの貌で滯留することぢや。藥山の室に滯留して暫く參禪して居られたと云ふ。

六。所以に他の架下に落つ、　全禪客の手脚が居士の手段に及ばなんだと云ふ。

七。彀中。　弓を張りて射るに箭端當る的の地なりで金的のことである。禪客の答處マトをはづれたと云ふ。

第五節　類則提唱

其一　萬法

龐居士參馬祖問不與萬法爲侶者是什麼人。

侶とならざる者は自性なり。先師拶して云く、自性は什麼としたる者ぞ。辨ず自性は虛空の如くなるものぞ。拶して云く。虛空の如くなるものは眼に見ゆるものか見へざるものか。辨ず。眼に見へざるものなり。法華經に云く。諸の法性を觀するに二相あることなく。猶ほ虛空の如しと說き給ふなり。眼にも見へざるものは、聲詞にも出でざるものなり。又金剛經に云く、若し色を以て我を見音聲を以て我を求めば是の人邪道を行ず如來を見ること能はずと說き給ふ也。下語に云く身法無體心想無體。先師拶して云く、提露して見よ。手を握つて提げ露はして見する勢を作す。先師拶して云く。提露して見する手の中に道理が有るか無いか辨せよ。辨ず。提露して見する手の中に限らず。ない道理は手の外にも彌淪してあるものなり。拶して云く前後如何。下語に云く在前忽焉在後。手を以て前後を握つて提露して見する模樣を作す。拶して云く頭上如何。下語に云く頭上漫々。頭上へ手を擧して提露して見する勢を作す。拶して云く脚下如何。下語に云く脚下漫々。手を以つて脚下を提露して見する勢を作す。拶して云く左右如何。下語に云く左右逢源。左右を握つて提露して見する勢を作す。拶して云く畢竟如何。下語に云く逼塞如何。虛空の空は空にして無なり法性空は空にして眞空なり。拶して云く本分に名をつけ來れ。吹毛劍と名付けたり。又云く太阿寶劍と云ふ。本分の名を吹毛劍と名付けて行住坐臥に生死の根源を截斷して斬るべし。

祖云待儞一口吸盡西江水即向儞道。下語云。漏逗不少和盤推出夜光珠。

平生心膽向人傾。

本分を爲人して云へり。

士豁然大悟。作頌云。十方同聚會。箇々學無爲。此是選佛場。心空及

第歸。下語云。萬里一條鐵。

選佛場と云ふは佛祖の言句を擧揚して今其れを勘辨する道場を云ふ也。俗の諺に合戰をして互に勝負を決する如く。馬祖に言句を擧揚して卽ち大悟徹底して頌を作つたぞ。及第と云ふは詩を作る時。先題を出しおくに數人よりて詩を作る。其の詩を秤して題に契當して作りたものが其の題を引いて歸る知く。瓦解氷消して頌を作りて及第して歸ると云ふなり。佛祖の言句を擧した處は色相の上から擧した程に色相に用ふる也。本分を了畢して歸ると云ふた處を本分に用ひて萬里一條鐵と見るなり。先師云く、傍出には何れも古則に注脚をつけて下語多し。的傳向上の請からいらざることを削りのけて、簡要の言句計りを傳受すると云云。

【請益】是什麼人。拶して云く、虛空の空と自性の空と是れ同なりや別なりや。辨ず。別なり。拶して云く別の理を辨せよ。虛空の空は空にして無なり。自性の空は空にして眞空なり。故に法華經に云く。唯此の一事實にして餘の二は則ち眞にあらずと。一事實なりの實の字は眞空の空の一字に用ひ。非眞の非の字空にして無なりと云ふ無の一字に用ゆ。二則の二字に心なし。拶して云く畢竟如何。手を放下したは本分は根本ないものぞと響く色。又七花八裂。拶して云く意旨如何。下語に云く看落在ㄴ地。手を放下して云く七花八裂は花の輪などが咲く計りで風に散じて庭にしきたる如く、本分の無い道理は充ち滿ちてあると云ふことを知らしめんとて看落在ㄴ地と云ふ看の字爲人なり。拶して云く落在ㄴ後如何。拾ふ勢を作して云く收拾して修補す。本分を自由自在におつ取りて振る舞ふと云ふ義なり。此の請益は手を放下すると又拾ふ勢を作すとが字眼なり秘曲なり。此奥に侍者を喚んで則ち引くべし。

第六節　頌

雪團打雪團打　爭奈落在第二機。不勞拈出。頭上漫漫脚下漫漫。龐老，機關沒可把　往生有人不知只恐不恁麼。天上人間不ニ自知一。是什麼消息。眼裏耳裏絕瀟灑　如盲口說如啞。瀟灑絕　作麼生。向什麼處見龐老與雪竇。碧眼，胡僧難ニ辨別一　逢磨出來向爾道什麼。打雲團黎道什麼。一坑埋却。

【讀方】雪團打雪團打。爭奈せん第二機に落在するを。拈出するを勞せされ。頭上漫々脚下漫々。龐老の機關沒可把。往々人の知らざるあり。只恐くは恁麼ならざらん。天上人間自から知らず。是れ什麼の消息ぞ。雪竇却つて知るや。眼裏耳裏絕はば瀟灑。箭鋒相拄ふ。眼に見つゝ盲の如く口に說きつゝ啞の如し。瀟灑絕す。作麼生。什麼の處に向つてか龐老と雪竇とを見ん。碧眼の胡僧も辨別し難し。逢磨出で來て爾に向つて什麼とか道はん。打て云く雲黎什麼と道ふぞ。一坑に埋却せん。

【字解】一。爭奈せん第二機に落在するを。　雪竇後れた第二機である。何故に居士の空中を指さゞる前に一拶を與へなんだかと圜悟の野治るところ。

二。拈出するを勞せされ。　モカ運い苦勞の仕損ぢやと云ふ。

三、頭上漫々脚下漫々。何處も彼處も雪だらけ。一天銀世界となり枯木花を綴る好景色である。

四。往々人の知らざるあり。　雪竇没可把と云はるゝが、其處のところ大抵の人は得知るまい。

五。只恐くは恁麼ならざらん。　雪竇そうは云はれるけれど。居士もさるもの巧くはゆくまいと云ふ。

六。是れ什麼の消息ぞ。　一體此れは何のことを云つたものであるか。諸人參究せよ。

七。雪竇却つて知るや。　雪竇天上人間と云はるゝが御手前はどうぢやの。と暗に門下に響かす。

八。箭鋒相拄ふ。　カチリと鳴つた。矢先きと矢箭が途中でヒシリと往き合つたぞ。敲唱俱行でよい云ひ分ぢやと云ふ。

九。眼に見つゝ盲の如く口に説きつゝ啞の如し。盲啞衆帶の不具者であると居士が本則で云ふたも矢張りこゝの趣である。

一〇。作麼生。　その瀟灑を打ち拂つて何とするぞ。諸人何んと辨別しやうの。

一一。什麼の處に向つてか龐老と雪竇とを見ん。　龐老ぼ雪を拈し雪竇は雪を握る。雪を拂ひ去つたら何んとせらるゝであらう。隱れ場があるまい。

一二。達磨出で來つて爾に向つて什麼とか道はん。達磨が出て來られても何とも云ふまい。仕方がなからうと云ふ。

一三。打して云く闍黎什麼と道ふぞ。　ヒシヤリと打棒一下して雪竇何をクドクド云ひやるのかチト氣をつけられいと坐下にひゃかす。

一四。一坑に埋却せん。　達磨も龐居士も雪竇も何をクドクド云ひやるぞ。圜悟一つ穴へ生き埋めにしやう。生かして置けば姦ましい。

【講義】　雪團打雪團打と雪竇老人自分の別語を拈起し來りて。　先き程本則で最初に老居士が空中を指して好雪片々別處に落ちずと云ひ出した時に雪を一握りドシンと打ちつけてやれば好かつたにと云ふたことであつたが、これなる哉、雪團打に限る。と此の手段でなけらねばならんと雪竇こゝ大得意の體であるが。圜悟老人は爭奈せん第二機に落在するを雪竇もう遲いと云ふ。龐老の機關沒可把。當時若し雪團打を實行して、續け打ちに居士のホッペタを打つてくれやうならば、たとひ先方に如何なる禪機玄關があつたからとて、決して手の取りつきやうもなく、定めし手持無沙汰であつたぢやらうものを由良之助遲かりし惜しいことをしたものぢやと云ふて、天上人間自ら知らず。此の好雪片々として宇宙萬物皆同一色の光景は誰ありてそれを知るものはなからう。まして這般一色の點破の手段は天上天下釋迦も達磨も誰れでも角でも識不得であらう。眼裏耳裏絶はだ瀟灑。まして宇宙萬象一色の銀世界中に立つものは、眼耳鼻舌身。頭上も脚下も無垢清淨で一點の塵埃をも止めず。之れより美しいことは無いぞ。瀟灑絶す。爰で雪竇更らに轉換の手段を施こしてその一色瀟灑の處をも打ち拂つてしまつた。さてその瀟洒絶の處は、碧眼の胡僧も辨別し難し。釋迦も達磨も辨別し能はざるところ。千聖も萬聖も識不得ぢやが。諸人夫れ能く辨別して看よとは云ふ。

第七節　頌評唱和譯

雪團打雪團打。龐老の機關沒可把。雪竇居士の頭上に在つて行せんことを要す。古人雪を以て一色邊の事を明す。雪竇の意に道く、當時若し雪團を握つて打ん時。居士にたとひ如何なる機

關ありとも亦構得し難からん。雪竇自ら他の打處に誇る。殊に知らず落節の處あることを。天上人間自から知らず、眼裏耳裏絶はだ瀟灑。眼裏も也た是れ雪。耳裏もまた是れ雪。正に一色邊に住在す。亦之れを普賢の境界一色邊の事と謂ふ。亦之れを打成一片と謂ふ。雲門道く直ちに盡乾坤大地纎毫の過患なきことを得るも猶ほ轉句と爲す。一色を見ざるも始めて是れ半提。若し全提を要せば須らく向上の一路あることを知りて始めて得べし。這裏に到つて須らく是れ大用現前針劄不入にして他人の處分を聽かざるべし。所以に道ふ他活句に參して死句に參せざれと。古人道く一句合頭の語萬劫の繫驢橛什麼の用處か有らん。雪竇此に到つて頌殺し了れり。復た機を轉じて道く只此の瀟灑絶す。直饒ひ是れ碧眼の胡僧も也た辨別し難し。碧眼の胡僧すら尚辨別し難し。更に山僧をして箇の什麼をか說かしめん。

【字解】一。雪竇自ら他の打處に誇る。圜悟など片腹いたい。何故か。雪竇手がないと見ゆる。遲いわ。

二。古人道く。　古人は驛亭の船子德誠禪師なり。藥山惟儼の嗣ぞ。唐の敬宗太和九年示寂。

三。碧眼の胡僧。　高僧傳に達磨の眼紺青色なり碧眼の胡僧と稱すとある。天竺の人なる故に胡僧と云ふぞ。

第四十三則　無寒暑

第一節　垂示

垂示云。定乾坤句。萬世共遵。擒虎兒機。千聖莫辨。直下更無纎翳。全機隨處齊彰。要明向上鉗鎚須是作家爐鞴。且道從上來還有恁麼家風也無。試擧看。

【讀方】乾坤を定むる句萬世共に遵ふ。虎兒を擒ふるの機千聖も辨ずることなし。直下更に纎翳なく全機處に隨つて齊しく彰る。向上の鉗鎚を明めんと要せば、須らく是れ作家の爐鞴なるべし。且らく道へ從上來還つて恁麼の家風ありや也た無しや。試みに擧す看よ。

【講義】彼の佛所說の言敎は修多羅卽ち經と申すことであるが。經は卽ち法なり常なり徑なりで、佛陀の說き給ふ所の敎は、萬古不易の常道であり出凡入聖の要路でありて衆聖も異にする能はず群邪も沮ること能はざる底のものであるからこれを經と申すのである。垂示に乾坤を定むる句萬世共に遵ふとあるは、つまり此れと同義でありで、作家の宗師の一言一句は、十方に透徹して宇宙の眞理を斷定するものであるから。卽ち古今の規則手本となりて誰人と雖も之れに背くことは出來ないのである。而して其の學人を接化引導せらるゝ活手段に至りては、虎兒を擒ふるの

機の如く寸分の隙間あることを許さぬのであり て、中々尋常一樣の活機では役に立たぬことであるが、サテ此の境界は人人各自其れ〳〵獨得の妙處があるもので、人から敎はることも出來なければ人に敎へることも出來ぬたゞ自受自用のところであり て。千聖も辨ずることなし。三世の諸佛も歷代の祖師も窺ひ知ることも出來なければ況して辨ずることの出來ぬ妙境である。然らば其の有り樣はどのやうなものであるかと云ふに、直下更に纖翳なく。如何なる時にも如何なる場合にも纖翳と申して一筋の絲ほどの障りもなく自在自由にはたらき得て、全機處に隨つて齊しく彰る。彼の獅子奮迅と申して獅子は大象を捕ふる時にも全力を出し、小兎を擊つ時にも全力を盡くすと云ふことであるが、今もその通り全機大用一分の缺くるところもなく充分に彰はるゝことである。向上の鉗鎚を明めんと要せば須らく是れ作家の爐鞴なるべし。鉗は銅や鐵を爍すもので鎚はそれをうち鍛へるもの爐鞴は其の銅鐵を鍛へるために火ををこす場所で鍛冶屋とか鑄物師等の道具である。明眼の衲僧が學人を薫陶せらるゝのも全く鍛冶職や鑄物師が金鐵を鍛へる如きものであるからして、若し大機大用を明めんと思へば是非とも作家の爐鞴に投じて見なくては、決して實驗し得るものでないのである。且らく道へ從上來還つて恁麽の家風ありや也た無しや。昔しより此の方是くの如き活機輪を轉じた人があるかと云ふに、それは大いにある。試みに擧す看よ。次下洞山の家風を提出する程に心を止めて看よと云ふ。

第二節　本則

擧僧問二洞山一。寒暑到來。如何廻避。不是這箇時節。劈頭劈面。在什麽處。山云。何不下向二無寒暑一處一去。天下人尋不得。藏身露影。蕭何賣却假銀城。僧云。如何是無寒暑處。嫌殺一船人。隨他轉。也一鈎便上。山云。寒時寒殺閻黎。熱時熱殺閻黎。眞不掩僞曲不藏直。臨崖看虎兒。特地一場愁。掀翻大海踢倒須彌。且道洞山在什麽處。

【讀方】　僧洞山に問ふ寒暑到來す如何か廻避せん。是れ這箇の時節に非ず。劈頭劈面。什麽の處に在る。山云く何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。天下の人尋ぬるに得ず。身を藏して影を露はす。蕭何賣却す假銀城。僧云く如何なるか是れ無寒暑の處。一船の人を嫌殺す。他に隨つて轉ず。一鈎に便ち上る。山云く寒き時は閻黎を寒殺し熱き時は閻黎を熱殺す。眞は僞を掩はず曲は直を藏さず。崖に臨んで虎兒を看る。特地一場の愁。大海を掀翻し須彌を踢倒す。且らく道へ洞山什麽の處にか在る。

【字解】　一。洞山。　曹洞宗の高祖良价禪師である。法系は青源行思、石頭希遷、藥山惟儼、雲巖曇晟、洞山良价と相承したので逢曆大師十一世の法孫である。初め五洩山に行きて禮默禪師に從つて落髮し其後南泉普願、潙山靈祐等の諸師に參して遂に雲巖道人卽ち藥山禪師の法嗣潭州雲巖の曇晟禪師に參して大悟徹底せられた。示寂は唐の宣宗の咸通十年三月八日であり て壽六十有三臘四十二と傳へられてある。勅して悟本大師と云ふ徽號を賜はり塔所を慧覺と申した。其の書き貽された五位又は寶鏡三昧の如きは、總べて參禪する人の實修實證を勘檢する所の標準ともせられて居りて單に曹洞一宗に限らず我が臨濟宗にありても非常に珍重せられて居ることである。

二。寒暑の到來如何か廻避せん。　人生何時も春風駘蕩の春計りではない。金をも爍かす樣な夏も來れば五體を凍らす樣な冬も來る。諸人之れは平々凡々何も廻避と避暑ぢや避寒ぢやなど騷ぎ廻ることはないが、若し夫れ、生死到來の時は如何。迷悟到來の時は如何。其れも並み普通常一樣のことゝして灑々落々生を見ること歸するが如く迷苦を見ること歡樂に對する如くならばよいが、諸人果して這般の大覺悟ありや否。決して避暑や避寒の方法計りでは人生は安全に渡れるものでないぞ。

三。這箇の時節にあらず。卽今其の樣なことを問ふて居るべき時節でないぞ。

四。劈頭劈面。ブツカリ次第である。　寒くても暑くても來たら來させて置いたらよいに。

五。什麼の處にか在る。　一體寒いの暑いのてどこにあるかと云ふて、其の實三界無安猶如火宅と申す。汝の背に火がついて居るが、額にピチヤツとつき當つたが、何と免れやうぞ。ソウ迂路たへるなと責めかけられたところ。

六。何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。　寒い熱いと云ふなら無寒暑の處へ去ればよい。生死煩惱が怖ろしければ無生死無煩惱の處へ去るが宜しいと云ふ。

七。天下の人尋れるに得ず。　盡大地誰が尋れても見當りませぬ。

八。身を藏して影を露はす。　洞山無寒暑の處と云はるゝが、ドウヤラ藏れ場がありそうな。イヤ圓悟見て取つた。ソレ洞山の尻が見へたわ。

九。蕭何賣却す假銀城。　漢の蕭何が單于と戰つた時に、我國には銀の城があるでそれを貴公の國へ贈るからと云ふた處が、敵がその口車に乘つて銀の城を、見やうとて都へ來たのを、蕭何が悉く捕虜にしたと云ふ故事がある。最も之れは事實かどうかは分らぬので睦庵の事苑には書傳に此の說なしと申してある。ソレハ兎に角洞山大師は無寒暑の處と云つて彼の僧を釣られたが、つれるかどうかと云ふ。

一〇。如何なるか是れ無寒暑の處。　ソラ釣られた。此の僧口イヤシイと冷かす。

一一。一船の人を覽殺す。　覽は省也錯也でスカスと訓する時とアヤマルと訓する時とある。省の義で取れば、這僧計りでない。叢林の學者參學の徒悉く洞山の一句下にすかしたぶらかさるゝぞ。ウツカリするなと云ふ。錯の義で取れば、此の僧一人錯まれば幾多の參學の士があやまるぞ例へば乘合船の中一人錯まれば乘員一同の迷惑になる如しぢやと云ふ。

一二。他に隨つて轉ず。畢竟自己に正信がないから人の口車に乘せらるゝのぢや。と叱りとばす。

一三。一鈎に便ち上る。元來口がきたないから釣られたのぢやと散々に學人を警誡する。

一四。眞は僞を掩はず曲は直を藏さず。　寒は寒の儘。熱は熱の儘。洞山僞りもない言ひ分ぢやと云ふ。

一五。崖に臨んで虎兒を着る特地は一場の愁。　斷崖絕壁に臨んで深谷を見る丈けでも手足が慄へて恐ろしいものであるに況してそこに猛虎がうそぶき龍が火を吐いて居るを見たならば特地一場と何處にも彼處にも身の置き處のない程の悲しみであらう。それと同じく煩惱生死と菩提涅槃とを別物と思ひ、裟婆の外に極樂を求めて居るやうな人たちに洞山の是の如き言語を聞かせたならば、其の悲しみと驚きはどんなであらうと云ふ。

一六。大海を掀翻し須彌を踢倒す。　洞山惡辣の手段、活機縱橫なる處を稱揚したもので垂示に乾坤を定むる句とあつたと同じ味ひである。

一七。洞山什麼の處にかある。　諸人卽今自家の洞山はどこにあるぞ。何も昔話ばかりではありませぬぞと注意する。

第三節　本則提唱

僧問二洞山一寒暑到來ノ時如何カ廻避。下語云。問得可二始得一。

先師の下語。梁生招箭。問得可二始得一。

山云ク何不下向二無寒暑ノ處一去上。下語曰。無孔鐵鎚當面擲。

此の僧一時の無眼子なり。無寒暑を知らずして問ふなり。洞山の何ぞ無寒暑の處に向つて去らざるとは、無寒暑は本分なり。此の本分の田地に寒熱と云ふことも無いぞと爲人して云ふなり。先師の下語の風吹不レ入水洒不レ着。

僧云、如何是無寒暑處。下語云。隨レ語轉。狂狗趁レ塊。隨使傲漢。

山云、寒時寒殺闍黎。熱時熱殺闍黎。下語云。何不レ行レ舍。故過一着。

此僧重ねてヌルイことを云ふたぞ、洞山の時は闍黎を寒殺し熱の寒の時は闍黎を熱殺すと云はれたはヌルイ也。臨濟宗ならば棒喝を行せられうずるが曹洞下なる故にヌルイぞ。又云く此の下語は手のひらを見かけて傍人からしたる下語なり。先師の下語に苦瓠連レ根苦。甜瓜徹レ蔕甜。

第四節　本則評唱和譯

黃龍の新和尚拈して云く、洞山袖頭に領を打し腋下に襟を剜る。爭奈せん這の僧甘はざることを。如今箇の出來を黃龍に問ふこと有らば、且らく道へ如何か支遣せん。良久しうして云く、安禪は必ずしも山水を須ひず、心頭を滅却すれば火も自ら凉し。諸人且らく道へ洞山の圈纉什麼の處にか落在する。若し明辨得せば始めて洞山下の五位、回互正偏人を接すること妨げず奇特なることを知らん。這の向上の境界に到つて方に能く此くの如く安排を消せず。自然に恰好なり。所以に道ふ。正中偏、三更初夜月明の前、怪む莫れ相逢ふて相識らざることを。隱隱として猶は舊日の如く嫌を懷く。偏中正、失曉の老婆古鏡に逢ふ。分明に覿面すれば更に眞なし。更に頭に還つて影を認むることを休めよ。正中來、無中に路あつて塵埃を出づ。但能く當今の諱に觸れず、亦た前朝斷舌の才に勝れり。偏中至、兩刃鋒を交へて避くることを須いず。好手還つて火裡の蓮に同じ。宛然として自ら銜天の氣有り。兼中到。有無に落ちず誰か敢へて和せん。人人盡く常流を出んと欲す。折合して還つて炭裏に歸つて坐す。浮山の遠錄公此の公案を以て五位の格をつくる。若し一則を會せば餘は自然に會し易し。巖頭道く水上の胡蘆子の如く相似たり。捺着すれば便ち轉ず。殊に絲毫の氣力を消せず。曾つて僧あり洞山に問ふ。文殊普賢來參の時如何。山云く水牯牛の群裏に趕向し去らん。僧云く和尚地獄に入ること箭の如し。山云く全く佗の力を得たり。洞山云く。何ぞ無寒暑の處に向つて去らざると。此れは是れ偏中正なり。僧云く如何なるか是れ無寒暑の處。山云く、寒の時は闍黎を寒殺し熱の時は闍黎を熱殺す。是れは是れ正中偏なり。正と雖も却つて偏、偏と雖も却つて圓、曹洞錄中に備さに子細を載す。若し是の臨濟下ならば許多の事無し。這般の公案直下に便ち會す。有る者は道ふ。大好無寒暑と什麼の巴鼻かあらん。古人道く若し劒及上に向つて走らば則ち快ならん。若し情識上に向つて見ば則ち遲からん。見ずや僧翠微に問ふ。如何なるか是れ祖師西來意。微云く人無きを待つて來れ爾に向つて道へ。遂ひに

園中に入つて行く。僧云く此の間人無し請ふ和尚道へ。徽竹を指して云く、這の一竿竹は恁麼に長きことを得たり。那の一竿竹は恁麼に短きことを得たりと。其の僧忽然として大悟す。又曹山僧に問ふ恁麼に熱す。什麼の處に向つてか廻避せん。僧云く鑊湯爐炭裏に廻避せん。山云く鑊頭爐炭裏如何んか廻避せん。僧云く衆苦も到ること能はず。看よ他の家裏の人自然に他の家裏の說話を會することを。雪竇他の家裏の事を用ひと拈出す。

【字解】一。黃龍新和尙。　隆興府黃龍死心悟新禪師は寶覺晦堂祖心禪師の法嗣でありて臨濟九世の法孫である。宋の徽宗の政和五年十二月十四日世壽七十有二を以て示寂せられた。

二。洞山秫頭に領を打し腋下に襟を剜る。　方語に尋常の剪裁と云ふところで。何も變つたことはない。袖幅の中から領を取り、腋の下から斜めに裁つて襟をとると云ふ。之れが長を裁りて短を補ふ裁縫の妙處である。

三。安禪は必しも山水を須いず等。　杜荀鶴が夏日悟空上人の院に題する詩に、三伏門を閉ぢて一鞦を披す。兼れて松竹の房廊を陰ふなし、安禪は必ずしも山水を須ひず、心中を滅得すれば火も自ら涼しと云ふのがあるが、滅却するのせぬのと持つてまはつた云ひ分、何をか滅却するぞ。

四。洞山下の五位。　名高い洞山大師の五位である。此の一段は圜悟老人の正しく擧唱されたものでなく後人の妄添であらうと云ふことであるが。之は一一注脚のあるべき處を一向それのない處から見込んだものである。されども兎も角全文が出であるから一寸申して見ると、會元の曹山本寂禪師の條に、僧五位君臣の旨訣を問ふ、師曰く正位は卽ち空界にして本來無物。偏位は卽ち色界にして萬象の形あり。正中偏は理に背いて事に就く。偏中正は事を舍て、理に入る。兼帶は冥に衆緣に應じて諸有に墮せず染に非ず淨に非ず正に非ず偏に非ず故に虛玄の大道無著の眞宗と曰ふ。從上の先德此の一位を推して最妙最玄とす、當に詳審に辨明すべし。君は正位たり臣は偏位たり。君に向ふは是れ偏中正、君臣を見るは是れ正中偏、君臣道合するは是れ兼帶語にあり。又明安の五位賓主に正中偏は乃ち垂慈接物卽ち主中賓なり第一句の奪人なり。偏中正は照あり用あり卽ち賓中主なり。第二の奪境なり。正中來は乃ち奇特受用卽ち主中主第三句の人境俱奪なり。偏中至は乃ち有に非ず無に非ず卽ち賓中主なり、第四句の人境俱不奪なり。兼中到は出格自在にして四句を離れ百非を絕す妙盡本無の妙なりとある。之れ等で一應心得へて置くが宜しい。何れ後程詳しく出ることである。

五。若し一則を會得せば餘は自然に會し易し。　一卽一切一透一切透であるから五位のみに非ず千七百の公案も霧散氷消するのである。

六。僧あり洞山に問ふ。　この洞山は襄州洞山の守初宗慧大師で雲門大師の法嗣で同じく青原下であるけれども洞山悟本大師とは人違ひである。一僧が文殊普賢來參の時如何と理事圓融の處を問ふたに對して、牛部屋に趕ひこんでくれやうと云ふ。和尙マツサカ樣に地獄落ちぞと云へば、全く其の方に賴む程に救ふてくれやれと云ふ。

七。洞山云く何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。　此れは偏中正の境を奪つた處。山云く寒の時は闇裏を寒殺し熱の時は闇聚を熱殺す。これは正中偏の人を奪つたところと云ふ。此れでは洞山が泣かるゝであらう。丸で教家の長談義ぢや。

八。若し劔刃上に向つて走らば等。情慮に涉つて居ては洞山の本意はわかるまい。

九。僧翠微に問ふ。翠微は翠微無學禪師で丹霞天然の嗣。一僧は鄂州濟平山安樂院の會遲禪師このとである。爰の處類則の提唱あり。

一〇。曹山僧に問ふ。　曹山は撫州曹山の慧霞了悟禪師で曹山本寂の法を嗣いだ人である。

一一。鑊湯爐炭裏に廻避せん。煎立つた釜底に廻避しやうと云ふが爰が山僧の絕好の避暑地である。評に曰く冷風膚より生ず

第五節　類則提唱

其一　翠微西來意

僧問翠微如何是祖師西來意。下語云。問得可始得。

眞實知らずして問ふたぞ。

微云待無人來向儞道。下語云。一槌兩當。

西來の方を道理もなく答へた方もあり。根本の上には云ふべき事のないを、さもあるやうに人無きを待つて來れ儞に向つて道はんと答へたは句中ぞ。權實備つたなり。

遂入園中行。僧云此間無人請師道。下語云。實頭人難得。隨語轉。

微指竹云。這一竿竹得恁麼長那一竿竹得恁麼短。下語云。百花春到爲誰開。

前は句中の方から云ひたれども心得ざる程に爲人して云へり。長い短いと云ふには何の道理もなきことなり。

其僧忽然大悟。下語云。瓦解氷消。

其二　曹山恁麼熱什麼處廻避

曹山問僧恁麼熱向什麼處廻避。僧云鑊湯爐炭裡廻避。下語云。萬里一條鐵。

一性一致と見たなり。又下語に、鑊湯無冷處。鐵風無縫罅。千眼看不見。鑊湯爐炭裡と云ふは本分ぞ。本分の上には寒熱はあつてこそぢや程に廻避した者ぞ。

山云鑊湯爐炭裡如何廻避。僧云衆苦不能到。下語云。何不行令。

色相の上を本分と心得へて衆苦も到るあたはずと云ふた。何故に一棒打たぬぞと臨濟宗の眼からした下語ぞ。此古則曹洞宗の事なるほどに、いらぬことなれども碧巖の中にあるほどに人の問ふた時不識といへば惡るしとて此くの如く參究するぞ。

第六節　頌

垂手還同萬仞崖不是作家誰能辨得。何處不圓融。王勅既行諸侯避道。正偏何必在安排若是安排何處有今日。作麼生

兩頭不涉。風行草偃水到渠成。琉璃古殿照明月。圓陀陀地。切忌認影。且莫當頭。忍俊韓獹空上階不是這回蹉過了也。

【讀方】垂手還つて萬仞崖に同じ。是れ作家にあらずんば誰が能く辨得せん。何の處か圓融せざらん。王勅既に行はれて諸侯道を避く。正偏何ぞ必ずしも安排に在らん。若し是れ安排せば何處にか今日あらん。作麼生が兩頭に滲らざらん。風行けば草偃し水到れば渠成る。瑠璃古殿に明月照る。圓陀々地。切に忌む影を認むることな。且らく當頭なること莫れ。忍俊たる韓獹空しく階に上る。是れ這回のみにあらず蹉過了也。塊を逐て什麼をか作さん。打して

云く爾も道の僧と同參。

【字解】一。是れ作家にあらずんば誰か能く辨得せん。　雪竇如き作家の宗匠にあらずんば辨得し得ざる處。諸人にはわかるまいと云ふ。

二。何の處か圓融せざらん。　雪竇は萬仞崖に同じと高いこと計り云はれるが淺くても低くても圓滿に融通の出來るのが洞山の宗旨である。

三。王勅既に行はれて諸候道を避く。　垂示に乾坤を定むる句萬世共に遵ふとあると同じことで。洞山の王勅鶏の一聲であるから誰ありて背くことは出來ないと云ふ。

四。若し是れ安排せば何處にか今日あらん。　思慮分別を具てアーとかコーとか正偏に落して安排して洞山の眞意を知らうとしたとて、決して底意は知れまいぞよ。

五。作麼生が兩頭に渉らざらん。　兩頭は寒暑の正位と無寒暑の正位であるが。今は寒暑其の儘にして無寒氣と云ふ具合に兩頭に渉たらぬやうにするにはどうしたものであらうと云ふ。

六。風行けば草偃し水到れば渠成る。　安排をからずして洞山の爲人自然に正偏宛轉たる樣を云ふたもの。

七。圓陀々地。　明月の充ち滿ちて缺くる處もなく餘す所なきが如く、曹山の答話の圓轉滑脫なる。偖も見事なことぢやと稱揚すする。

八。切に忌む影を認むることを。　其の圓陀々地に依つて己れの影のさしたのを妄認してはならぬと學人を誡める。

九。且らく當頭なること莫れ。　明月についてまはるなと云ふ。

一〇。是れ這回のみにあらず。影を逐ふて空しく階に上るのは何の今度計りでない。叢林の學者比々皆然りである。

一一。蹉過了也。　それすりちがつた。

一二。塊を逐ふて什麼をか作さん。　諸人言句上に逐ひまはすな。狗猫の仲間入りしてはなりませぬぞと云ふ。

一三。打して云く爾も這の僧と同參。汝等も此の僧の如くに山僧が言句を逐ひ廻すなと云ふ。

【講義】垂手還つて萬仞崖に同じ。洞山大師の今日の答話は、丁度老婆が手を垂れて子供を導くやうなものでありて其の爲人親切なる實に落草の手段に出でられたものと申さねばならぬが、然し其れが還りて萬仞の懸崖の登ることも降ることも出來ないのと同じことで、天下の禪僧もあゆみ難きところ、甚だ手のつけ難いところである。正偏何ぞ必ずしも安排に在らん。洞山大師の五位と申して。正中偏偏中正などの五位を以て宇宙萬象の本體現象及び其の妙用を自在自由に說明することであるが、此の正偏は卽ち其の二本柱でありて、正と云ふは乃ち眞中のことで一味平等の本體本性を云ひ、偏は片寄ると云ふことで森々羅々たる千態萬樣の現象界を申したものである。此の正と偏との二つを標準にして五位を說明する。第一に正中偏これは正中に偏ありとでも讀む處で、正卽ち平等一相の本體中に偏卽千差萬別の現象が含まれ居る位。偏中正は偏中に正ありて。千差萬別の現象が其の儘本體なる正を離れぬと云ふ位である。此の二位で本體と現象の關係を說明し盡くすことであるが、更に正中來と偏中至との二を以て社會百端の複雜極まる作用を說明し、第五位兼中到を以て結局その圓融無碍なる終歸を說明するので。古人が四句を離れ百非を絕して妙盡本無の妙であると云ふたのは此の位のことである。安排は安置排列で洞山大師の宗旨にありては、何もかも一切此の杓子定規にあてはめて安置排列するのであるかと云ふに。決し

てそうではないので眞の作家と云ふものは、垂示にも直下更に纖翳なく全機處に隨つて齊しく彰ると申してある如く、此れが正位あれが偏位と窮屈極まることではない自由自在縱横無碍に接化の手段を施こさるゝことである。瑠璃古殿に明月照る。これが洞山本分の境界でありて、八面玲瓏、一點の塵垢もなく全體露現洒落向上の境界である。瑠璃は藥師瑠璃光など申して莊嚴にして一點の塵垢をも止めぬ透々明々の姿。古殿は古色蒼然で何ごとに在はしますかはと云ふ森嚴無比な神殿のことぢや。そこで其の清淨森嚴にして尊嚴無比なる九重の宮中にありて明團々たる三五の月が照り輝いて居る樣なのが洞山大師本分の境界であると云ふ。忍俊たる韓獹空しく階に上る。獹は黑狗韓の良犬であると云ふことぢや。春秋後語に、昔し齊が魏を伐たうとした時に淳于髡なるものが齊の威王に說いた言葉の中に韓獹は天下の俊犬なり東郭俊は海內の狡兎なり。韓獹東郭俊を逐ふて山に騰るもの三たび山をめぐるもの三たび、兎は前にきはまり犬は後につかる、犬兎俱に疲れて各々其の處に死す。田父見て之れを獲勞苦なくして其の功を擅にすと云ふことがあるが今は瑠璃殿上の明月と申して來たからして、明月卽ち玉兎に對して韓獹を出して來たのだ、こゝらが雪竇の文彩の妙なる處ぢや。諸人若し洞山の答話について廻るやうなことであつたならば、恰も犬が月かげを逐ふて殿上にかけ登るやうなものであり。如何に忍俊と俊潑怜悧で堪忍强い韓獹であつても逐に勞れ死んだと同じことで馬鹿とも何とも申して見ようのないことぞと云ふ。

第七節　頌評唱和譯

曹洞下に出世不出世あり、垂手不垂手あり。若し不出世ならば目に雲霄を視ん。若し出世ならば便ち灰頭土面。目に雲霄を見るは卽ち是れ萬仞峰頭。灰頭土面は卽ち是れ垂手邊の事なり。有る時は灰頭土面にして卽ち萬仞峰頭に在り。有る時は萬仞峰頭にして卽ち是れ灰頭土面。其の實は鄽に入りて手を垂るゝと孤峰に獨立すると一般なり。歸源了性と差別智と異なること無し。切に忌む兩橛の會を作すことを。所以に道ふ垂手還つて同じ萬仞崖と。直に是れ儞が湊泊の處無し。正偏何必しも安排に在らん。若し用ふる時に到れば自然に此くの如し。安排に在らざる也。此れは洞山の答處を頌す。後面に道く琉璃の古殿明月を照す。忍俊たる韓獹空しく階に上ると。此れは正に這の僧の言語を逐ふて走ることを頌す。洞下の此の石女。木馬。無底籃。夜明珠。死蛇等の十八般あり。大綱只正位を明す。月の瑠璃の古殿を照すが如し。圓影あるに似たり。洞山答へて道く何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。其の僧一に韓獹の塊を逐ふて連忙して階に上つて其の月影を捉るに似て相似たり。又問ふ如何なるか是れ無寒暑の處。山云く寒の時は闇黎を寒殺し熱の時は闇黎を熱殺す。韓獹の塊を逐ひ走りて階上に到り又却つて月影を見ざるが如し。韓獹は戰國策

に出づ。云く。韓氏の獹は駿狗なり。中山の兎は狡兎なりと。是れ其の獹方に能く其の兎を尋ぬ。雪竇引きて以つて這の僧に喩ふるなり。只諸人の如くんば還つて洞山爲人の處を識るや。良久しうして云く其の兎子をか討ん。

【字解】一。曹洞下に出世不出世あり垂手不垂手あり。　根本智後得智と云ふも同じことで不出世卽ち歸源了性は平等一相の本性に冥合した處で卽ち正に當り、出世卽ち差別智は手を垂れて子供を導くと云ふ接化度生の處で強ひて云はゞ偏に相當する處である。

二。直に是れ儞が湊泊の處無し。　落草の手段ではあるが其れが還つて萬仞の懸崖の登ることも降ることも出來ないのと同じことで其に手のつけにくいところである。

三。石女。木馬。無底籃。夜明珠。死蛇等。　石女は寶鏡三昧に木人方に歌ひ石女起つて舞ふと云ひ。木馬は曹山正中來の頌に泥牛水面に吼へ木馬風を逐ふて嘶くと云ひ。無底籃は人天眼目に無中に無底籃ありと云ひ。夜明珠は同安默志の語に夜明簾外排班立つ等と云ひ。死蛇は芙蓉の楷禪師の語に死蛇驚いて草を出づ等とある。何れも正位卽ち平等一味の本分の異名と見たらよい。

四。甚の兎子をか討れん。　韓獹が兎子を逐ひまはるやうに。文字言句に付いてまはるなと云ふ。

第四十四則　禾山垂語

第一節　本則

舉禾山垂語云習學謂之聞。絕學謂之鄰。天下禪僧跳不出。無孔鐵鎚。一箇鐵槨子。過此二者。是爲眞過。頂門上具一隻眼作什麼。僧出問。如何是眞過。道什麼。有一箇鐵槨子。山云。解打皷。鐵槨。鐵蒺藜。確確。又問如何是眞諦。道什麼。兩重公案。又有一箇鐵槨子。山云。解打皷。鐵槨。鐵蒺藜。確確。又問卽心卽佛。如何是非心非佛。道什麼。這箇垢圾堆。三段蒺藜子。山云。解打皷。鐵槨。鐵蒺藜。確確。又問向上人來時如何接。道什麼。遣他第四杓惡水來也。又有一箇鐵槨子。山云。解打皷。鐵槨。鐵蒺藜。確確。且道落在什麼處。

朝到西天暮歸東土。

【請方】禾山垂語して云く習學これを聞と謂ひ絕學これを鄰と謂ふ。天下の禪僧跳不出。無孔の鐵鎚。一箇の鐵槨子。此の二つの者を過るこれを眞過と爲す。頂門上に一隻眼を具して什麼をか作さん。僧出で、問ふ如何なるか此れ眞過。什麼と道ふぞ。一箇の鐵槨子あり。山云く解打皷。鐵槨。鐵蒺藜。確々。又問ふ如何なるか是れ眞諦。什麼と道ふぞ。兩重の公案。又一箇の鐵槨子あり。山云く解打皷。鐵槨。鐵蒺藜確々。又問ふ卽心卽佛は如何なるか是れ非心非佛。什麼と道ふぞ。這箇の垢圾堆。三段同じからず。又一箇の鐵槨子なり。山云く解打皷。鐵槨。鐵蒺藜。確々。又問ふ向上の人來るの時如何か接

せん。什麼と道ふぞ。他の第四杓の惡水に遭ひ來れり。又一箇の鐵槨子。山云く解打皷。鐵槨。鐵蒺藜。確々。且く道へ什麼の處にか落在する。朝に西天に到り暮に東土に歸る。

【字解】一。禾山。吉州禾山の無殷禪師は福州吳氏の子で七歳の時雪峰義存大師に從つて出家し後に九峰道虔の室に入つて其の法を嗣いで、吉州禾山の大智院に住山せられた。建隆元年三月二日に入寂。勅して法性禪師と徽號を賜つた。

二。習學これを聞と云ひ絶學これを鄰と云ふ。此の二つの者を過ることを眞過と爲す。これは僧肇法師の寶藏論に出て居る語で、本文には「夫れ學者に三あり其の一之れを眞と謂ひ、其の二之れを鄰と云ひ。其の三之れを聞と謂ふ。習學之れを聞と謂ひ、絶學之れを鄰と云ひ、此の二を過ぐる者之れを眞と云ふ」とあるのであるが、其の大意はツマリ佛道修行をして證悟を得る階級を習學と絶學と眞道との三段に分けたもので、習學と云ふは小乘の修行で所謂る聲聞と云ふ處。卽ち佛や菩薩方から煩惱生死の苦しきことや菩提涅槃の樂しきことを聞いて心に信心を生じ如法に修行する位であるからこれを聞と云ひ。絶學は更に一段進んで行者修行の功を積んで煩惱を離れ生死を出て涅槃の彼岸に到達して見れば最早學ぶべきものもなく又修すべき道もないそれを絶學とも無學の聖者とも云ふので。一度此の境界に至れば卽ち等覺の位に入つたので如來と等しき證悟を得たとも申すべきであるが。然ればとて直に佛とか如來とか云ふわけにはいかぬので薄絹一重隔てた程のことであるから鄰と云ふて、專門語に之れを羅縠一點と云ふ。眞過と云ふは其の聞と鄰との二を通り過ぎたところで卽ち妙覺果滿の極位の處で佛其のもの如來そのものを云ふので無上正眞道と云ふが之れである。而して凡夫から此の極位に登る迄は三僧祇百大劫と云ふ非常に長の時間を經るを要するので、死にかはり生れかはり修行に修行を累ねゝばならんのである。

三。天下の衲僧跳不出。古今大抵の學人。皆是の習學絶學以上に跳出することは出來ぬぞ。出頭のものはあるまい。

四。無孔の鐵鎚。爾か兎やかの穿鑿の孔はないから。更々手の着けやうは御座るまい。

五。一箇の鐵槨子。頑堅無比の鐵饅頭であるから齒がたつまいと云ふ。

六。頂門に一隻眼を具して什麼なか作さん。持ち合せの親譲りの眼で見たがよい。頂門上の一隻眼でも。よもや四角い物が丸くも見へますまい。

七。什麼と道ふぞ。能くも眞過を聞き皆めたぞと耳を聳立てたのである。

八。一筆に勾下す。眞過と云ふも教說。肇法師の戲れ言である。聞き度くもない。圜悟一筆下に消して吳れやうぞ。

九、一箇の鐵槨子あり。諸人到底齒には合ふまい。

一〇。解打皷。皷は太皷のこと。太皷を打つことを知つて居るよと云ふ。如何なるか是れ眞過と云ふ問に、太皷を打つことを知つて居るよと木に竹をついだ樣な答へぶり。是れが卽ち虛聲を聞かせたものである、皆さん聞えますかな。

一一。鐵槨。要塞堅固な禾山の答語ぢや。三世歷代共に手の着けやうは御座るまい。

一二。鐵蒺藜。余雅に鐵蒺藜を作りて敵路に布くとありて透り難きを申したもの、諸人中々寄り附かれまいと云ふ。

一三。確々。堅いことは闍浮檀金の彈丸より甚しいぞ。摧くことも破ることも出來まいことよ。

一四。如何なるか是れ眞諦。如何なるか是れ眞過と云ふも同じこと。言葉を換へた迄である。

一五。什麼と道ふぞ。語は前と同じいが意味合は各別で、解打皷で解せられぬものが、又しても同じことを尋ねて何とするぞ鸚鵡の口眞似であらう。止せ止せとは云ふ。

一六。兩重の公案。まだ讀めずして問ひ來るか。此の迂路たへ者がと云ふ。

一七。又一箇の鐵槨子あり。地震火に鐵條網であるからうつかりとは寄りつけまいぞと次を預言する。

一八。卽心卽佛は卽ち問はす如何なるか是れ非心非佛。前の第二十八則にも出た通り。此の時代には卽心卽佛とか非心非佛とか云ふ事が盛に研究されたものぢやが、其の元は彼の馬祖大師が常に卽心卽佛と云ふことを言はれたに就いて、或る時一僧が、和尙什麼としてか卽心卽佛を說くと問へば、小兒の啼を止めんがためなり、ほんの小兒だましよと答へられた。然るに其僧が啼き止む時如何、その子供が啼き止んだ後はどうしますと云ふ。馬祖は非心非佛よと答へた。其の僧更に進んで此の二種を除く人の來んに如何か指示せんと云ふ。馬祖は伊に向つて不是物と道はんと云はれたのが大問題になりて、四の五の

姦ましい議論があつたと云ふことちやが、畢竟佛と云ふ何とも云ふに云へぬ結構な有り難いものが御座ると思ふて居る子供共は、卽心卽佛吾々お互ひの心の本性が其儘佛であるぞ十號具足の世尊であるぞと聞けば、一旦其の啼きは止むであらふけれども、扨て又卽心卽佛と云ふことに取りついてトント自由がきかなくなるから、今度は非心非佛と心佛共に拂ひのけるのである。今此の一僧も此の問題を拈起したので。卽ち眞過を問ふても、眞諦を問ふても、唯解打皷と文皷を打つことを知つて居るふと一向取りつく處がないので、更に非心非佛の問頭を呈出したものである。

一九。什麼と道ふぞ。　何をグズ〳〵言ふて居るか。

二〇。這箇の坵圾堆。　坵圾堆は塵塚卽ちゴミダメのことで。亦しても非心だの非佛だのと大根の皮や魚の骨をもち出したなアと云ふ。

二一。三段同じからず。　眞過だの眞諦だの非心非佛だのと三段に問端を攻めた處。如何にも御苦勞樣と云ふ。

二二。又一箇の鐵槨子あり。禾山別の答處もあるかの。

二三、向上の人來るとき如何か接せん。此僧飽く迄執心で更に方向を換て向上の人にあふたらどうするぞと問端をおこした。

二四。什麼と道ふぞ。　復候姦しいことちや。已れが向上人のつもりかと咎める。

二五。他の第四杓の惡水に遭ひ來れり。　又問ふて來た。シブトイ奴ちや。ソレ第四杓の惡水を食はせるぞと云ふ。

二六。且らく道へ什麼の處にか落在する。　諸人禾山の落處はどこに在るぞ。取りつく處もあるかのふと圜悟が座下及び後學に垂示を下して。

二七。朝に西天に到り暮に東土に歸す。朝暮と云ふ短い時間に西天に到りて東土に歸ると云ふ。自由自在なことちやが何んと諸人行つて見やれ。遠くはあるまい。夫れ面々鼻孔の內ちやわと云ふ。

第二節　本則提唱

禾山垂語云、習學謂之聞。絕學謂之鄰。過是二者是爲眞過。下語云。

大火裡弄毛塵。

聞と云ふは多聞也。物を廣く聞くなり。絕學は絕した方にて截斷なり。鄰と云ふは道に近きなり、眞過と云ふは本分なり、敎の上にあることなり。先師下語に、探竿影草。書亦不達信亦不通。

僧出問如何是眞過。下語云。要拶虎鬚。

虎の樣なる禾山へ如何と問ふたは要拶虎鬚るものよ。先師下語に句裏呈機。金以火試。

山云解打皷。下語云。無孔鐵槌當面擲。

習學と云ふは物を多く聞いて學問した方なり。絕學は物を問ひ極めて絕した方也。絕したは道に近し。此の二つを過ぐるを眞過と云ふ。眞過は本分なり。眞過を問ふた程に本分の皷を打つて爲人せられたぞ。解打皷の解の字さとる方也。禾山は風顚漢なるゆへに、皷を打つてまはるぞ。

又問如何是眞諦。下語云。再拶虎鬚。

先師下語に問得可始得。

山云解打皷。下語云。一刀兩斷。

先師下語に風吹不入水洒不着。

又問、卽心卽佛、不問如何是非心非佛。下語云。胡餅裏竟汁。

先師下語に猩々着。

山云、解打皷。下語云。三重公案。

先師下語に獅子咬人。

又問、向上人來時如何接。下語云。貪他嚼不細。

先師下語に若不入水爭見長人。

山云、解打皷。下語云。雪上加霜。無孔鐵鎚當面擲。

先師下語に蝦跳不出斗とある。色々に問ひ來つたを皆解打皷と答へたは、有りとあらゆることは皆本分に歸する處を解打皷と云ふたもの。解打皷と云ふは皷を打つことを解すると云ふ義也。皷を打つに其の響ちやと云ふて殘らずして形のない處を解すると云ふ義也。解はトクルと云ふ方也。解るは無い方也。音響沒縱跡の處ぞ。元來禾山はウカシヤの樣なる人ぞ。八バチを打く樣なることをした人ぞ。天龍は一指を立て、德山は棒、臨濟は喝。我宗の手段なり。解打皷も沒縱跡。何の道理もない處也。道理のないところが本分なり。先師曰く、解打皷の處に別に下語あり。下語に曰く月白風淸、僧の四つまで樣をかへて問ふたに、何れも解打皷と答へたは現成の方なり。現成に用ゆる時は道理に涉らざるぞ。

第三節　本則評唱和譯

禾山垂示して云く、習學之れを聞と謂ひ、絕學之れを鄰と謂ふ。此の二を過るもの是れを眞過と爲すと。此の一則の語寶藏論に出たり。學無學に至る、之れを絕學と謂ふ。所以に道く淺く聞いて深く悟る。深く聞いて悟らず之れを絕學と謂ふ。一宿覺の道く、吾れ早年よりこのかた學問を積む。亦曾つて疏を訪ね經論を尋ぬと。習學既に盡く之れを絕學無爲の閑道人と謂ふ。絕學に至るに及んで方に始めて道と相近し。直ちに此の二學を過ることを得る是れを眞過と謂ふ。其の僧亦妨げず明敏なることを。便ち此語を拈して禾山に問ふ。山云く解打皷と。所謂る言無味語無味なり。這箇の公案を明んと欲せば、須らく是れ向上の人にして方に能く此の語の理性に涉らず亦議論の處なきことを見るべし。直下に便ち會して桶底の脫するが如くに相似たらば、方に是れ衲僧安穩の處、始めて祖師西來意に契ひ得ん。所以に雲門道く、雪峯の幌毬、禾山の打皷、國師の水碗、趙州の喫茶、盡く是れ向上の拈提と。又問ふ如何なるか是れ眞諦、山云く解打皷。眞諦は更に一法を立せず、若し是れ俗諦は萬物俱に備る。眞俗無二是れ聖諦第一義。又問ふ卽心卽佛は卽ち問はず。如何なるか是れ非心非佛。山云く解打皷と。卽心卽佛は卽ち求め易し。若し非心非佛に到らば卽ち難し。人の到ること有ること少なし。又問ふ向上の人來る時如何んか接せん。山云

く解打皷。向上人は卽ち是れ透脫灑落底の人なり。此四句の語、諸方以て宗旨となし之れを禾山の四打皷と謂ふ。只僧鏡淸に問ふが如くんば、新年頭還つて佛法ありや也た無しや。淸云く有り。僧云く、如何なるか是れ新年頭の佛法。淸云く、元正啓祚萬物咸く新なり。僧云く師の答話を謝す。淸云く老僧今日失利と。此の答話に似て十八般の失利あり。又僧淨果大師に問ふ、鶴孤松に立つの時如何、果云く、脚底下一場の懊懼。又問ふ、雪千山を覆ふの時如何。果云く、日出でゝ後一場の懊懼。又問ふ、會昌沙汰の時、護法神什麽の處に向つてか去る。果云く、三門外兩箇の漢一場の懊懼。諸方之れを三懊懼と云ふ。又保福僧に問ふ、殿裏是れ什麽の佛ぞ。僧云く、和尙定當して看よ。福云く、釋迦老子。僕云く、人を瞞すること莫んばよし。福云く、却つて是れ儞我を瞞す。又僧に問ふて云く、儞名は什麽ぞ。僧云く、咸澤。福云く、枯涸に遇ん時如何。僧云く、誰か是れ枯涸の者ぞ。福云く、我れ。僧云く、和尙人を瞞すること莫んば好し。福云く、却つて是れ儞我を瞞す。又僧に問ふ。儞什麽の業を作してか喫し得て恁麽に大なる。僧云く、和尙も也た小ならざる。福身を蹲る勢を作す。僧云く、和尙人を瞞する莫んば好し。福云く、却つて是れ儞我を瞞す。又浴主に問ふ、浴鍋濶きこと多少ぞ。主云く、請ふ和尙量つて看よ。福量る勢を作す。主云く、和尙人を瞞すること莫んば好し。福云く、却つて是れ儞我を瞞すと。諸方之れを保福の四瞞人と謂ふ。又雪峰の四漆桶の如くんば皆是れ從上の宗師、各深妙の旨を出して人を接するの機なり。雪竇後面に一落索を引いて雲門の示衆に依つて此の公案を頌出す。

【字解】一。寶藏論。　羅什門下四哲の一人なる僧肇法師の作であつて、一卷ある。禾山和尙其の中の語を取り出して拈提せられたものぞ。

二。所以に道く。　雲門大師の語ぞ。圜悟の上堂に、風吹風動二種なし。水洗水濕豈に兩般ならん。淺く聞いて深く悟る底錦上に花を鋪く。深く聞いて悟らざる底坐鐵鑄就すと云ふ句がある。

三。一宿覺の道く。　永嘉眞覺大師の證道歌に大師少き時諸の講肆を歷云云の語があるが、今は其の取意の文である。

四。始めて祖師西來意に契ひ得ん。　此の僧眞過眞諦を問ふた處、武帝の聖諦第一義を問ふたと一般、禾山の答處も又逢磨と一意ぞ。

五。雲門道く。　雲門錄室中語要に。麥す、睦州僧を喚ぶ。趙州喫茶入水の義、雪峰の輥毬と見へて居る。雪峰の輥毬と云ふは、雪峰の義存禪師常に二毬を輥して以て人に示す。一日支沙到る、師亦毬を輥して之れを示す。沙便ち身を放ち倒れて聞く勢を作すと云ふ古則がある。

六。國師の水碗。　禪林類聚の講經部に見へて居るので、南陽因みに紫璘愚益經を註せんと擬す。師乃ち問ふ大德凡そ經を註せば須らく佛意を會して始めて得べし。云く若し佛意を會せずんば爭でか解註し得ん。師乃ち侍者をして一椀に水を盛つて七粒の米を著けて水中に在りて椀面に一隻筯を安ぜしむ。乃ち問ふ這箇是れ甚麽の義ぞ。璘語なし。師云く老僧が意尙ほ會せず。豈に況んや佛意をや爭でか能く經を註し得んと云ふのである。

七。卽心卽佛は卽ち求め易し。　求めらるゝ者乎。求められぬ者か。有るものか無いものか。易い者か難いものか。　提つて見れば知れることよ。

八。此の四句語。　此の僧四句を以て問ひ來るに。禾山和尙解打皷の三字を以て斷り盡した。そこで禾山の四打皷とは云ふ

九。十八般の失利。　之れは六失利で十八は譏まりである古本の碧巖には六失利となつて居る。揚岐方秀禪師は六の字蓋し

誤まつて十八の二字と作すならんと云はれてあるが如何にも至當な見方である。六失利は會元の七に出て居るので傳燈錄には一失利が見へて居らぬ。(一)越州鏡清寺の道怎順德禪師に新到參ず。師拂子を拈起す。僧云く、久しく鏡清と嚮く猶這箇の有るあり。師曰く鏡清今日失利。(二)師荷玉に問ふ、甚處よりか來る。曰く、天台より來る。師曰く阿誰か汝に天臺を問ふ。曰く、和上何ぞ龍頭蛇尾なることを得たり。師曰く、鏡清今日失利。(三)問辨し得ず提不起の時如何。師曰く爭でか者裏に到り得ん。曰く恁麼ならば則ち禮拜し去らん。師曰く鏡清今日失利。(四)師僧の書を學ぶを見て乃ち問ふ。什麼の書をか學ぶ。曰く、請ふ禾山鑑みよ。師曰く一點未分三分著地。曰く、今日又人に遇ふに似て又人に遇はざるに似たり、師曰く鏡清今日失利。(五)問ふ新年頭佛法有りや也た無しや。清曰く有り。曰く如何なるか是れ新年頭の佛法。師曰く、元正祚を啓いて萬物咸な新なり。曰く師の答話を謝す。師曰く鏡清今日失利。(六)上堂衆集り定る、師拄杖を放下して云く、大衆動著するも也た二十棒。動著せざるも也た二十棒。時に僧あり出でゝ拈得して頭上に出で去る。師曰く鏡清今日失利。之れが六失利である。評して曰く。鏡清何の利を失つたの、此の老僧もと何百目の老僧ぢやの。どこが先利の處ぞと提つて見よ。

一〇。淨果大師。　疎山匡仁の嗣、隨州護國院の守澄淨果禪師である。鵝孤松に立つ時如何。丁度今年の勅賜松上鵝と云ふにもつて來いの古則である。果云く脚底下一場の懨懼、蓑垂れちらかして、見向きもせられぬことである。いかい耻ぢかきぞ。

一一。會昌の沙汰。　三武一宗の法難と云ふ中、唐の武宗の會昌の法難で十八史略には天下の佛寺を毀ち僧尼勅して俗に歸せしむとあるが、佛祖統記の法運通塞志によると。武宗が深く道教を信じた結果。遂に會昌五年の正月(我朝仁明帝承和十二年西曆千五百〇六年)に趙歸眞等の八十一人の道士を宮中に召して親しく法籙を受けたが、其の他に衡山の劉元靖も亦深く帝の信任を得て光祿大夫となり崇玄館學士に任ぜられた、二人とも宮中に入りて修法をして居つたが、中には帝を諫めるものもあつたので趙歸眞は更に羅浮山の鄧元超等を招いて相結托し、當時の宰相李德裕もまた之れに力を添へたので衆々道士等の請により、其年の四月に天下の僧院僧侶の數を調べ。五月に勅を下して、寺は長安洛陽ともに各四ヶ寺、地方は諸州各々一ヶ寺の外は皆之れを破壞することゝし。僧侶は兩部の各寺には三十人づゝ。地方は上寺二十人、中寺十人、下寺は五人を限りて他は悉く歸俗せしめ、寺を毀つた材木では廨舍を作り。金銀は總べて度支の財政官に交付し、鐵像では農具を作り、銅像や銅器では錢を鑄しめたと云ふことである。之れが會昌の破佛で四万の寺院二十六萬五百の僧尼は俗に歸したと云ふ非常な大法難である。

一二。雪峰の四漆桶。　雪峰の眞覺錄に出て居るので。(一)師投子に到る、投子庵前の一片石を指して師に謂つて曰く、三世の諸佛總に裏許に在り。師云く須らく裏許に在らざる者の有ることを知るべし。子曰く不快漆桶。(二)師と龍眠に遊ぶ路に兩條あり。師問ふ那箇か是れ龍眠、投子杖を以て之れを指す。師云く東に去るか西に去るか。子云く不快漆桶。(三)師投子に問ふて云く、一槌便ち成る時如何。子云く是れ性燥の漢にあらず。師云く一槌を假らざる時如何。子云く漆桶。(四)師又問ふ此間還つて人參有りや也た無しや。投子鑊頭を將つて面前に拋向す。師云く與麼ならば則ち當處に擱去るや。子云く不快漆桶。と云ふのである。會元では投子山大同禪師の章に出て居る。

第四節　類則提唱

其一　三懨懨

僧問二淨果大師一、鶴立二孤松一時如。下語云。問在二答處一。

句中を以つて儞が問ふことは儞が問處に有るぞと也。

果云、脚底下一場懨懨。下語云。答在二問處一。脚跟不レ點レ地。倚レ勢欺レ人。勘破了也。

答在問處は句中を以て問ふことは、儞が問處にあるぞと云ふ心也。又脚跟不點地は、鶴孤松に

立つの時如何と問ふた程に、鶴の上を云ふ樣にして、此僧を罵つて云はれたぞ。鶴が孤松に立つたも中に有つて地には落着せざるものなり。又倚勢欺人は此の僧の句中を欺いたぞ。勢と云ふ字が句中ぞ。此僧の句中を欺いて云ひ返されたぞ。又云く。此僧が淨果を鶴に比してハギが高くて見苦しいぞと云ふ意に此の問を置いた程に答在問處と也。又の辨に、餘所から見ればいかめしけれども、傍へよりて見れば見苦しいことが有ると云ふ也。淨果を抑下して鶴に比して僧が云ふ也。其を勘破してハギが高くて見苦しく耻かしう候と云ふ也。又の辨に句中を勘破して、ハギの長いも短いも、醜いも美しいも、相を受けたほどのものは盡く愧よと云ふ也。後の三辨の中、此の辨最も殊勝也と先師は仰せられたり。

又問雪覆千山時如何。下語云。眼看東南意在南北。

雪の上を問ふやうにして、底には如何と見て答話を聞くべきために問ふたぞ。

果云出後一場懺懼。下語云。雪消山骨露。

此僧の冷い句中を以て問ふた上を雪の消するが如く能く照し見たぞと云ふ心也。淨果は名譽の答話の上手で有るに依つて、答話を聞くべきために問ふたぞ。先師云く此の樣には答へられてこそと云々。

又問會昌沙汰時護法神向什麼處去。下語云。向南看北斗。

果云三門外兩箇漢一場懺懼。下語云。移穿射露。指槐樹罵柳樹。

護法神の上を云ふ樣にして、此僧を罵つて云はれたぞ兩箇漢と云ふたは二處で耻を掻いたぞ。護法と云ふて鎭守ぢやなどゝ云へども、會昌の沙汰の時は、出て沙汰をば得せぬぞと也。三門外で耻をかいたものよ。その如く此僧も隨分と思ふて色々に問れたれども、兩處で耻をかいたぞとなり。○又別に辨あり。

又問雪覆千山時如何。下語云。兩簑一朶。

前の問と同句中なり。

果云日出後一場懺懼。色相と云ふ者は、日裡の氷雪の如くなる淺間しき愧なものよと爲人したぞ。雪の上を云ふやうなれども色相を云ふなり。

又問會昌沙汰時護法神向什麼處去。下語云。兩々三々舊路行。路從平處行。險所。

會昌沙汰の時、護法神は何故に守護せなんだぞと眞直に平々には問れたれども、淨果の佛法を商量する人の前で佛法の斷絶した時のことを問ふたは、果淨に觸許して云ふたほどに、觸許した處を指して險所と云へり。會昌沙汰は唐の武宗の會昌之年也。

果云三門外兩箇漢一場懺懼。下語云。當機覿面。

淨果に觸許して問ふたほどに、あのやうなる猥藉の僧を罰せぬは護法神の愧よと云へり。兩箇漢とは二王を云へり。卽ち護法神なり。二王は一體二像なり。元來一體なれども二つに作るなり。二王のこと正法念處經に見へたり。

第五節　頌

一拽石寰中天子勅。癩兒牽伴。向上人恁麼來。二般土塞外將軍令。兩箇一狀領過。同病相憐。發レ機須レ是千鈞ノ弩ナルベシ若是千鈞也透不得。不可輕酬。豈爲死蝦蟆。象骨老師曾テ輥レ毬ス也有人曾恁麼來。有箇無孔鐵鎚。阿誰不知。爭カ似ン禾山ノ解打鼓ニ鐵橛子。須還這老漢始得。一子親得。報レ君知シム雪竇也未夢見在。雪上加霜。爾還知麼。莫レ莽鹵ナル也有些子。朧朧侗侗。甜キ者ハ甜ク苦キ者ハ苦シ謝答話。錯下注脚。好與三十棒。喫棒得也未。便打。依舊黑漫漫。

【讀方】一拽石。寰中は天子の勅。癩兒伴を牽く。向上の人恁麼に來る。二般土。塞外は將軍の令。兩箇一狀に領過す。同病相憐む。機を發することは須く是れ千鈞の弩なるべし。若し是れ千鈞ならば也た透ることを得ず。輕々しく酬ふべからず。豈死蝦蟆の爲めにせんや。象骨老師曾つて毬を輥す。也た人の曾つて恁麼にし來るあり。箇の無孔の鐵鎚ある。阿誰か知らざらん。爭でか禾山の解打鼓に似かん。鐵橛子。須らく這の老漢に還して始て得べし。一子親しく得たり。君に報じて知らしむ。雪竇も也た未だ夢にも見ざること在り。雪上に霜を加ふ。爾還つて知るや。莽鹵なること莫れ。也た些子あり。朧々侗々。甜き者は甜く苦き者は苦し。答話を謝す。錯つて注脚を下す。好し三十棒を與ふるに。棒を喫し得るや也た未だしや。便ち打つ。舊に依つて黑漫々。

【字解】一。寰中は天子の勅。　普天の下率土の濱皆王臣に非らざるなしと申すが。歸宗王城に中心の樹子を動かすなかれとの勅定が降りたからこれには誰も觸犯すること成らぬ。千古萬古そむくことはなるまいと云ふ。
二。癩兒伴を牽く。　カツタイの友引きで。禾山と歸宗と好い道づれぞ。
三。向上の人恁麼に來る。　ソレ向上の人が來たぞ。
四。塞外は將軍の令。　木平の善導法將の令の嚴重なこと。誰人も背くことが出來ぬぞとの命令すべき人の命令は嚴重に遵守せねばならぬと云ふ。
五。兩箇一狀に領過す。　歸宗も木平も能く諸人の罪過を決斷して。拽石般土を云ひつけられた。誰も同罪であるから一つ狀の判決である。
六。同病相憐む。　禾山歸宗木平雪竇何れも好い御仲間ぢや。花見に疲れてお休みかの。
七。若し是れ千鈞ならば也た透ることを得ず。　雪竇相摥を千鈞ときめられたが、それでは千佛萬祖の胸板をさすことなるまい。雪竇戲事な。それは小兒の玩弄弓であらう。
八。輕々しく酬ふべからず。　ウツカリ相手になるなよ。當が違ふぞ。
九。豈死蝦蟆の爲めにせんや。　上根上機の者でなくてはと揚げる。
一〇。也た曾つて人の恁麼にし來るあり。歸宗の拽石、木平の搬土ばかりではない。人々千差。其の祖師其の祖師で學人接化の作略を設けられたぞ。
一一。箇の無孔の鐵鎚ある。　アツタラ鐵鎚孔が無いわ。諸人爰一つ柄をつけて見よとは云ふ。
一二。阿誰か知らざらん。　天下に名高い好話柄であるから。誰れ知らぬ者もないわ。
一三。須らく這の老漢に還して始めて得べし。此の舞臺は禾山に任せて勝手に踊らせて置くが好い。千手千眼。禾山一人で

鼓もなり笛もふき踊りもする。跳びもする。偖々千兩役者の藝の美事さと云ふ。

一四。一子親しく得たり。　雪竇一人は能く太鼓の打ち方を知つて居る。　禾山の獨り子であるから親ゆづりの妙術である と云ふ。

一五。雪竇も也た未だ夢にも見ざること在り。　雪竇まだ合點が行かぬの。三年五年勉强して來いと云ふ。

一六。雪上に霜を加ふ。　復一杓子盛り添へられた。重々の爲人親切なこと。

一七。儞還つて知るや。　諸人雪竇の落處を知つたか。どう知つたぞ。

一八。也た些子あり。　一人や二人は莽鹵ならぬ者もあらふが。

一九。儘々倜々。　多くは物になりそうにないわと一揚一抑學人を奬勵する。

二〇。答話を謝す。　先づは雪竇忝けない。御說明御苦勞で御座る。

二一。錯つて注脚を下す。　禾山の太鼓に疵がついた。諸人雪竇に耳を貸すなよと云ふ。

二二。好し三十棒を與ふるに。　四の五の姦しい。雪竇此の上云ひやると承知はせぬぞと啖目ける。

二三。棒を喫し得るや也た未だしや。　諸人は雪竇と同樣に三十棒を喫する資格があるか。此棒山海の珍味であります。

二四。舊に依つて黑漫々。　相も變らず奚下の阿蒙か。馬の耳に風是非もないことと重れ〳〵の爲人親切である。

【講義】　一拽石。これは歸宗智常禪師の故事で、馬祖大師の法嗣、智常禪師が、一日門下の衆僧が集まつて働いて居るのを見て、何をして居るかと尋ねられた時に、衆僧を監督して居る維那が。今日は石を拽いて居りますと答へた。禪師はこの答に對して石を拽くは宜しいが中心の樹子卽ち眞中の木の軸を動かさない樣にしろよと云はれたと云ふ故事がある。評唱にも出て居つて。類則として參究することぢや。中心の樹子、諸人それ何の木ぞ松であるか栢であるか參究して見よ。二般土。般は搬也でハコブと云ふこと卽ち運搬することである。會元六には般土を運土としてあるが意味は同じことぢや。これは盤龍可文の法嗣、袁州木平山の善道禪師の故事で、禪師は初めて門下に入り來つた人があれば、先づ土を般ぶこと三擔せしむと云ふて、必ず土を三荷づゝ運んで門前の道路を修繕させられたと云ふことぢやが、ツマリ此の初めの二句は雲門示衆の語に歸宗の拽石雪峯の輥毬等とあるが、それに木平の般土を帶說せられたもので、般土のことは評唱に詳しく見へて居る。機を發することは須く是れ千鈞の弩なるべし。三國志に千鈞の弩は鼷鼠の爲めに機を發せずとあるが、天子の勅の如く將軍の令の如く、一度發すれば天下萬民必ず遵守すると云ふ風に禾山にせよ歸宗にせよ、將又木平にせよ、佛見法見を離れて上機上根の爲めに大活機輪を轉ずることは、恰も千鈞の弩と云ふて、非常なる强弓を射るやうなものでありて、如何なる猛獸豪敵も向ふことの出來ないやうに、千佛萬祖と雖も退倒三千里で、三十六計逃ぐるに如かずと避けらるゝことであるぞと云ふ。一鈞は三十斤であるから、十鈞は三百斤、百鈞は三千斤、千鈞は三萬斤であるといふことぢや。象骨老師曾つて毬を輥ず。象骨老師は卽ち雪峯山の義存禪師で、雪峯山を一名象骨山ともいふのぢや。雪峯の輥毬と申して類則として參究することぢやが、雪峰の義存禪師は學人を接する每に必ず直ちに木毬を輥して其の機鋒を勘檢せられたと云ふことである。彼の俱胝和尙の一指頭の禪と同じ話で齒の立てやうも手のつけやうもない、無孔の鐵鎚、鐵

槭子である。爭でか禾山の解打皷に似かん。歸宗の拽石、雪峰の輥毬、何れも蹤跡の見とめようもないが禾山の大機大用は亦た一段の出格であつて、禾山の獨り舞臺、古今獨歩の妙術であるぞ。君に報いて知らしむ莽鹵なること莫れ、此の一則の公案は決して一場の話柄ではないぞ貞水の講談、三遊亭の落語と同視してはなりませぬ。參學の者は必ず審細に工夫しなければならぬ。甜き者は甜く苦き者は苦し。天は上に在つて高く地は下にあつて低し。花は笑ひ鳥は歌ふと。甜い者は甜いと知り苦い者は苦いと知れば天下泰平國土安穩で兎や角の議論もなく何の造作もない話ちや。釋迦と云ふいたづら者が世に出でゝ多くの人を迷はせにけり。佛の祖の眞過の眞諦のと兎角四の五の姦ましい。何のくよ〳〵川邊やなぎ。夏は熱いもの冬はさむいもの。烏はならはずして孝行と啼き雀は生れながらにして忠々とうたふ。之れが卽ち佛の道である。小僧共忘れるなよ。目あいて見よ心して聞けとは云ふ。

第六節　頌評唱和譯

歸宗一日普請して石を拽く。宗維那に問ふ、什麼の處にか去る。維那云く石を拽き去る。宗云く、石は且らく汝が拽くに從す。卽ち中心の樹子を動着することを得ざれと。木平凡そ新到の至る有れば先づ三轉土を般ばしむ。木平に頌あり、衆に示して云く、東山は路窄く西山は低し、新到三轉の泥を辭すること莫れ。嗟すらくは汝が途に在つて日を經ること久しきことを。明々たれども曉らず却つて迷と成ると。後來僧あり問ふて云く、三轉の內は卽ち問はず、三轉の外の事作麼生。平云く、鐵輪の天子寰中の勅。僧語なし。平便ち打す。所以に道ふ一拽の右二般の土機を發することは須く是れ千鈞の弩なるべし。雪竇千鈞の弩を以て此の話に喩へて他の爲人の處を見せしめんと要す。三十斤を一鈞となす。一千鈞は則ち三萬斤なり。若し是れ獰龍虎狼の猛獸ならば方に此の弩を用ふ。若し是れ鷦鷯小可の物ならば必ず輕々しく發すべからず。所以に千鈞の弩は鼷鼠の爲めに機を發せず。象骨老師曾つて毬を輥す。卽ち雪峰一日玄沙の來るを見て、三箇の木毬一齊に輥ず。玄沙卽ち斫牌の勢を作す。雪峰深くこれを肯ふ。然も總べて是れ全機大用の處なりと雖も、俱に禾山の解打皷に如かず。多少か徑截なる。只是れ會し難し。所以に雪竇道く、爭でか禾山の解打皷に似んと。又人の只話頭上に在つて活計を作して來由を知らずして莽莽鹵鹵たらんことを恐る。所以に道く、君に報じて知らしむ莽鹵なる莫れと。也た須らく是れ實に這般の田地に到つて始めて得べし。若し莽鹵ならざらんことを要せば、甜きものは甜く苦きものは苦し。雪竇然も是の如く拈弄すと雖も、畢竟也た跳不出。

【字解】一。歸宗。　廬山歸宗寺の智常禪師で馬祖大師の法嗣で至眞禪師と勅號を賜つた高德である。
二。　三轉土。　轉は運動で運び出すこと。土を搬ぶこと三擔せしむともなる。三荷の土を運び出すことである。

三。東山は路摩く西山は低し。　此處も其處も土を搬んで道路を修繕せよと云ふこと。
四。鐵輪天子寰中勅。　洞山良价の嗣青林の師處禪師の語であるが。禪師に青林般柴語と云ふのがある。後來有僧問曰以下の因緣は木平の三般土と青林の三般柴とを混じたもので。佛眼の遠禪師の機緣もかくなりてある。
五。斫牌の勢を作す。　身を放つて臥して聞く狀をなすこと。
六。多少か徑截なる。　道には近路と迂路とあることちやが、打破の話は最も近路ぢやと云ふ。

第九節　類則提唱（其二）

其二　歸宗拽石

歸宗一日普請拽石。宗問ニ維那ニ什麼處去。下語云。要ル知ニ去處ヲ。去處に用處はなし。去處を問ふ樣にして句中を以て維那を如何と試みられたぞ。

那云拽ル石ヲ去。下語云。實頭人難レ得。

宗云石且從ニ儞拽一卽不ニ得動ニ着中心樹子一。下語云。一槌兩當。

中心は胸ぞ。樹子は蔕なり。石且從ニ儞拽一と云ふたは句中ぞ。不ニ得動ニ着中心樹子一と云ふたは本分の方ぞ。又不得動着中心樹子と云ふたは、收めて云ふた方もあるぞ。又下語に萬派聲歸ニ海上一消。中心樹子と云はれたは本分なり。不得動着と云ふたは、何に本分を動着することが有うぞ。動着せうずやふに云はれたところが句中なり。故に本分と句中の兩面目に用ひて一槌兩當と下語するなり。先師曰く。如何なるか是れ中心樹子。下語して云く柱天柱地。中心樹子と云ふは本分を云ふたぞ。字面は樹子は塔の心柱などのやうなことを中心の樹子と云ふたぞ。是を本分に用ひて柱天柱地と下語するなり。

其三　三箇木毬

雪峯一日見ニ玄沙來ニ三箇木毬一齊幅。下語云。

毬は手鞠なり。幅は身に寄り添ふ方なり。身を離れざる貌なり。三箇の木毬を一度に蹴上ぐるやうなことを一齊に幅すと云ふたぞ。

玄沙便作ニ斫牌勢一。下話云。深辨ニ來風一。

句中の方から鞠を蹴上ぐるやうに云ふたを。卽ち心得て鞠をはづす勢をしたぞ。又下語に知音知後更誰知。三箇の木毬を一齊に幅すと蹴上ぐるやうに云ひかけたを、斫牌の勢をなしたは、蹴かへす底ぞ。問頭に知音して振舞ふたぞ。

雪峯深肯レ之。下語云。雲收ニ山岳青一。

其四　雪峯輥毬

雪峰帳毬一日逢二玄沙一三箇木毬同帳。下語云。搭鉤搭索。
沙以坐具一作二斬勢一。下語云。深辨二來風一。知音知後更誰知。

前の古則と同樣に見るべし。

第四十五則　萬法歸一

第一節　垂示

垂示云。要レ道便道。擧レ世無レ雙。當レ行卽行。全機不レ讓。如二擊石火一。似二閃電光一。疾焰過風。奔流度レ刃。拈二起向上鉗鎚一。未レ免亡レ鋒結レ舌。放二一線道一試擧看。

【讀方】　垂示に云く、道んと要すれば便ち道ふ世こぞりて雙なし。行すべきに當りては卽ち行ず。全機讓らず。擊石火の如く閃電光に似たり。疾焰過風。流を奔り刃を度る。向上の鉗鎚を拈起するも、未だ免れず鋒を亡じ舌を結ぶことを。一線道を放ちて試みに擧す看よ。

【講義】　道はんと要すれば便ち道ふ世こぞりて雙なし。凡そ宗師たるものが宗乘を擧揚して學人を接化するに當りては、若し之を言句を以て顯はさうと思へば、如何なることゝて言はれぬといふことは無い。本より世間の常情を飛び超へた處で所謂比類無雙の言句を吐くぢや。行ずべきに當りては卽ち行じて全機讓らず。又之れを身に行ひあらはさうと思へば、如何なる手段方法を以ても之を行ふので、全機大用千聖にもゆづらず行するのぢや。一擧手一投足皆之れ千佛萬祖も企て及ばざる處。思ひ及ばざる處で、拄杖を拈すれば其の拄杖頭に十方法界を拈し來り、拂子を竪起すれば其の拂子頭上に三世諸佛を集め來りて說法獅子吼せしむると云ふ按梅で、而も其の機轉

の迅速なることは、擊石火の如く閃電光に似たり。瞬く猶豫もあらせず間に一髪を容れぬと云ふ早術で。其の嶮峻にして而も活潑なるは、恰も疾焔過風で、彼の大阪の大火事の如く、とても寄り付いて見樣もない大火事を、烈風猛風が吹き煽ぐと云ふ景況で、イヤハヤ手の付けて見樣もないことである。流を奔り及を度る。彼の矢の如くに流れ降る富士川の激流を渡り、又觸るれば秋水天によつて寒しと云ふ底の村正の銘刀下をくゞるときの機合を考へて見よ。少しでも油斷があり隙間があつたならば、南無三寶忽ちにして喪身失命して仕舞はねばならぬのである。さればかくの如き宗師家が、向上の鉗鎚を拈起する場合に臨みては、如何に俊發怜悧な學人でも、機鋒峻の行者でも、未だ免れず鋒を亡じ舌を結ぶことを。鋒をふせて戰を止め舌を結びて沈默して仕舞ふより外はない。鉗鎚は鉗はクサリ鎚はツチで鑄物師が銅や鐵を煆煉する時に用ふる器械であるから、其れを師家が學人を陶冶する手段に譬へたものぢや。一線道を放ちて試みに擧す看よ。此の一線道の上に暫くと云ふ文字を入れて見るが宜い。實に作家の手段は寸分の隙間もないから、到底手のつけやうも足の下しやうもないことであるが、今暫く假りに一筋の道を開いて此の公案を參究して見るがよいと雪竇老人一線路を通じて頭出せられた。

第二節　本則

擧僧問趙州。萬法歸一。一歸何處。拶著這老漢。堆山積嶽。或未然老僧在腨脚跟下。

一領布衫重七斤。果然七縱八橫。拽却漫天網。還見趙州麼。稱僧鼻孔曾拈得。還知趙州落處麼。若這裏見得便乃天上天下唯我獨尊。水到渠成風行草偃。荷州云我在青州作一領布衫重七斤。

【讀方】　擧す僧趙州に問ふ。萬法一に歸す一は何の處にか歸するや。這の老漢を拶着す。山に堆く嶽に積む。切に忌む鬼窟裏に向つて活計を作すことを。州云く、我れ青州に在て一領の布衫を作る重さ七斤。果然として七縱八橫。漫天の網を拽却す。還つて趙州を見るや。稱僧の擧孔還つて拈得す。還つて趙州の落處を知るや。若し這裏に見得すれば便ち天上天下唯我獨尊。水到れば渠成り風行けば草偃す。荷し或は未だ然らずんば老僧は腨か脚跟下に在らん。

【字解】　一。趙州。　前にも出た通り趙州觀音院の從諗禪師で、南泉普願禪師の法嗣である。六十にして初めて參し。修行二十年にして八十歳に至りて大悟徹底し、其後四十年爲人度生して、百二十歳にして入滅せられたと云ふことぢや。二。萬法一に歸す一は何の處にか歸す。　萬法は森羅萬象卽ち色心一切の諸法。天地間にありとあらゆる物がら、ことがらぢや。其の萬法は皆各其の特質特徴がありて、千差萬別、決して同じものとてはないけれども、然しそれは表面に顯はれた上のこと。能く〳〵本源を極めて見れば、唯一つになつてしまふ。眞如云云ひ本性と云ひ、涅槃と云ひ妙心と云ひ法身と云ひ菩提と云ひ、這箇と云ひ那一句と云ひ、本來の面目と云ひ主人公と云ふのがそれである。儒教では太極と云ひ基督教では唯一眞神と申すそうぢや。千差萬別なる一切諸法が一相平等なる眞如法性に結歸することは恰も千波萬波の波濤が湛然清澄なる海水の一に歸すると云ふことは明かであるが。然らば其の眞如法性の一は抑も何處に結歸するのであるか。太極はソモ何に歸するか無極に歸するか無々に歸するかと云ふ一僧の質問であらう。

三。　這の老漢を拶着す。　老漢に趙州和尚で。能く問ひ詰めたぞとケシカケル。

四。　山に堆く嶽に積む。　ナニ其の一の歸處となる。ソラ目先き足先き、何程でもあるわと云ふ。

五。切に忌む鬼窟裡に向つて活計を作ん。　一書生あり南隧の草廬を訪ひ大に禪理を談じて南院をして窮せしめんとす。南院之れを知り茶をすゝむ。未だ飲み畢らざるに南院亦汲まんとす。書生辭して曰く、充てりつぐも又入らずと。南院之れに應じて曰く、邪心滿てり理も又入らずと。書生赧然として去ると云ふ處である。胸中に一物あつて趙州を閉口させようと思つたらソレコソ大失敗。恥かきであるぞと云ふ。

六。果然として八縱八横。　サスがは趙州。自由自在なるものぢやと嘆稱する。

七。漫天の網を　拽却す。　ソラ一領の布衫が滿天の網となつて森羅萬象皆引きかけてくれたぞ。

八。禿僧の鼻孔還つて拈得す。　一言下に天下の禿僧の鼻孔を悉くヒン捏ぢられたぞと趙州の作略を稱揚する。

九。還つて趙州の落處を知るや。　學人此問に對して是の如く答へられた趙州の落處がわかるかどうかと云ふ垂誡である。

一〇。若し這裏に見得すれば便ち天上天下唯我獨尊。　諸人此の答話を會得して見よ。鬼に金棒虎に翼で、天下に獨歩することが出來るであらう。

一一。水到れば渠成り風行けば草偃す。　趙州の答話。　如何にも無心にして能く物に應じられた。

一二。苟し或は未だ然らずんば老僧は爾が脚跟下に在らん。　老僧とは趙州和尚で、爾とは問者を指したものである。趙州に此の無心にして自由なる働きがなくんば、貴公はどんな目にあつたかも知れぬぞと云ふ。

第三節　本則提唱

僧問二趙州一萬法歸レ一一歸二何處一。下語云。萬里一條鐵。月白風清。

悉く本分に安住する者が、前生で輪廻を受けたるに依て今此の色相を受けれども、一度は死するを本分に安住すと云ふ。是れ則ち一に歸すると云ふぞ。前は萬里一條鐵を言と句を用ふれども、今は月白風清と云ふ句を用ゆるぞ。何の道理もない句、可然と云云。先師下語に人有レ將二虎鬚一。

州云、我在二青州一作二一領一布衫一重七斤。下語云。遇レ茶喫レ茶。遇レ飯喫レ飯。

重きこと七斤と什麼の道理もないぞ。先師下語に薫風自レ南來殿閣生二微涼一。尺長寸短。

第四節　本則評唱和譯

若し一擊して便ち行く處に會し去らば、天下の老和尚の鼻孔一時に穿却せん。爾を奈何ともせずして、自然に水到れば渠成る。若し或は躊躇せば老僧爾が脚跟下に在らん。佛法省要の處は言の多きにあらず、語の繁きにあらず。只這の僧の趙州に問ふが如くんば、萬法一に歸す一は何の處にか歸すや。他却つて答へて道ふ。我れ青州に在つて一領の布衫を作る重きこと七斤と。若し語句上に向つて辨せば、錯つて定盤星を認む。語句上に向つて辨せずんば、爭奈せん却つて恁麼に道ふことを。這箇の公案見がたしと雖も却つて會し易し。會し易しと雖も、却つて見難し。難きは則ち銀山鐵壁。易きは則ち直下惺々。爾が計較是非の處なし。此の話普化の來日大悲院

裏に齋話ありと道ふと更に兩般なし。一日僧趙州を問ふ。如何なるか是れ祖師西來の意。州云く、庭前の柏樹子。僧云く、和尚境を將つて人に示すること莫れ。州云く、老僧曾つて境を將つて人に示さず。看よ他恁麼に極則轉不得の處に向つて轉得して自然に蓋天蓋地なるとを。若し轉不得ならば途に觸れて滯と成ん。且らく道へ他佛法の商量ありや也た無しや。若し他佛法ありと道はゞ、他又何んぞ曾つて心と說き性と說き玄と說き妙と說かん。若し他佛法の旨趣無しと道はゞ、他又曾つて儞が問頭に辜負せず。豈に見ずや僧木平和尚に問ふ。如何なるか是れ佛法の大意。平云く、這箇の冬瓜許の如く大なりと。又僧古德に問ふ、深山懸崖迥絕無人の處に還りて佛法有りや也た無しや。古德云く、有り。僧云く、如何なるか是れ深山裏の佛法。古德云く石頭大底は大、小底は小と。看よ這般の公案諸訛什麼の處にか在る。雪竇他の落處を知つて、故らに義路を打開して儞がために頌出す。

【字解】一。佛法省要の處は言多きにあらず語繁きに在らず。何も八萬四千の法門と云ふが佛法の尊さ所以ではない。四拾九年一字不說。靈山會上の拈華に看よ。そこに千斤の重味があるではないか。

二。惺々。小利口と云ふ程のこと。

三、此の話普化の來日大悲院裏に齋話ありと道ふと更に兩般なし。普化は鎭州の普化和尚で盤山寶積の嗣、馬祖の孫であつて普化宗の開祖と仰がれる人である。

四。又曾古德に問ふ。古德は、廬山歸宗寺の道詮羅師で、曾つて九峰山に住するの時、一僧ありて、九峰山中遍つて佛法ありや也た無しやと問ひかけた。師曰く、有り。僧云く、如何なるか是れ九峰山中の佛法。師曰く石頭大底は大、小底は小。大きな石は大きいし小さい石は小さいぞとの答話である。之れは垂示に所謂る道はんと要すれば卽ち道ふ世こぞりて雙なしと云ふ風情で手のつけやうも足のおろしやうもない處である。

第五節　類則提唱

其一　趙州柏樹子

一日僧問趙州如何是祖師西來意。

意と云ふ物は根本無心のものぞ。先師拶して云く、無心ならば春の溫を何者が知つたぞ。辨じて云く、意と云ふ物は有に似て無きものぞ。春の溫氣も有に似て無きものぞ。又云く無心とは何と見たぞ。辨ず、心法に形なし十方に通貫する程に意と云ふものは、有に似て無き物ぞ。拶して云く過去は如何。有に似て無いものぞ。いとしい悲しいと云ふは如何。有に似て無いものぞ。現前は如何。有に似て無い者ぞ。下語に云く、心有也曠却而受。沈淪心無也刹那而成正覺。意と云ふものは有に似て無いと云ふが定辨ぞ。喩へば鏡中の影水中の月の如し。

州云庭前柏樹子。下語云。柳綠花紅。

有に似て無きものぞ。柏樹によらず千草萬木何れも同じことよ。人の生れ來るも、千草萬木の生長するも、皆地水火風が和合して濕を以て生ずれども、根本無心のものぞ。下語に云く、柳綠花紅。庭前の柏樹子と答へたも何の道理もない處を答へたもの也。拶して云く、未生以前と又生れた今日の上と。死して後と什麼と用いたぞ。草木の生せざる以前も、人間の未生以前も同じことぞと示し給ふは、畢竟根本無心のところぞ。金剛經に云く。過去心不可得現在心不可得未來心不可得と。是れを三世不可得と云ふぞ。師歌を引いて曰く、櫻木を碎いて見れば花もなし花の種とは春や知るらん。又云く。春毎ににほふ吉野の山櫻木をわりて見よ花の有るかは。此の道歌も根本無心な處を知らしめんとてのことなり。拶して云く、柳綠花紅と云ふ意旨如何。一切草木の天地の濕を以て生じ、其れぞれに枝葉がさかえて見ゆれども、年中に飛花落葉し或は枯れて落居は皆無なり。今日の上も、父母陰陽和合して假りに生じ來れども、根本は無心の境界なり。是れを現成と云ふぞ。現成とは現じなると云ふことぞ。こゝをば變通して現成の上を截斷して下語に、柳不レ綠花不レ紅と何も現成の句なれども、心持は截斷の方なり。アラズと云ふ不の字をとがめて截斷の方に用ふる也。拶して曰く、柳不レ綠花不レ紅と云ふ意旨如何。下語して云く佛祖不レ識。柳綠ならず花紅ならざる時は、三世諸佛も不識と云ふことなり。拶して曰く、佛祖不識と云ふ意旨如何。下語して曰く、柳綠花紅、佛祖不識と云ふ時は其の道理もないと云ふこと也。拶して曰く、柳綠花紅と云ふ意旨如何。下語して云く、變通。句中は柳綠花紅と云ふことは、迷倒の衆生までも知る。其れをうつてかへして現成の上を截斷して柳不レ綠花不レ紅と用ひたる處を變すれば通ずと云ふ也。

後來法眼禪師問覺鐵觜公云。承聞超州有柏樹子話是否。鐵觜云先師無箇話莫誘先師好。下語云。柳綠花紅。山青水綠。

先師に箇の話が有るの無いのと云ふて、先師を誘することの無きを好とすることなり。眞直に云ふたものぞ。此の話則を見せは、一句參得の知識などを是非することは、此の公案を用ひざるが故なりと先師の仰言あり。

法眼云眞獅子兒善獅子吼。下語云。知音更在青山外。

先師を誘するなくんば好しと云ふた處を褒美して、知音して眞の獅子兒善く獅子吼すと云へり。

一日僧問趙州如何是祖師西來意。州云柏樹子。下語云。柳綠花紅。

僧云和尚莫將境示之。下語云。貪着天上月失脚掌中珠。

柏樹子と云ふ答話で西來意がやがて知れたを。此僧が得心得ずして、柏樹子と云ふを、境とばかり心得へて、此の如く問ふたなり。

州云、老僧不曾將境示人。下語云。臂膊、不向外曲。

祖師西來意を示したを、得心得ぬかと眞直に將境不示人と云ふた心なり。

其二　木平冬瓜

僧問、木平和尚、如何是佛法大意。平云、這箇冬瓜如許大。下語云。月白風清。

大意の落居道理もなき處を、這箇冬瓜如許大と答へたなり。現成の方ぞ。

其三　深山裡佛法

僧問、古德、深山懸崖絶人處、還有佛法也否。下語云。問得可始得。

古德云、有。下語云。有問有答。

僧云、如何是深山裡佛法。下語云。不妨實頭。

さりとては知らずんば深山裏の佛法とも問はうず程に不妨と云ふ二字を用ふるなり。

古德云、石頭大底、大小底、小。下語云。月在天上、水在瓶。百花春到爲誰開。

爲人して云へり。月在天上、水在瓶と云ふ句は、現成の句なれども、月在天水在瓶と云ふて聞いた處が爲人なり。

第六節　頌

編辟曾挨老古錐何必。挨拶着這老漢。七斤衫重幾人知再來不直半分錢。直得口似匾擔。又却被他贏得一鐶。如今拋擲西湖裏還雪竇手脚始得。山僧也不要。下載清風付與誰自古自今。月道雪竇與他酬唱與他下註脚。一子親。

【讀方】編辟曾つて挨す老古錐。何ぞ必とせん。這の老漢を挨拶着す。挨拶して何の處に向て去る。七斤衫の重さ幾人か知らん。再來半文錢に直らず。直に得たり口匾擔に似たり。又却つて彼に一鐶を贏ら得らる。如今拋擲す西湖の裡。雪竇の手脚に還して始めて得てん。山僧も也た要せず。下載の清風誰にか付與せん。自古自今。且らく道へ雪竇他のために唱酬するか他のために註脚を下すか。一子親しく得たり。

【字解】一。何ぞ必とせん。何もそのやうに趙州を問ひ詰める必要はない。

二。這の老漢を挨拶着す。本則の着語にもあつたが爰はない方がよからう。

三。挨拶して什麼の處に向つてか去る。何處まで趙州を問ひ詰めるつもりか知らんが却つて脚をすくはれはせぬかな。脚本御用心とは云ふ。

四。再來半文錢に直らず。雪竇又も持つて來られたか、先き程趙州老から承つたことであるから。最早買ひ手も御座るまいと云ふ。

五。直ちに得たり口匾擔に似たり。　匾擔は荷物を擔ふ時の横木のことで、言ひたいと思ひつゝも言ひ得ない時の口もとが荷物の重いので擔木のたゆむやうな貌になると云ふ悪口であるそうだから、爰では趙州の布衫七斤には何人も閉口であらうと云ふ。

六。又却つて彼に一鏹を贏ち得らる。　汝一鏹渠れに及ばずと云ふことがあるが、鏹は物の數を調べる竹のことで算盤の玉と云ふ程のことであらう。如何に怜悧らしく問ひつめても到頭趙州にしてやられたなと云ふ。

七。雪竇の手脚に還して始めて得てん。　雪竇でなくんば此の働きは作し難きことゆへ。捨るも取るも雪竇に任せて置くがよいと云ふ。

八。山僧も也た要せず。重きこと七斤なんてソンナ重い布衫など圜悟など更々必要がないと云ふ按梅。

九。自古自今。　古今不易の清風がいつでもどこでも颯々と吹きとなして居るから取るも捨てるも思ひの儘である。

一〇。且らく道へ雪竇他のために唱酬するか他のために註脚を下すか。　上の他は趙州老で下の他は學人を指したものである。雪竇の意はどこにあるぞ。諸人叅究して見よと垂誡する。

一一。一子親しく得たり。　雪竇能く趙州の眞意を頌出せられた。實に趙州の一子と稱すべきであると讃嘆する。

【講義】　編辟曾つて挨す老古錐。編は編物で物をあむこと。辟は逼也迫なりでつめよせると云ふことであるから、織物を作る時に製織機で糸を段々とあんでつめよせることを編辟と云ふのである。評唱にも出て居る通り、人天眼目に十八問と云ふことがあるが。その中では今は編辟問と云ふのにあたるのであつて、千差萬別とある一切萬法を段々と詮じつめて見ると結局一に歸することであるが。更に其の一は何處へ歸するのかと詰め寄り責め迫まるありさまである。曾つて挨す老古錐。挨は推なりで一僧が趙州に萬法一に歸す一何の處にか歸すると推問してくることで。老古錐は、字の如く古い錐であるから佛法禪道の金氣が拔けきつて益々鋭利になつたことで、卽ち趙州和尚を指したものである。七斤衫の重さ幾人か知らん。七斤衫は趙州和尚が青州と云ふ土地でこしらへられた布の衣で其の重さ七斤あつたと云ふことである。一僧が一番勝負をと頻りに追ひ詰めて見たけれども、趙州もさるものでヒラリと七斤の布衫で體をかはされてしまつたが、その趙州七斤の布衫の重みを果して何人が知つて居るであらう。恐らくは此の僧のみでなく、天下の學人何人と雖も知つてをるものはあるまいと云ふ。如今抛擲す西湖の裏。趙州七斤の布衫と云へば如何にも貴重な品であるから何處かに秘藏されて居やうと思ふであらうけれども、吾れ雪竇は何ものそのやうな衣には用がないによりて、雪竇山の西の湖水へザンブと計り抛擲して棄てゝしまふた。下載の清風誰にか付與せん。河舟が荷を積んで河上へ上るのが上載。其の荷物を盡く卸してしまふて空舟で河下へ降つて往くのが下載であると太平御覽に見へてある。雪竇老人は趙州の布衫は云に及ばず佛法禪道、菩提も涅槃も悉く西湖の中へザンブと計りブン投げて仕舞つて、スツカリ空虛になつた下り舟へ乘り込んで、而も出し風と云ふ追手日和で矢を射るが如く走りゆく愉快さ。誰れに之の愉快さを分つたものであらう、颯々として目にも見へず、手にも採れぬ清風であるが。望みてあればくれてもやらうと云ふ洒落の境界。雪竇の獨り舞臺である。皆さんどうし

てアノ雪竇が面白そうに謠ふて居る其の聲を聞いたものでありましやう。

第七節　頌評唱和譯

十八問の中此れ之れを編辟問と謂ふ。雪竇道く、編辟曾つて拶す老古錐と。萬法を編辟して一致に歸せしむ。這の僧他の趙州を挨拶せんと要す。州也た妨げず作家なることを。轉不得の處に向つて出身の路あり。敢へて大口を開いて便ち道ふ。我れ青州に在つて一領の布衫を作る重きこと七斤と。雪竇道く、這箇七斤の布衫能く幾人あつてか知る。如今西湖の裏に抛擲す。萬法一に歸す。一も亦要せず。七斤の布衫も亦要せず。一時に西湖裏に抛在す。雪竇洞庭の翠峰に住す。西湖有るなり。下載の清風誰にか付與せんと。此は是れ趙州衆に示す。爾若し向北より來らば爾がために上載せん。爾若し向南より來らば爾がために下載せん。爾若し雪峰雲居より來らば、也た是れ箇の擔板漢。雪竇道く、此の如きの清風阿誰にか付するに堪へん。上載は爾がために心と說き性と說き玄と說き妙と說く。種々の方便なり。若し是れ下載は更に許多の義理玄妙なし。有る底は一擔の禪を擔いで趙州の處に到りて一點も使ひ着す。一時に他のために打疊して灑々落々として一星事なからしむ。之れを悟り了りて還つて未悟の時に同じと謂ふ。如今の人盡く無事の會をなす。有る底は道ふ迷なく悟なし。要に求ることを要せずと。只佛未だ出世せず達磨未だ此土に來らざる時の如んば、恁麼ならずんばあるべからず。佛の出世を用いて什麼かなさん。祖師更に西來して什麼か作さん。總に此の如くならば什麼の干涉かあらん。也た須らく是れ大徹大悟し了りて、舊に依りて山は是れ山水は是れ水、乃至一切萬法悉皆成現して、方に始めて箇の無事底の人となるべし。見ずや龍牙道く、學道は先づ須らく悟由あるべし。還つて曾つて快龍舟を鬪すが如し。然も舊と閑田地に閣くと雖も、一度贏ち來りて方に始めて休すと。只趙州這箇七斤の布衫の話子の如きは、看よ他の古人恁麼に道ふ、金の如く玉の如きことを。山僧恁麼に說き、諸人恁麼に聽く。總に是れ上載。且らく道へ作麼生か是れ下載。三條椽下に看取せよ。

【字解】一。轉不得の處に向つて出身の路あり。　轉不得の處は物の極まつてニツチもサツチも行かぬ處であるが、然しながら物極まれば路生ずで、爰に出身の路が開けて來るものである。

二。爾若し向北より來らば爾が爲めに上載せん。　趙州の語に北人の來るに向つては他に上載を與へん。南人の來るに向つては他に下載を與へんと云ふがある。下載は船より物を下すことで不立一法の掃蕩門にたとへ。上載は船上に物を載するの謂で理性玄妙を說く建立門に譬へられてある。太平御覽に、雲璋山又の名は射的山と云ふ山がありてそこに一人の仙人が住居してゐた。常に的を射ては鵰に箭を拾はせて居たが、有る時のこと、その鵰が一本の箭をなくしてしまつた。色々に搜してもわからない。處へ一人の樵子があり て其の箭を得て仙人に與へた。仙人は大に悅びて何かの禮をと云ふた處が、樵子の云ふには、某多年の間柴を斫つて舟に掉し以て渡世をして居ることであるが、這迎當に風の爲めに苦しんで居りますと云ふたから。そこで仙人は樵子に東西南北の風を與へた、その東南の風を上載と云ひ、西北の風を下載と云ふとのことである。

三。悟り了りて還つて未悟の時に同じ。　西天の第五祖提多迦尊者の付法偈に悟了同二未悟一無心亦無法と云ふがある。之れが灑々落々の境界である。

四。快龍舟を開すが如し。　荊楚歳事記に、屈原此の日を以て汨羅に死す、人其の死を傷み並びに舟楫を以て之れを拯ふ、今に至りて競ひ渡る。是れ其の遺俗なりとありて、舟で對岸へ渉るの遲速を爭ふことである。船も對岸につけば早や要なきもの、悟り了れば罷休する、これが舊の閑田地に閑くと云ふものである。

五。三條掾下に看取せよ。　人々自ら知れとは云ふ。

第四十六則　鏡清雨滴

第一節　垂示

垂示云。一槌便成、超凡越聖。片言可折。去縛解粘。如氷凌上行劒刃上走。聲色堆裏坐。聲色頭上行。縱横妙用則且置。刹那便去時如何。試擧看。

【讀方】　一槌に便ち成ず、凡を超え聖を越ゆ。片言にして折むべし、縛をも去り粘をも解く。氷凌上に行き劒刃上を走るが如くにして、聲色堆裏に坐し。聲色頭上に行く。縱横妙用は且らく置く、刹那に便ち去る時如何。試みに擧す看よ。

【講義】　一槌に便ち成す、凡を超へ聖を越ゆ。槌は鐘や鼓と等しく印度以來佛家に用ゆる處の鳴物で、八角に削つた大きな木を立てゝ置いて、それを小さく八角に削つた大黑天の槌のやうなもので其の大きな木の小口をカチリと鳴らすものである。今日でも禪林に於ては嚴肅な儀式を行ふ時は必ず之れを用ふるので、黑白の布薩會の時の如きは維那なる者が槌を打つて偈を以て大衆一同に宣言することがある。ソコで今此の垂示は師家の學人を接せらるゝ手段を云ふたもので、カチリと一槌ならした計りで、未だ何事も言はない中に早や便成正覺とトウの昔に大悟徹底させると云ふ宗師家の作略は、超凡越祖で凡夫ぢやの聖者ぢやのと云ふ境界を全く透りこしてしまふた

境界でありて、到底常情の判斷の出來ぬところである。片言にして折むべし。論語に片言以て獄を折むべきものは其れ由かとあるが、卽ち如何に困難複雜なる問題に出あふても一言と迄行かず僅か片言で以て此事を決斷して繫縛なからしむる。折は決擇の義で明確に判斷を下すことである。縛をも去り粘をも解く。縛は纏縛で色々の煩惱妄念のために縛りくゝられ、粘と糊で以て貼りつけたやうに妄念執着を離れ得ない姿である。それを宗師家は僅に片言半語を以て切解分離させてしまふ。氷凌上に行き劒刃上を走るが如く。宗師家の縱橫無碍の妙用、接化の手段の活潑敏捷なことは、彼の氷上を涉るもの劒刃上を走るものは少しの油斷、少しの躊躇でもあつたならば忽ちにして喪身失命と息の根はたへ果てゝ仕舞ふことであるが、其れにもまさりて尙恐るべき、聲色堆裡に坐し聲色頭上に行く。聲色は色聲香味觸法の六境の中初め二つを擧げたもので、此等の六は眼耳鼻舌身意の六根門より入りて、夫れ夫れ煩惱妄念を引き起す處のもの卽ち誘惑の種である。好い聲をきけばモット聞きたい。厭な聲をきけば腹がたつ。美しい色を見てはほしい可愛の念が起ると兎角順境には貪欲の煩惱を起し、逆境には瞋恚の煩惱を起す、其の煩惱妄念の中へ園林遊戲地と生死の稠林に入りて煩惱妄念の中にありながらも恰も花に笑ひ鳥に歌ふが如き思ひで行きもすれば坐しもするのである。縱橫の妙用は且らく置く刹那に便ち去る時如何。縱橫無碍の妙用は是れ師家分上の境界ゆへ今云ふに及ばぬことであるが、其の接化を受けて一槌片言の下に忽ち徹底し去る擧者分上の機用は如何なるものであらうだ、試みに擧す看よと本則をよび出した。

第二節　本則

擧鏡清問僧。門外是什麼聲。僧云。雨滴聲。清云。衆生顚倒。迷己逐物。僧云。和尙作麼生。清云。泊不迷己。意旨如何。僧云。泊不迷己。意旨如何。

【讀方】擧す鏡清僧に問ふ、門外是れ什麼の聲ぞ。僧云く雨滴聲。妨げず實頭なることな。清云く、衆生顚倒して己に迷ふて物を逐ふ。事生ぜり。其の便を得るに慣れたり。僧云く和尙作麼生。清云く、泊んど己に迷はず。泊不迷己の意旨如何。僧云く泊んど己に迷はざる意旨如何。這の老漢を拶着す。清云く、出身は猶ほ易かる可し脫體に道ふことは難かるべし。

【字解】一。鏡清。鏡清道怤禪師は雪峯義存の法嗣で雲門とは兄弟弟子の間柄である、常に啐啄同時の機と云ふことを唱へられたと云ふことは第十六則で云ふた通りである。

二。等閑に一鉤を垂る。　甘く鯉でも釣れゝばよいが。

三。驚を忠ひすんば問ふて什麼かせん。鏡清驚ではあるまい。雨の音は誰にも分つたこと。問ふて何にするぞ、諸人能く聞けと此の問の尋常でないことを響かせる。

四。妨げず實頭なることを。　眞直ぐな申し分であると云ふ。

五。好箇の消息。　うまく言つたと稱讃する。

六。衆生顛倒して己に迷ふて物を逐ふ。　一僧の此に於て脱體し得たりや否やを勘驗する爲めに言はれたものであつて、語は首楞嚴經第二に一切衆生從二無始一來迷レ己爲レ物失二於本心一爲レ物所レ轉故乃至若能轉レ物則同二如來一と云ふ文に依られたものである。

七。事生ぜり。　偖こそ一事件出來した。佛法臭くなつたと云ふ。

八。其の便を得るに慣れたり。　誠に能く人を接することになれたものぞと稱讃する。

九。鏡鈎搭索。　不盡の火災を關防する之具也と申して、鏡鈎と云ふは日本の熊手のこと、搭索は物を引き寄せる鎖のことであるから、さすがは鏡清思ふ存分に一僧を引捉へられたと云ふ。

一〇。他の本分の手脚に遲す。　斯ふ云ふ手段は鏡清の獨り藝であるから任せて置くがよろしいと云ふ。

一一。果然として敗缺を納る。　夫れ見たことか、云はぬことぢやない。自分で自分の愧をさらしたであらう。

一二。槍頭を轉じ來れり。　某は雨滴聲を雨滴聲と聞いたまでのこと、あなたは一體如何御聞きなされましたと突き込んだところ。爰一くせありげである。

一三。妨げず當り難し。　此の鋒先き。鏡清も當り難いであらう。

一四。槍頭を轉じて倒まに人を刺す。　此の僧槍をおつ取りなほして鏡清に撞いてかゝつた。攻勢かなと冷かす。

一五。咄。　エッ云ひごたへがないと打拂つた。

一六。直に得たり分疎不下。　分疎不下は申し譯が立たぬと云ふこと。

一七。人を逼殺す。　鏡清を嚴しく責め詰めたところは餘程のお手柄であるとをだてる。

一八。前箭は猶ほ輕く後箭は深し。　和尚作麼生はさもなかつたが此の一拶はのぶかに射弓けた。清情痛みが強い走な。

一九。出身は猶ほ易かるべきも脱體に道ふことは難かるべし。　聲色以外に身を出して悟りに落つくことは容易であるが、迷ひの悟りのと云ふ場合を透りぬけて脱體その儘に言ひ得ることは容易なことではない。

二〇。子を養ふの緣。　鏡清餘りお婆々めいてなる。咬んで含むる老婆禪では面むけがならぬと云ふ。

二一。然かも是の如くなりと雖も德山臨濟ならば什麼の處に向ひ去らん。　德山臨濟のやうな黐棘な手段の師家ならば勿論のこと棒喝が飛ぶであらう。

二二。又喚で雨滴聲と作さずんば什麼の聲をか作さん。　雨滴聲を雨滴聲と答へなんだら彼れ此れむつかしくもならなかつたであらうにと首をひねつて。然らば何の聲と答へたものであらうぞと學人に參究をすゝめる。

二三。直に得たり分疎不下。　雨滴聲となすもなさゞるも埒のあかぬこと。滴清もサマザマの云ひ分。くだらぬことであると云ふ。

第三節　本則提唱

鏡清問レ僧門外是什麼聲。下語云。言中有レ響。

先師の下語に、探竿影草。言中有レ響。

僧云、雨滴聲。下語云。實頭人難得。隨語轉。

先師下語に、相隨來也。

清云、衆生顛倒迷己逐物。下語云。痛處下針錐。

不心得ぢやほどに、直罰爲人して云はれたぞ。人人自己の上にこそ悟りはあれ。餘處には有るものか。雨滴の聲などを認めて佛法と云ふたはソバサマなることなり。

先師云く、痛處下ニ針錐一。要三逼レ狗透レ墻。

僧云、和尚作麼生。下語云。棺木裏瞪眼。一死更不二再活一。

先師下語に、問得可二始得一知。未レ見二其表一。

清云、泊不レ迷レ己。下語云。重疊關山路。

猶も句中が深い心で不迷己と云ふたぞ。先師下語に藏レ身露レ影。薫風自レ南來殿閣生三微涼一。草自青烟自白。

僧云、泊不レ迷レ己意旨如何。下語云。鼠口終無二象牙一。死來多少時。

又惱亂春風卒未レ休と下語するぞ。此句機の方にも用ふれども爰では抑下に用ふるなり。先師下語に日月麗レ天盲人模レ地。眼看如レ盲口說如レ啞。

清云、出身可レ易脫體道應レ難。下語云。爲三悲二故有二落草之說一。

脫體道ふと云ふたは本分を指して爲人して云へり。出身猶可レ易と云ふたは身を世に出すことは易けれども、今日の上を截斷して本分に近づくことは難かるべしと爲人して云ふたものなり。先師下語に半開半合。天東南高地西北低。

第四節　本則評唱和譯

只這裏也た好し薦取するに。古人一機一境を垂示して人を接せんことを要す。一日鏡清僧に問ふ。門外是れ什麼の聲ぞ。僧云く雨滴聲。清云く衆生顛倒して己れに迷ひ物を逐ふ。又問ふ門外什麼の聲ぞ。僧云く蛇鳩の聲。清云く、無間の業を招かざることを得んと欲せば、如來の正法輪を謗すること莫れ。又問ふ、門外什麼の聲ぞ。僧云く、蛇蝦蟆を咬むの聲。清云く、將に謂へり衆生苦と更に苦の衆生あることを。此の語前頭の公案と更に兩般なし。祇僧家這裏に於いて透得し去らば、聲色堆裏に於いて妨げず自由なることを。若し透不得ならば便ち聲色の所拘を被らん。這般の公案諸方之れを煅煉の語と謂ふ。若し是れ煅煉ならば只心行と成る。他の古人爲人の處を見ず、亦喚んで聲色を透して一には道眼を明らめ、二には聲色を明め、三には心宗を明め、四には妄情を明め。五には展演を明むと作す。然も妨げず子細なることを。爭奈せん窠臼の在るあり。鏡清恁麼に問ふ。門外什麼の聲ぞ。僧云く雨滴聲。清却つて道ふ。衆生顛倒して己に迷ひ物を

逐ふと。人皆錯つて會して、喚んで故意に人を轉ずと作す。且得沒交渉。殊に知らず鏡清爲人底の手脚あつて、膽大にして一機一境に拘らず。忒煞だ眉毛を惜まざることを。鏡清豈に是れ雨滴聲なることを知らざらんや。何ぞ更に問ふことを消する。須らく知るべし、古人探竿影草を以つて這の僧を驗んと要するを。這の僧也た善く挨拶して便ち道ふ。和尚什麼生と。直ちに得たり鏡清泥に入り水に入りて他に向つて道ふことを。泊んど己に迷はざらんとす。其の僧己に迷つて物に逐ふは則ち故らに是。鏡清什麼としてか也た己れに迷ふ。須らく知るべし。他を驗する句中に便ち出身の處あることを。這の僧太だ懞憧、此話を勦絶することを要して、更に問ふて道く、只箇の泊んと己に迷はずと云ふ意旨如何と。若し是れ德山臨濟の門下ならば、棒喝己に行せん。鏡清一線道を通じて他に隨つて葛藤を打して更に他に向つて道ふ。出身は猶易かるべきも脫體に道ふことは難かるべしと。然も恁麼なりと雖も、古人道く相續すること也た大に難しと。他の鏡清只一句に便ち這の僧のために脚跟下の大事を明す。雪竇の頌に云く。

【字解】一。只這裏也た好し　薦取するに。　此の雨滴の聲爾が出身の處ある程にと云ふ。

二。雨滴聲乃至僧等。　之の二十二字は蜀本には全くなき文字であるから削つた方がよからうと思ふ。

三。無間の業を招かざることを得んと欲せば如來の正法輪を謗ること莫れ。　誹謗正法は五無間業の一つである。

四。聲色堆裏に於いて妨げず自由なることを。　具さに云へば色聲香味觸法の六塵で、是れ皆煩惱妄念の種となるものであるが、若し這般の公案を透得し得れば、恰も蓮の泥中にありて汚泥に染まぬが如く、煩惱妄念の中にありながら、更にその煩惱妄念にさへられることはないのである。

五。煨燼の語と云ふ。　不意の義と申して、此の僧に工夫をさせる言葉であると云ふのである。

六。心行となる。　分別情慮のこと。

七。展演。　展は展開。演は演說で卽ち說敎のことである。

八。人智錯つて會して喚んで故意に人を轉ずと作す。　何のこともなきに、故意に言說を設けて人を轉動する手段とすると云ふ。

九。懞憧。　心亂なりと申して鈍漢と云ふほどのことである。

一〇。古人道く。　古人は洞山良价禪師で、一僧の如何なるか是れ主中の主との問に對して恁麼に道ふことは卽ち易し、相讀することは大に難しと答へられた因緣である。

一一。雪竇の頌に云く。　此の言なくもがな、後人の妄添であらう。

第五節　類則提唱

其一　鶉鳩聲

鏡清問レ僧門外是什麼聲。下語云。言中有レ響。
僧云鶉鳩聲。下語云。實頭人難レ得。當面蹉過。迷レ己逐レ物。
清云欲得レ不レ招無間業一莫レ謗二如來正法輪一。下語云。痛處下二針鍼一。

根本の上には正法輪と云ふことも無いぞ。無間業と云ふは地獄のことぞ。其の樣な不心得なる

ことを云ふは、無間の業を招いた物よと痛めて云へり。

其二　蛇咬蝦蟆

鏡清又問門外是什麼聲。下語云。挽鈎搭索。僧云蛇咬蝦蟆聲。下語云。這死蝦蟆。迷己認影。

句中を心得ざる鈍なる僧ぞ。

清云將謂衆生苦更有苦衆生。下語云。指槐樹罵柳樹。

本分上ばかり必得て句中を知らざる處に當つて云ふたぞ。指槐樹と云ふたは、僧を指したぞ。罵柳樹と云ふたは、衆を罵つて云はれたぞ。鏡清の將に謂へり衆生苦と更に苦の衆生ありと云ふは、人間の上にばかり苦があるかと思へば、蝦蟆の上にも苦があるよと云ふ義ぞ。底心は、僧の句中を得知らぬは、蝦蟆の蛇に呑まるゝ如く痛ましいことぢやと云ふ心ぞ。蝦蟆の上を云ふやうで其の實僧を罵つて云ふたものよ。

第六節　頌

虛堂雨滴聲。從來無問斷。大家在這裏。作者難酬對。果然不知。山僧從來不是作者。流刺頭入膠盆。不喚作雨滴聲。喚作什麼聲。依然還不會。山僧幾曾問爾來。這漆桶還我無孔鐵鎚來。會不會。雨頭坐斷。雨處不分。不在這閑邊。南山北山轉雰霈。頭上頭下。若喚作雨聲。則瞎不喚作雨聲。須是脚踏實地始得。

【讀方】虛堂雨滴聲。從來問斷なし。大家這裏に在り。作者酬對し難し。果然として知らず。山僧從來是れ作者にあらず。權あり實あり放あり收あり殺活擒縱。若し曾つて流を入すと謂はゞ頭を刺して膠盆に入る。喚んで雨滴聲となさずんば喚で什麼の聲とか作さん。依然として還つて不會。山僧幾びか曾つて爾に問ひ來る。這の漆桶我に無孔の鐵鎚を還へし來れ。會不會。雨頭坐斷。雨處不分。這の雨邊に在らず。南山北山轉た雰霈。頭上頭下。若し喚んで雨聲となさば則ち瞎喚で雨聲となさずんば喚で什麼の聲とか作さん。這裏に到つて須らく是れ脚實地を踏で始めて得べし。

【字解】一。從來問斷なし。　此の雨は無始劫來末來永劫にかけて決して止むことのない雨滴であるが。何んと諸人雨滴の聲を聞えますかな。

二。大家這裏に在り。　三世の諸佛歷代の祖師乃至は日月星辰山川草木皆悉く此の雨滴聲中に生々存々して居るのである。

三。果然として知らず。　案の通り誰れにも出來ないことであると云ふ。

四。山僧從來是れ作者に非ず。　斯く申す圓悟などは本より作者でも衲僧でもないから、最初より酬對しやうとは露思はぬこと丶愈々絶言の眞味を發揮する。

五。權あり實あり放あり收あり殺活擒縱。　五千餘卷の經文、八萬四千の法門、權實悉く此の中に攝盡して餘すところも

ないと嘆稱する。

六。頭を刺して膠盆に入る。　あつたら頭も膠盆の中へつき込んではニッチもサッチも動きが取れまいぞと云ふ。

七。喚んで雨滴聲となさずんば喚んで什麼の聲とか作さん。　諸人能く參究し看よとは云ふ。

八。山僧幾たびか曾つて爾に問ひ來る。　山僧が幾度か其方たちに問ひ試みたは全くこゝのことであると會下の諸人に向つて云ふ。

九。這の漆桶我に無孔の鐵鎚を還へし來れ。　漆桶は黑塗りの桶のことであるから目も鼻も分らない坊主共と云ふ罵り言葉に用ゐたものである。このデクボウ奴。到底此の公案には爾等は手をつくることが出來まいによりて、此方に渡せと云ふたところである。

一〇。雨頭坐斷。會も亦雨滴聲、不會も亦雨滴聲。會不會共に錯ぞと兩頭共に坐斷して除ける。

一一。兩處不分。　ドッチへも分けて見ることはならぬと云ふ。

一二。這の雨邊にあらず元來彼の雨滴聲は會の不會のと兩邊にかたよるべきものではないのである。

一三。頭上頭下。　耳に雨聲計りでは無い。頭上頭下。眼には雨色、鼻には雨香、舌には雨味、身には雨觸と意識も心魂も皆悉く雨霧で雨の外には宇宙もなく森々羅々の萬象もないと云ふ。

一四。若し喚んで雨聲となさば則ち瞎。喚んで雨聲となさずんば喚で什麼の聲とか作さん。　諸人必ず丸呑みにしてとびまわるなと云ふ。

一五。這裏に到つて須らく是れ脚實地を踏んで始めて得べし。　口先き目先きのことではいかぬ。手を用ひ足を使つて實地に踏んで來なければならぬと實參實究をすゝめる。

【講義】　虛堂雨滴聲。虛堂と云ふは人の居らぬ空虛な殿堂で、內はシンと寂莫なことであるが、其の上又外には雨滴聲とジト〳〵と雨のふる音がする。此の音は誰一人聞いて居るものはなけれども、雨は容赦なくドン〳〵と降つて居る。此の間には迷もなければ悟りもない。己れに迷ふの、物を逐ふのと云ふこともない。全く佛見法見の沙汰を絕して只湛然寂靜。聞こゆるは雨滴の點々たる音のみである。作者酬對し難し。禪師が門外什麼の聲ぞと云ふから雨滴聲と實頭に答ふれば、己れに迷ふて物を逐ふたと、叱られる。さればとて雨滴聲を雨滴聲でないと云へば現成公案に背くことになる。ハテサテ何と答へたものであらう。何と酬對したものであらうと言語道斷心行處滅のところを示す。若し曾つて流を入すと謂はゞ。之れは首楞嚴經の中に、爾の時に觀世音菩薩は卽ち座より起ちて佛足を頂禮して佛に對して言く、世尊我れ昔無數恒河沙劫を憶念するにその時に佛ましまして世に出現し玉ふ。觀世音と名づく。我れ彼の佛に於いて菩提心を發す、彼の佛我れに敎へて聞思修より三摩地に入らしむ。初め聞の中に於いて流を入し所を亡し、所入既に寂にして動靜の二相了然として生せず。とあつて卽ち觀世音菩薩が耳根圓通と申して、耳に聲を聞くと云ふことから得脫せられたと云ふことを說いて、引き繼ぎて前記の文が說いてある。流は耳で種々の聲を聞いて心に思慮分別することで、所は其の耳に感ずる聲のことである。そこで流を入して所を亡すと云ふは、如何樣なる音聲を聞いても、其れを聞いて思慮分別をする心性へ引きもどして、其の音聲に引き出されない樣にしたならば、如何なる音聲がどの樣に攻めよせて來たからとて少しも其れに亂さるゝことのなくなることを申したものである。然しこれは流と所、

卽ち心性と音聲とを對立して居るので、所謂る能所對立で己れと物と脫體現成することが出來ぬ。次の句に依然として還つて不會と云ふはそのことである。會不會、之れは雪竇が更に一轉して謠ひ出された處で、諸人會か不會か。會するの會せぬのと云ふ沙汰は無いぞと云ふ。南山北山轉た霧霈。霧霈は大雨の貌であるから、イヤもう何處も彼處も車軸をくつがへす樣な大雨で御座ると云ふたものである。

第七節　頌評唱和譯

虛堂の雨滴聲、作者酬對し難し。若し喚んで雨聲となさずんば則ち是れ己に迷ふて物を逐ふ。喚んで雨聲となさずんば又如何んか物を轉ぜん。這裏に到ては任ひ是れ作者も也た酬對し難し。所以に古人道く、見師と齊しうして師に半德を減ず。見師に過ぎて方に傳授するに堪へたりと。又南院道く棒下の無生忍は機に臨んで師に讓らずと。若し曾つて流を入すと謂はゞ、依然として還つて不會。敎中に道く、初め聞中に於いて流を入して所を忘ず。所入旣に寂なれば、動靜の二相了然として生せずと。若し是れ雨滴聲と道はゞ也た不是。若し是れ雨滴聲に非ずと道はゞ也た不是。前頭に頌す、兩喝と三喝と作者機變を知ると。正に此頌に類す、若し是れ聲色の流を入すと道はゞ也た不是。若し喚んで聲色と作さば依然として他の意を會せず。譬へば指を以て月を指すが如し、月は是れ指にあらず。會と不會と、南山北山轉た霧霈なり。

【字解】一。古人道く。古人は馬祖大師を指したもので、大師は卽ち南岳懷讓の法嗣である。二。敎中に道く。敎は首楞嚴經第六卷の文で、本文は講義の處で引いた通りである。長水の疏文には、入流とは猶ほ返流のごとし。初め聞性を觀して照を返し、性を離れて前塵に隨つて流轉起滅せず。故に入流亡所と云ふ。所緣の聲相隨へざるに由るが故に、寂然として起らず。起は卽ち是れ動、旣に動相を亡す、靜も亦生ぜず。動靜の境は是れ耳の取る所なるを以て、今無性にして本より所有なく曠寬して得難きことを觀ず、故に了然不生と云ふ。卽ち所取無相なりと釋してある。三。兩喝と三喝と作者機變を知ると。第十則の頌にあつた通りであるから。見合せるがよろしい。四。譬へば指を以て月をさすが如く。首楞嚴經の第二卷に人の手指を以て月を人に示すが如し。彼の人指に因つて當に月を看るべし。若し復指を觀て以て月の體と爲さば、此の人豈に唯月輪を亡失するのみに非ず。亦其の指を亡す。何を以ての故に、所標の指を以て明月となす故なりと云ふ文がある。之の語を取つたものである。

第四十七則　雲門六不收

第一節　垂示

垂示云。天何言哉。四時行焉。地何言哉。萬物生焉。向四時行處可以見體。於萬物生處可以見用。且道向什麼處見得衲僧。離却言語動用。行住坐臥。併却咽喉唇吻。還辨得麼。

【讀方】　垂示に云く、天何をか言ん哉、四時行はる。地何をか言ふや萬物生ず。四時の行はるゝ處に向つて以て體を見るべし。萬物の生ずる處に於いて以て其の用を見るべし。且らく道へ什麼の處に向てか衲僧を見得せん。言語動用行住坐臥を離脱し、咽喉唇吻を併却して、還つて辨得すや。

【講義】　天何をか言ふや四時行はる。これは論語の陽貨の篇に、孔子が天何をか言ふや四時行れ萬物生ると申されたと云ふことが出であるが、それを借りて來て、宇宙の本體本性の妙體妙用は言句論議を超絶して居るものであると云ふことを示されたものである。四時は申す迄もなく春夏秋冬で、此の春夏秋冬の四時は、誰れが命令するでもなく、誰が監督するでもなけれども、春になれば花がさき鳥は謠ひ。秋になれば實を結び萬木悉く紅葉する。地何をか言ふや萬物生ず、誰あり

て命令するでもなく監督するでもなく、又命令せられることもなく監督せられることもなけれども、然も山川、草木、人畜、土石夫れ夫れ其の分を得て迷とも言はず悟とも言はず、權利とも言はず義務とも云はず、安穩無事に生々存々を遂げて居る。四時の行はるゝ處に向つて以て體を見るべし。それで吾々御互は此の四時の循環運行を見て以て平等一相の本體本性は抑も如何やうなるものであるかを合點しなければならぬ。萬物の生ずる處に於いて以て其の用を見るべし。柳は自ら綠、花は自ら紅と、柳も花も各々適當の相を備へ、火は熱し風は動き、水は濕ひ、地は堅固と地水火風に各々其の妙用を具して居ることであるが吾々お互ひは之れに依りて以て天地微妙の妙用を知らなければならぬ。且らく道へ什麼の處に向つてか衲僧を見得せん。さて宇宙萬象の本體妙用はそれに依つて會得が出來るであらうか、其の天地の間に於て萬物の靈長と自ら稱し、人間標と樣の字をつけて此の畜生め、此のデグボウめと他を稱して居る人類の中に於て、唯我獨尊と稱し、太尊貴生と稱する最尊最貴なる衲僧は如何なるものであらうぞ。言語動用行住坐臥を離脫し、天の何ものをも言はず。咽喉唇吻を併却して。地の何ものをも言はざるが如くにして、而も四時之れによりて運行し、萬物之れによりて生長繁茂するが如くに還つて辨得すやと本則を喚び出して雲門の作用を見物させる。

第二節　本則

舉僧問二雲門一。如何是法身。多少人疑著。千聖跳不出。漏逗不少。門云。六不收。斬釘截鐵。八角磨盤空裏走。靈龜曳尾。朕兆未分時。薦得已是第二頭。朕兆已生後。薦得又落第三首。若更向言語上辨得。且喜沒交涉。

【讀方】舉す僧雲門に問ふ、如何なるか是れ法身。多少の人疑著す。千聖も跳不出。漏逗少なからず。門云く六不收。斬釘截鐵。八角の磨盤空裏に走る。靈龜尾を曳く。朕兆未分の時薦得するも已に是れ第二頭。朕兆已に生じて後薦得せば又第三首に落つ。若し更に言語上に向つて辨得せば且喜すらくは沒交渉。

【字解】一。雲門。　韶州雲門山の文偃禪師のことは、前の第六則及び第十四則にも出たから開いて見るがよい。

二。法身。　法報應の三身と云ふ中の法身で、法とは眞如法性の理體、其の眞如法性の理體と冥合一致した佛が卽ち法身で、無色無形の理佛のことである。

三。多少の人疑著す。　此の僧に限らず誰れでも疑ふて居ることである。

四。千聖も跳不出。　尤もな問ひである。千佛爲祖も此れ以外に跳出することは出來まい。

五。漏逗少なからず。　然し既に陳腐極まる。どうせ蔓足なものにはなるまいと云ふ。

六。六不收。　六は眼耳鼻舌身意の六根だとか、天地六合の六だとかと色々に言ふことであるが、ツマリそれが雲門大師の答話の特色でありて、第十四則の對一說。第十五則の倒一說、或は第二十七則の體露金風など、何れも煮てもつけても齒にかゝらぬ鐵橛子でありて、手も足も出たものでない。諸人何の數で合はうぞ。チト座つて調べて見よとは云ふ。

七。斬釘截鐵。　鐵をネジちぎつた樣な氣味好い答話でその鋭利さ加減はすさまじいものである。

八。八角の磨盤空裏に走る。　磨盤は石臼の臺のことである。八角の石臼の臺が虚空を飛んで行くと云ふは何と云ふことであらう。何とも角とも意味のつけて見やうがないと云ふ。

九。靈龜尾を曳く。　六不收でも七不收でもソラ足迹が見へた。必ず跡に就いて尋覓するなよ。

一〇。朕兆未分の時覩得するも已に是れ第二頭。　それ以下の著語は三則とも。一本には全く削つてあるが予が所藏の五山版碧巖集には三則とも載つて居る。應永三十一年になくなられた不二道人岐陽方秀の碧巖不二鈔には、不二曰福本無二此著語一亦此三十七字見二評中一恐衍と申して居られるが、成る程評唱の中に見へてあるから、是れは評唱の攙入と見て削つた方が宜しからうと思ふ。

第三節　本則提唱

僧問二雲門一如何是法身。下語云。天上天下。

法身は本分なり。天上にも天下にも本分が滿ちてあると云ふに此の下語をつけたぞ。先師下語に句裏呈レ機。金以レ火試。

門云六不收。下語云。萬里一條鐵。

六不收は五體六根を指して云ふたぞ。不收とは色相の上を截斷して不收と云ふた方もあり。又本分を指して不收と云ふた方もあり。六不收こそ法身よと云ふ義なり。六と云ふは六根色相を云ふ。不收とは本分を云ふ。色相の本分に歸る處は截斷ぞ。又法身と問ふたところに、前には天上天下唯我獨尊と云ふ句を用ふれども、下語をせぬこととあるぞ。先師下語に白雲片々嶺頭飛。尺長寸短。一說に六不收は龜の首尾手足合せて六つあり。是をかくさんとすれども、かくされぬ處本分なり。此の如く見る時は一个鐵橛子なり。それなれば萬里の二字はいらぬぞ、一條鐵ばかりを用にたつるなり。是れは非說なり。前の說可なり。

第四節　本則評唱和譯

雲門道く六不收。直ちに是れ構り難し。若し朕兆未分の時に向つて構得するも已に是れ第二頭、若し朕兆已生の後に向つて薦得せば又第三首に落つ。若し言句上に向つて辨明せば、卒ひに模索不着ならん。且らく畢竟何を以てか法身となさん。若し是れ作家底ならば聊か擧着するを聞いて剔起して便ち行ん。苟し或は佇思停機せば伏して處分を聽け。太原の孚上座は本講師なり。一日座に登つて講する次でに法身を說いて云く。竪に三際を究めて横に十方に亘ると。一禪客あり座下に在つて之れを聞いて失笑す。孚座を下りて云く、某甲適ま來る甚の短處かある願くは禪者爲めに說け看ん。禪者云く、座主は只法身の量邊の事を講得して法身を見す。孚云く、畢竟如何かしてか卽ち是なる。禪者云く、暫らく講を罷めて靜室の中に於いて座すべし自ら見ることを得んと。孚其の言の如くにす。一夜靜座す、忽ち五更の鐘を打つを聞いて忽然として大悟す。遂に

禪者の門を敲いて云く、我れ會せり。禪者云く、爾試みに道へ看ん。孚云く、我れ今日より去つて更に父母所生の鼻孔を將つて扭捏せずと。又敎中に道く、佛の眞法身は猶し虛空の如く、物に應じて形を現すことは火中の月の如しと。又僧夾山に問ふ。如何なるか是れ法身、山云く、法身は無相、如何なるか是れ法眼。山云く法眼瑕なし。雲門云く六不收と。此の公案有る者は道ふ只是れ六根六塵六識、此の六は皆法身より生ず。六根他を收め得ずと。若し恁麼に情解せば、且喜すらくは沒交涉。更に雲門を帶累す。見んと要せば卽ち見よ。爾が穿鑿の處なし。見ずや敎中に道く、是の法は思量分別の能く解する所に非ずと。他の答話多く人の情解を惹く。所以に一句中に須らく三句を具すべし。更に儞が問頭に辜負せず。時に應じ節に應ず。一言一句、一點一畫、妨げず出身の處あることを。所以に道ふ一句透れば千句萬句一時に透ると。且らく道へ是れ法身か是れ祖師か。儞に放す三十棒。雪竇の頌に云く。

【字解】一。朕兆未分の時に向つて構得するも已に是れ第二頭。朕も兆も物のハツメキザシで未だ形に顯はれざるところである。其の物のハツメキザシも分らぬ最根源の處にいたり父母未生已前にさかのぼることが出來ても早や第二頭第三頭で、卽ち頭や首を二重三重にかされた樣なもので、所詮何の役にもたつものでないのである。

二。太原の孚上座。　雪峰義存禪師の法を嗣いだ人である。一代出世せずに專ら諸方を偏歷して一意修養につとめられた。上座は嘗つては敎相を研究した人で所謂學者でありたがある時涅槃經の法身の義を講ぜられたことがある。そのことは評唱の文でよく分るが此の時の態度は實に立派なもので上座が如何に修養に熱心であつたかゞわかる。これは大びに修養に志すもの〻手本とすべきことであらうと思ふ。

三。敎中に道く佛の眞法身は。　これは金光明經の四天王品に佛眞法身猶如虛空應物現形如水中月無有隱礙とある文である。

四。父母所生の鼻孔を將つて扭捏せられず。　釋迦にも達磨にも捏ちられぬことを會したと云ふ。

五。僧夾山に問ふ。　夾山は靑源下四世の法孫、澧州夾山の善會禪師で船子德誠禪師の法を嗣いだ人である。唐の中和元年十一月壽七十七歲を以て入寂せられた。

六。敎中に道く。　これは法華方便品の文で、我以無數方便種々因緣譬喩言詞演說諸法是法非思量分別之所能解唯有諸佛乃能知之と云ふ文である。

第五節　頌

一二三四五六　周而復始。滴水滴凍。費許多工夫作什麼。碧眼胡僧數不足　三生六十劫。達磨何曾夢見。闍黎爲什麼知而故犯。

少林漫道付神光　一人傳虛萬人傳實。卷衣又說歸天竺　嫌殺一船人。天竺茫茫無處尋　在什麼處。始是太平。如今在什麼處。夜來却對乳峰宿　刺破儞眼睛。也是無風起浪。且道是法身是佛身。放儞三十棒。

【字解】一二三四五六　周て復た始る。滴水滴凍。許多の工夫を費やして什麼をかなさん。碧眼の胡僧も數へ足らず　三生六十劫。達磨何ぞ曾つて夢にも見ん。闍黎什麼として知て故らに犯す。少林漫に道ふ神光に付すと。一人虛を傳ふれば萬人實を傳ふ。從頭來已に錯り了れり。衣を卷て又說く天竺に歸ると。一船の人を嫌殺す。懸懸少なからず。天竺茫々として尋ぬるに處なし。什麼の處にか在る。始めて是れ太平。如今什麼の處にか在る。夜來

却つて乳峰に對して宿す。　爾が眼睛を刺殺す。也た是れ風なきに浪を起す。且らく道へ是れ法身か是れ佛身か。爾に放す三十棒。

【字解】一。周て復た始る。　七八九十一二三四五六と繰り返へし繰りかへし無始劫來未來永劫果てしがない。それが法身の當體である。

二。滴水滴凍。　これは嚴寒の折チョン〳〵と滴る水が一滴一滴と直に凍ほつて其の間に髮を容るゝの隙間もないことを申したものである。

三。許多の工夫を費して什麼をかなさん。何も工夫穿鑿を要せぬ處。畢竟言語道斷心行處滅であるから、算盤はじかぬ先きに辨得せよと云ふので結局數量に落ちぬことを六不收だの一二三四だのと數へることを抑へたものである。

四。三生六十劫。　若し算へやうとしたならば、生れかはり死にかはつて永劫未來數へつゞけたところで到底數へつくせるものでないと云ふ。

五。逢磨何ぞ曾つて夢にも見ん。　逢磨宗祖は元よりそのやうな鈍な算用をせられそうな筈はないに、爰で逢磨大師を引き出して來ては定めし逢磨が泣かれるであらうと云ふ。

六。闍黎什麼としてか知つて故らに犯す。　碧眼の胡僧も數へ足らずと云ふことを知つて居りながら、何の爲めに一二三四五六と數へたのであるか、此の横着者奴と云ふ。

七。一人虛を傳ふれば萬人實を傳ふ。一犬虛を吠へ萬犬實を傳ふと申すことがあるが、何人かゞ神光は髓を得たなと云ふものだから、途に衣鉢を爭ふやうな錯りを生ずるに至つたのである。

八。從頭來已に錯り了せり。　乍然今に始めた錯では無い。本來最初から錯をもつて錯についたのである。

九。一船の人を驚殺す。　天竺へ歸つたなど〻由もないことを申されては。さぞかし乘合の人一同が迷惑することであらうと云ふ。

一〇。懺悔少なからず。　懺悔は度々出た通り恥辱と云ふほどのことである。懺悔茲に翻して羞恥と云ふとあるから梵語で

あると見へる。逢磨が天竺へ歸つたのなどと申されては誠に大恥辱であると云ふ。これが殺阿羅漢の大罪であらう。

一一。什麼の處にか在る。　然らば逢磨大師はどこに居られるであらう。諸人尋れて見よと見まわす。

一二。始めて是れ太平。　イヤ逢磨の行方が知れいでこそ幸いである。それで始めて安眠が出來るであらうと云ふ。これは佛の祖のと名けられる者が外にあるやうに思ふて居る連中を抑へたものである。

一三。如今什麼の處にかある。　卽今どこに居られるであらう。若しや諸人の鼻孔裡に壹寨でもして居られはせぬかな。ッかりと目玉を換へらるゝなよと云ふ。

一四。爾が眼睛を刺殺す。　それ逢磨大師の御出現であるから。誤つてつまづくなよと注意する。

一五。也た是れ風なきに波を起す。　雪竇和尙はいらぬおせつかいをせられたるものであるから自他共に迷惑を致すと云ふ。

一六。且らく道へ是れ法身か是れ化身か。　雪竇が振りまはして居られる逢磨と云ふ品物は、これが謂ゆる法身と云ふものであらうか。又しは化身と云ふものであらうか。諸人密細に此の土人形を檢分せよと云ふ。

一七。爾に放す三十棒。　少しでも迂論な奴は決して許さぬから、諸人必ず參究を倦るなと云ふ。

【講義】一二三四五六。これは雪竇和尙が何を數へ出したのであらう。雲門和尙は法身を六不收と答へられたが雪竇はそれを一二三四五六と答へられたのであらうか。山僧はいろはにほへととと數へるつもりであるか、諸人は天地玄黃とでも宇宙洪荒とでも數へたら宜しからう。然し諸人祖師門下の算盤を以て合せてごらうじ。一にも收まらず、二にも收まらず。三四五六百千萬億永來永劫數へつゞけに數へて見ても、更らに勘定の合ぬ算用である。之れが卽ち餘りありて足らぬ數と云ふものであらう。ナニ諸人は二一天作の五とな。八算顯一の算用抔と、舊弊ものゝ山僧にはトテ

モ分りそうにもないと云ふ。碧眼の胡僧數へ足らず、イヤ合はぬも道りお祖師樣の達磨大師がはちかれても合はぬものをと申して、一二三四五六。如何な達磨大師もこれ計りは一箇半箇不可加減であると感心する。少林謾に道ふ神光に付す。抑も這箇の事は謂ゆる千聖不傳でありて、卽ち思慮分別の能く解する處にあらざるものであるに。それを何ぞと多くの人は達磨大師は少林山に在つて法を門弟の神光に附屬せられたなどゝ申すが、これは以ての外の錯りである。それであるから古人も一人虛を傳へば萬人實を傳ふと申されたので結局何の角のと衣鉢を爭ふやうな醜體が出來て來たのである。衣を卷て又說く天竺に歸る。達磨が神光に法を付してから死して熊耳山に葬つたと思ふたに、其の實は天竺へ歸つたのである。其の証據には魏の宋雲が西域に使して歸る時に葱嶺の中で達磨が隻履を携へて翩々として歸るを見、達磨亦宋雲に答へて西天に去ると云つたと云ふではないかと說を立てるものがあるが、これは何として大錯りぞ。一體達磨が支那に來たと思ふのが誤りである、達磨東土に來らず二祖西天に往かずと云ふではないか。眞實の達磨は東土にも來らず、西天にも歸らず、人人自己の面門を調べて見よ。ソレ古往今來儼が鼻孔裡に面壁兀座して居られるであらうと云ふ。天竺茫々尋ぬるに處なし。達磨が天竺へ歸られたと思ふて、朝から晩まで金の草鞋をはいて五天竺十六大國を山の奥から谷の底まで尋ね廻つて見たところで盡未來際到底達磨大師に相見することは出來まい。夜來却つて乳峰に對して宿す。然し天竺で大師を見當らぬのも道理で。達磨は昨夜吾が雪竇山へ尋ねて來られて、別峰なる乳峰で宿つて居られるものと云ふ。何も雪竇山と限つたことでない。山僧が此の正覺山裡では朝な朝に達磨と共に起き夕な夕に達磨をいだいて寢るのである。定めて皆さんもそうであらうと思ふが此の方が卽ち吾が佛心宗の開祖であるから魔者扱ひに鼻糞同樣の取扱ひを決してしなさるなよ。

第六節　頌評唱和譯

雪竇よく縫罅なきの處に於いて、眼目を出し頌出して人をして見せしむ。雲門云く六不收と。雪竇什麼としてか却つて道ふ一二三四五六と。直に是れ碧眼の胡僧も數へ足らず。所以に道ふ、只老胡の知を許して老胡の會を許さずと。須らく是れ他の屋裏の兒孫に還して始めて得べし。適來道ふ、一言一句時に應じ節に應ずと。若し透得し去らば方に言句の中に在らずと道ふことを知らん。其れ或は未だ然らずば、免れず情解をなすことを。五祖老師道く、釋迦牟尼佛も、下賤の客作兒、庭前の柏樹子は一二三四五と。若し雲門の言句下に向つて諦當に見得せば、相次に這の境界に到らん。少林謾に道ふ神光に付すと。二祖初め神光と名づく。後來に至るに及んで又道ふ天竺に歸ると。達磨熊耳山の下に葬る。時に宋雲使を奉じて西より歸る。西嶺に在りて達磨の隻履を携へて西天に歸り去るを見る。使ひ回りて聖に奏す。墳を開くるに惟だ一隻履を遺下するを見

るのみ。雪竇道く、其の實は此の事作麼生が分付せん。既に分付なし、衣を卷いて又說く天竺に歸ると。且らく道へ什麼としてか此土に却りて二三有りて遽に相恁麼に傳へ來る。這裏妨げず諸說なることを。也た須らく是れ構得して始めて入作するに可なるべし。天竺茫々として尋ぬるに處なし。夜來却つて乳峰に對して宿す。且らく道へ卽今什麼の處にか在る。師便ち打ちて云く瞎。

【字解】一。繼嗣なきの處。　メイメスキマのなき處。

二。他の屋裡の兒孫。　雪竇老人でなければと云ふ。

三。釋迦牟尼佛も下賤の客作兒。　佛よ世尊よと仰ぐ釋迦佛も實は下賤な日傭取りに過ぎないと云ふのである。山僧は圜悟が逢磨に按摩取りさせるところを見たやうな覺えがある。

四。逢磨熊耳山に葬る。　傳燈錄には、逢磨は後魏の孝明帝の大和十九年丙辰の歲十月五日遷化せられて其の年の十二月二十八日熊耳山に葬り塔を定林寺に建てたと見へて居る。

五。宋雲奉使四歸。　宋雲が西域から歸つたのは傳燈錄には逢磨の滅後三年としてある。同りて聖に奏すと云ふ聖は北魏の孝莊帝を指したものである。塡を開くと云ふに就いて、古來から王が開いたとか弟子が開いとか云ふ議論があるが。そんなことはどうでも宜しい、何れは野狐につまゝれたもの、詮議に過ぎない。

六。此事作麼生か分付せん。　本來やりとりのなきものであるから只冷暖自知するより外はない。

七。且らく道へ卽今什麼の處にか在る。　圜悟の處では、卽今どこに居られるか、面門の鼻孔か、拄杖頭上か、將又拂子上かと云ひもあへず。

八。師便ち打して云く瞎。　ピツシヤリ打つて瞎、目瞎れとも見へないぞよ、人人自己の鼻孔を摑ちらるゝなよと云ふ。

第四十八則　招慶煎茶

第一節　本則

舉王太傅入招慶煎茶。作家相聚。須有奇特。等閑無事。大家著一隻眼。慾禍來也。時朗上座與明招一把銚。一火弄泥團漢。不會煎茶帶累別人。朗翻却茶銚。事生也。果然。太傅見問上座。茶爐下是什麼。果禍事。朗云。捧爐神。果然中他箭了。也。不妨奇特。太傅云。既是捧爐神。爲什麼翻却茶銚。何不與他本分草料。事生也。朗云。仕官千日。失在一朝。錯指注。是什麼語話。杜撰禪和如麻似粟。太傅拂袖便出。灼然作家。許他具一隻眼。明招云。朗上座喫却招慶飯了。却去江外打野狸。更與三十棒。這獨眼龍只具一隻眼。也須是明眼人點破始得。朗云。和尙作麼生。拶着。也好與一拶。終不招云。非人得其便。果然只具一隻眼。道得半。一手搥一手搦。雪竇云。當時但踏倒茶爐。爭奈賊過後張弓。雖然如是也未稱德。山門下客。一等是潑耶潑輒就中奇特。

【講方】舉す。王太傅招慶に入つて煎茶す。　作家相聚る。須らく奇特あるべし。等閑に無事ならんや。大家一隻眼を著く。禍を惹き來れり。時に朗上座は明招のために銚を把る。一火泥團を弄する漢。煎茶を會せず別人を帶累す。朗茶銚を翻却す。事生ぜり。果然。太傅上座に問ふ茶爐下是れ什麼ぞ。果然として禍事。朗云く捧爐神。果然として他の箭に中れり。妨げず奇特なることを。太傅云く既に是れ捧爐神ならば什麼としてか茶銚を翻却せりや。何ぞ他に本分の草料を與へざる。事生ぜり。朗云く仕官千日失一朝に在り。錯つて指注す。

是れ什麼の語話ぞ。杜撰の禪和麻の如く粟に似たり。太傅拂袖して便ち出づ。灼然として作家。他に一隻眼を具することを許す。明招云く、朗上座招慶の飯を喫却し了りて却りて江外に去つて野梨を打す。更に三十棒を與へん。這の獨眼龍も只一隻眼を具す。也た須らく是れ明眼の人點破して始めて得べし。朗云く和尚作麼生。拶着す。也た好し一拶を與ふるに。終に這般の死耶當の見解を作さゞらん。招云く、非人其便を得たり。果然として只一隻眼を具す。一半を道ひ得たり。一手は擡げ一手は搦ゆ。雪竇云く、當時但茶爐を蹈倒せん。爭奈せん賊過ぎて後の張弓。然も是の如くなりと雖も未だ德山門下の客と稱せられず。一等に是れ潑鄧潑賴中に就いて奇特なり。

【字解】一。王太傅。　姓は王氏名は延彬と甲した人で、後に三公の一たる大傅の位迄進まれたが、此の時分は泉州の知事を勤めて居たものと見へる。招慶寺の長慶慧稜禪師の室に入りて餘程修行も進んで居つた。會元七の長慶章に天祐三年泉州の刺史王延彬請して招慶に住せしむとあるから慧稜禪師が招慶寺に住せられたは、王太傅の請に依るものと見へる。

二。作家相聚ろ。　お歴々のよりあひであると云ふ。

三。須らく奇特あるべし。　お歴々のよりあひであるから何か奇特なことがあるであらうと豫期する。

四。等閑に無事ならんや。　ドウセ一騒ぎなくてはすみますまいと云ふ。

五。禍を惹き來れり。　抑も諸大老が招慶に寄り合つたが禍根であると云ふ。

六。朗上座。　後に福州報慈寺の慧朗禪師と稱せられて、長慶門下廿有六人中の名德となられたが、此時はまだ朗上座と云はれた一雲水で修行もまだ十全でないから、十分な問答商量が出來なかつたと見へる。

七。明招。　婺州明招山の德謙禪師のことで、羅山道閑の法嗣である。明招山に住すること四十餘年、嗣法の名德六人に及んだと云ふことである。

八。一火泥團を弄する漢。　五伍を火と云ひ五人を伍と云ふと申すから、火は卽ち兵隊の組織の名で二十五人一組を火と云ふのである。今は王太傅と朗上座と明招とを評して泥團を弄する碗白小僧が幾人も集まつたぞと云ふのである。

九。煎茶會せず別人と帶累す。　茶を飲むすべを知らないから別人にまで迷惑をかけるのであると罵る。評に曰く。何茶ぞ。曰く本分の茶。

一〇。銚。　銚は溫器なりで、酒や茶を溫める道具を銚と云ふ。日本では酒を溫める器を銚子と云ふが、今は土瓶か急須のことゝみへる。

一一。事生ぜり。　サア大變だ大層なことを仕出かしたと云ふ。

一二。果然。　どうせそんなことであらうと思ふたと云ふ。

一三。果然として禍事。　サア騒ぎ。大變なことになつてしまつたと云ふ。

一四。捧爐神。　古疏に爐足に鬼神捧持の狀を作す。是れを捧爐神と謂ふ。所謂る金香爐下の鐵昆崙と云ふ是れなりとありて、シカミ火鉢の足のところに鬼の樣な形のものが作つてあるが、あれが捧爐神で爐を捧げてひつくり返へさない樣に守護して居る神さまである。

一五。果然として他の箭に中れり。　それ引きつり込まれた間抜け者めと朗上座に轉身の活路のないのを笞める。

一六。妨げず奇特なることを。　然し捧爐神と答へた邊は一往奇特であると云ふので先は出かした小僧偉いと褒める。

一七。何ぞ本分の草料を與へざる。　太傅手ぬるい。一棒許さぬ處であるにと云ふ。

一八。事生ぜり。　愈々大事になつて來たぞと云ふ。

一九。錯つて指注す是れ什麼の語話ぞ。　まるで說敎坊主の婆々談義のやうであると野次る。

二〇。杜撰の禪和麻の如く粟に似たり。　杜撰と云ふに種々說があるが、通常は背杜氏の人で師傅もうけず典據にも依らずに妄りに獨斷臆說を書き散らして世に示したので、世人が都べて妄漠にして信用の出來ないものを杜氏の撰述のやうである

と云ふ故事から杜撰と云ふ語が出來たと云ふことである。禪和は禪和子とも云ふて禪僧といふことである。こんなデモ的な禪僧が世中にはうよ〳〵して居ると云ふ。

二一。灼然として作家。　サスがは長慶の門下丈けに、如何さま立派な作家であると云ふ。

二二。他に一隻眼を具することを許す。然し太傅の作略もまだ十分とは許されぬ。ホンの片目だけのことであると云ふ。

二三。野榧。　野榧は山上燒不過底の火柴頭なりと申して眷さきに野山の草木を燒いた跡の燒げ殘りの木の根のことであるこそでそれを多くの男女が取りに行つてワイ〳〵騷いで居ることを野榧を打すと申すことがあるが。今は譯もなくワイ〳〵と騷ぐといふ程の意味合である。

二四。更に三十棒を與へん。　ドシンと明上座を打ちなぐればよいにと云ふ。

二五。這の獨眼龍も只一隻眼を具す。　獨眼龍は明招德謙禪師のことで、傳に左目を失へるを以て途に獨眼龍と號するあるから、左眼失明して居られた人と見へる。左眼失明とは承り及んだが如何にも名詮自稱で片目しかみへぬと見へて誠に手ぬるいことであると云ふ。

二六。拶着。　能くも拶し得たぞとほめる。

二七。也た須らく是れ明眼の人點破して始めて得べし。　雙眼圓明の作家でなくんば、全提格外の働きはなるまいと雪竇の着語を豫言する。

二八。也た好し一拶を與ふるに。　是非そうせねばならぬ處であると云ふ。

二九。終に這般の死明當の見解を作さらん。　明當は ヨボヨボした 有樣で老齡零落した貌である。吾れ圜悟ならば其の樣な死に面さげた言ひ分はしまいものをと云ふ。

三〇。非人其の便を得たり。　維摩經に譬へば人の畏るゝ時の如し人其の便をうるにあらずと申してあるが、恐怖の時は情已に怯弱なり、故に便をうゝと申して、見べて鬼神は精神確固なる人には祟りをなし得ないけれども、人が怯ふとか怖れるとか云ふ風に總べて精神に動搖がある時は、其の隙間をねらつて色々な惡戲をするものである。今は明上座に隙間があつたから、それをつけこんで捧爐神が土瓶をひつくりかへしたのであると云ふ。

三一。果然として只一隻眼を具す。　案の條片目であると抑へる。

三二。一半を道い得たり。　漸くに半提であるから。先づ五點もあげようと云ふ。

三三。一半は擡げ一半は搦ゆ。　上ぐるやうで下るやうでドッチもつかぬ云ひ分である。

三四。爭奈せん賊過ぎて後の張弓。　由良之助遲かりし。今更致し方もない次第である。

三五。然も是の如くなりと雖も未だ德山門下の客と稱せられす。　悟なればヒッシャリと一つ太傅をお見舞申すところ。

三六。一等に是れ潑耶潑賴中に就て奇特なり。　潑は水をアバクと云ふ字であるから亂暴者のこと。賴はネダルで金錢などを强迫して出させることであるから卽ちならず者と云ふ程の意味である。今は明招も王太傅も明上座も何れ劣らぬ無賴漢であるにその中では雪竇などはマー鳥無き里の蝙蝠と云ふ調子で茶爐を蹈倒せんなどゝは比較的に上出來な方であると云ふ。

第二節　本則提唱

王大傅入ニ招慶一煎茶。下語云。魚行水濁。

句中の方から煎茶して、招慶が何とか云はれたらば一問をせうとしたぞ。

時朗上座與ニ明招一把レ銚。下語云。一鬼爭ニ漆桶一。

隨分と思ふて銚を把りたれども、朗上座の手段は鬼などの漆桶を爭ふほどのことよ。

朗翻却茶銚。下語云。招禍上身。

隨分と思ふて翻却したれども、禍を招いたぞ。先師の下語に龕心不改。心起波浪。

王太傅見問上座茶爐下是什麼。下語云。因風吹火。

先師の下語に、探竿影草。倚天長劍逼人寒。

朗云捧爐神。下語云。實頭人難得。

捧爐神は火鉢などの足に鬼神の面を鑄付たものだぞ。先師下語に鈍鳥不離籠。蹉過亦不知。

太傅云既是捧爐神爲什麼翻却茶銚。下語云。看坑築槨。

闕所を見かけてひつゝめて問ふなり。怜悧なるぞ。先師下語に俊狗咬人。痛處下針錐。

朗云仕官千日失在一朝。下語云。隨語轉。隨機儻。

先刻より茶銚を翻却し無調法の問答面目ない處は、君に千日御奉公あつても、失が只一朝に在るが如くと身を愧ぢて云ふたぞ。又。黠兒落節。之れは隨便宜と云ふ方語なり。先師下語に蹉過亦不知。

大傅拂袖便出。下語云。曲終人不見。江上數峯青。

曲とは句中ぞ、句中を收めて去りたなり。去つたところを不見と云ふなり。江上數峰青と云ふは、句中を收めた落居何の道理もなき處を云へり。先師下語に斬釘截鐵。利劍斬親面。

明招云朗上座喫却招慶飯了却去三江外打三野榧。下語云。痛處下針錐。

是れ程のことさへ得心得では、徒らに招慶の飯を費やしたものよと、痛めて云ふたぞ、打三野榧一は徒らに騷ぐことぞ。野榧は荒野の火の焚く木槨を云ふ。先師下語に痛處下針錐。獅子咬人。

朗云和尚作麼生。下語云。强惺々。

何も知らずして知つた顏をするを云ふぞ。又醉ふて醉はざるふりをするを强惺々と云ふぞ。先師下語に、迷己逐物。韓獹逐塊。

招云非人得其便。僧徑過。

何にも得知らずして和尚作麼生と云ふたところを、前の捧爐神のことを云ふやうにして、朗上座を罵つて非人と云ふたは、人でもくいでもない奴ぢやと云ふ心ぞ。先師下語に上無攀仰。下絕己躬。斬釘截鐵。

雪竇云當時但蹈倒茶爐。下語曰。傍人有眼。

前に是什麼と云ふた處で蹈倒茶爐したらば機のある僧と云ふものなり。捧爐神と云ふ處で盲になつたぞ。雪竇朗上座を批判して好く云ふたほどに此の下語をつけるぞ。先師下語に利劍斬親面。正令當行。

第三節　本則提唱和譯

佛性の義を知んと欲せば、當に時節因緣を觀すべし。王太傅泉州に知たり、久しく招慶に參す。一日因みに寺に入る。時に朗上座煎茶の次で茶銚を翻却す。太傅也た是れ箇の作家。纔に他の茶銚を翻却するを見て、便ち上座に問ふ。茶爐の下是れ什麼ぞ。朗云く捧爐神。妨げず言中に響あることを。爭奈せん首尾相違して宗旨を失却し鋒を傷り手を犯すことを。惟だ自己に辜負するのみにあらず、亦且つ他人に觸忤す。這箇是れ得失なき底の事なりと雖も、若し拈起し來らば、舊に依つて親疎あり、黑白あり。若し此の事を論ぜば言句上に在らず。却つて言句上に向つて箇の活處を辨ぜんことを要す。所以に道ふ他活句に參じて死句に參せざれど。朗上座の恁麼に道ふに據らば狂獵の塊を逐ふが如し。大傅拂袖して便ち去る。他を背はざるに似たり。明招云く、朗上座招慶の飯を喫却し了りて、却つて江外に去つて野狸を打すと。野狸は卽ち是れ荒野の中火の燒く底の木橛之れを野狸と謂ふ。用ひて朗上座正處に向つて行かずして却つて外邊に向つて走ることを明す。朗拶して云く、和尙又作麼生。招云く、非人其の便を得たり。明招自然に出身の處あり。亦他の所問に辜負せず。所以に道ふ俊狗人を咬むに牙を露さずと。溈山の喆和尙云く、王太傅大に相如が璧を奪つて直ちに鬚髮冠を衝くことを得るに似たり。蓋し明招忍俊不禁にして其の便に逢ひ難し。大溈若し朗上座と作らば他の太傅の拂袖して便ち行んを見て呵呵大笑せん。何が故ぞ。之れを見て取らざれば千載にも逢ひ難し。見ずや寶壽胡釘鉸に問ふて云く、久しく胡釘鉸と聞く便ち是なること莫しや否や。胡云く、是。壽云く、還つて虛空に釘ち得てんや。胡云く、請ふ師打破して將ち來れ。壽便ち打す。胡肯はず。壽云く、異日自ら多口の阿師あり。儞がために點破すること在らんと。胡後に趙州に見へて前話を擧似す。州云く儞什麼に因りてか他に打たれたる。胡云く、知らず過什麼の處にか在る。州云く、只這の一縫尙奈何ともせず更に他をして虛空を打破し來らしめんや。胡便ち休し去る。州代つて云く、且らく這の一縫に釘うて。胡是に於いて省あり。京兆の米七師行脚して歸る。老宿あり問ふて云く。月夜の斷井索人皆喚んで蛇と作す。未だ審し七師佛を見る時喚んで什麼とか作す。七師云く。若し所見あらば卽ち衆生に同ぜん。老宿云く、也た是れ千年の桃核。忠國師紫璘供奉に問ふ。聞くならく供奉思益經を解註すと是なりや否や。奉云く、是。師云く凡そ經を註するに當つては須らく佛意を解して始めて得べし。奉云く、若し意を會せんば爭でか敢へて經を註すと言ん。師遂に侍者をして一椀の水七粒の米一隻の筋を將ちて椀上に在いて供奉に送り與へしめて問ふて云く、是れ什麼の義ぞ。奉云く不會。師云く老師が意すら尙會せず更に甚の佛意をか說んと。王太傅朗上座と此の如く話會することと一ならず。雪竇末後に却つて道ふ、當時但だために茶爐を踏倒せんと。明招此れ此くの如しと

雖も終に雪竇に如かず。雪峯洞山の會下に在りて飯頭となる。一日米を淘ふ次に、山問ふ什麼をか作す。峰云く米を淘ふ。山云く米を淘つて沙を去るか米を去るか。峰云く沙米一時に去る。山云く大衆箇の什麼をか喫せん。峰便ち盆を覆却す。山云く子が因緣此に在らずと。然も恁麼なりと雖も、爭でか雪竇の當時但茶爐を踏倒せんと云ふに似ん。一等に是れ什麼の時節ぞ。他の用處に到つて自然に今に騰り古に煥いて活脱の處あり。頌に云く。

【字解】一。爭奈せん首尾相違して宗旨を失却し鋒を傷り手を犯すことを。　末に至つてボロが出たやうであるが、これは己れの秘藏の銘劔で手足を傷けたと云ふのであらうかと申して、迂かり人にも見せるなと注意ずる。

二。這箇是れ得失なしと雖も等。　這箇には得もなければ失もないけれども。互ひに拈し來ればその間に自づと淺深親疎の相違が立つ、水は方圓の具に隨ふと云ふがそれであらう。

三。潙山の喆和尚云く。　喆和尚は卽ち翠巖可眞の法嗣潭州大潙の眞如慕喆禪師であつて、語は史の列傳廿一闡相如の傳に璧を持し却立して怒髮上つて冠を衝くと云ふ文に依つて云はれたものである。

四。寶壽。胡釘鉸に問ふて云く。　鎭州寶壽沼和尚は臨濟大師の法を嗣いだ人である。胡釘鉸は唐の散人で卽ち隱者である。嘗つて保福趙州の諸大老と問答し、又寶壽和尚にも參せられたやうである。

五。這の一縫尚奈何ともせず。　知らず過什麼の處にかあると云ふそのアレメは偖何んとしたものであらう。

六。京兆の米七師、　潙山靈祐の法を嗣いだ京兆府の米禾上は又七師とも喚んだ、嘗つて禾上が潙山の處で參學し畢りて受業寺に歸へられた處が、一老宿が月中の斷井索時人喚んで蛇となす未だ審し七師佛を見て喚んで甚麼とかなすと拶しかけた。若し所見あらば卽ち衆生に同して答話をすると答へると、老宿は千年の桃核と申されたと云ふことである。千年の桃核は季を經て變ぜずと云ふ意味で褒美の語であると申してあるが然しこゝは抑下の意味で猶ほ這箇の在るありと抑へられたものである。

七。紫璘供奉。姓は范氏名は志鄰と申した人で學內外に通じ且つ甚だ美聲であつたために時の天子肅皇宗帝の內庭に入つて帝の御問に應答したので紫の方袍を賜り供奉僧にせられた。其の後代宗皇帝の永泰年中には不空三藏の譯經席に連なりて證義の職を勤められたと云ふことである。

第四節　類則提唱

其一　胡釘鉸

寶壽問二胡釘鉸一云久聞二胡釘鉸一莫三便是一否。下語云。橈鈎搭索。

姓は胡釘鉸は異名なり。釘鉸は破物をついで身をすくふものなり。かすがいかくるものなり。

胡云是。下語云。有レ問有レ答。

壽云還釘得虛空麼。下語云。衫穿露肘。

何として虛空に釘が打たれやうぞ虛空に釘うち得んやと云はれたので句中が露れた也。

胡云請師打破將來。下語云。似則似。

衲僧の言句には似たれども落居とゞかぬほどに似たりと云ふたぞ。

壽便打。下語云。正令當レ行。

胡不レ肯。下語云。可惜許。鈍鳥逆レ風飛。

壽云、異日自有多日、阿師爲儞點破在。下語云。知音更在青山外。知音知後更誰知。

多口は多い人の中にと云ふことなり。阿師は別の師が有つて儞に云つて聞かせうぞと知音して云はれたなり。

胡後見趙州舉前話。下語云。一處不通兩處失功。

州云、儞因什麼被他打。下語云。捉襟見肘。

胡云、不知過在什麼處。下語云。至不知非不足醫。

州云、只這一縫尚不奈何。更教他打破虛空來。下語云。痛處下針錐。據欺案。

一縫とは句中を云ふたぞ。教はシムとよみ亦シメユとよむ。言は句中をば得知らいで居て虛空を打破せうなんと云ふた分で理かすまふかと云ふて案に結したぞ。此時はシムの點よし。又痛めて知らしめたと云ふ時はシメンヤの點よし。落居は同意なり。

胡便休去。下語云。失利。

州代云、且釘這一縫。下語云。拳來踢報。當機觀面。

州の胡釘に代つて且らく這の一縫に釘うつと云はれたは拳來踢報すと云ふ方ぞ。又釘得虛空と寶壽の云はれた句中に當つて虛空に釘打うよりも貴方の句中を釘づけにすべきなり。僧に代つて州の我ならば如此云ふべきと觀面に云いかへたぞ。胡便休去は利を失つたほどに云ふたことなり。

胡於是有省。下語云。大遲生。

いろ〳〵に接せられて、やう〳〵爰で心得たは。悟りやうが遲いと云ふなり。

其二　米七師

京兆米七師行脚歸有老宿問云、月夜、斷井索、人皆喚作蛇、未審七師見佛時喚作什麼。下語云。挽鈎搭索。

月夜の斷井索は月夜に人のくさざる井戸のつるべ索を見て蛇となすが、汝は佛を見る時什麼となすぞと云ふたは橈鈎搭索ぞ。

七師云、若有所見、卽同衆生。下語云。不妨實頭。

根本の上に何事を見やうぞ。見ることがあらば迷の衆生と同じ者よと云ふたぞ。實頭には云ひたれども、句中を見はづいたぞ。

老宿云、也是千年桃核。下語云。痛處下針錐。

千年桃核とは役に立たぬと云ふ義ぞ。核を植ゑて千年の間生せずんば何にせうぞ。畢竟は用に立たぬなり。句中の方から云ふやうなれども、是れは直罰爲人して云ふたぞ。謗語也。千年桃核裏元是舊時仁と云ふ方語があるぞ。

其三　紫璘供奉

忠國師問紫璘供奉聞說供奉解註思益經是否。奉云是。師云凡當註經須解佛意始得。奉云若不會意爭敢言註經。師遂令侍者將一椀水七粒米一隻筋在椀上送與供奉問云是什麼義。下語云。碍人荊棘從無根長。挽鉤搭索。

賊の方から色々のことをして供奉を試みたぞ。

奉云不會。下語云。欵出囚人口。一場苦屈。

眞實知らいで不會と云ふたぞ。欵は囚人の口より出づと云ふは白狀して云ふた方なり。

師云老師意尙不會更說甚佛意。下語云。月白風淸。

佛意は甚んの道理もない處を爲人して云へり。

第五節　頌

來問若成風。箭不虛發。偶爾成文。不妨要妙。應機非善巧。弄泥團漢有什麼限。方木堪悲。獨眼龍只具一隻眼。會未呈牙爪。也無牙爪可呈。說什麼牙爪。牙爪開。爾還見麼。雪竇却較些子。生雲雷。靈大地人一時喫棒。天下僧無著身處。旱天霹靂。逆水之波經幾回。七十二棒翻成一百五十。

【讀方】　來問風を成すが若し　箭みだりに發せず。偶爾として文を成す。妨げず要妙なることを。　應機善巧に非ず　泥團を弄する漢に什麼の限りかあらん。方木を圓孔に逼ず。妨げず作家に撞着することを。　悲むに堪たり獨眼龍只一隻眼を具す。只一橛み得たり。會つて未だ牙爪を呈せず。也た牙爪の呈すべき無し。什麼の牙爪とか說かん。也た他を欺くことを得ず。牙爪開く。爾還つて見るや。雪竇却つて些子に躓れり。若し恁麼の手脚あらば火爐を踏倒せん。　雲雷を生ず　靈大地の人一時に棒を喫す。天下の衲僧身を着くるに處なし。旱天の霹靂。逆水の波幾回をか經る。七十二棒翻つて一百五十と成る。

【字解】一。箭みだりに發せず。　アツパレの好射手であるから決してむだ箭はないと云ふ。
二。偶爾として文を成す。　涅槃經に蟲の木を食むが如し偶々字を成す耳と申してある。今王大傳は別に思考を用ゆることなくして自然と云ひ出されたのであるけれども茶爐下是什麼と云ふ一句は中々の妙文佳句であると云ふ。
三。妨げず要妙なることを。　天然の善巧。いかにも立派であると稱讃する。
四。泥團を弄する漢に什麼の限りかあらん。　全く泥遊びの子供であるから何の役にも立たぬと云ふ。

五。方木を圓孔に逗す。　四角な木を丸い中に塡めた樣で少しも合ひませぬと云ふ。

六。妨げず作家に撞着す。　常陸山に宮角力で。テンデ相手にならぬと云ふ。

七。只一隻眼を具す。名詮自稱で半目半提であると云ふ。

八。只一橛を得たり。今一息と云ふ處でまた十成とは申されないと云ふ。

九。也た牙爪の呈すべきなし。　雪竇そう仰せられるにも及びますまい。元來此の一目龍には牙も爪も御座りませぬからと云ふ。

一〇。什麼の牙爪とか説かん、　一體貴公が牙爪を必要らしく云はれる理由がわからんと咎める。

一一。也た他を欺くことを得ず。　然し全く牙爪が有るまいものでもないから。そう馬鹿にしたものでもなからうと云ふ。

一二。儞還つて見るや。其の開いた爪牙を皆さんは見ましたかと座下を見まはす。

一三。雪竇却つて些子に較れり。雪竇少しは當てられた、能い手際であると稱讃する。

一四。若し恁麼の手脚あらば火爐を踏倒せん。若し十成の爪牙あらば何も雪竇の厄介にはなりませずともトウの昔に火爐を踏倒して居りますと云ふ。

一五。盡大地の人一時に棒を喫す。　雪竇が雲雷を生ずと申されるから。何人と雖もこれには驚かないわけにはゆかぬと云ふ。

一六。天下の衲僧身を着くに處なし。身の置き處も御坐らぬと托上する。

一七。旱天の霹靂。　ガラ〳〵と天地に轟いたやうであるが皆さん聞えましたかなと云ふ。

一八。七十二棒翻つて一百五十棒となる。　雪門の申された言葉に七十棒反つて一百四十と成るとあるが、今もそれと同じ意で雪竇の自讃に對して二十棒や三十棒では足らないから。七十二棒却つて其の倍の百五十棒に酬ゆる程厳しく續け打ちに打たうものをと云ふ、之れが關悟の王大傳に對する應機である。

【講義】　此の一頌は全體で七句あつてその内初めの四句は五言。次の二句は三言で結句は七言になりて居る。來問風をなすが若し。風の一字は古來オトと訓ずることになつて居る。來問は太傅が茶爐下是れ什麼ぞと問端を起したことで、其の勢ひは恰も熟練した工匠が手斧をハッシと下す時に空氣を切つてスーッと音がするやうな勢ひあると云ふ。之れが所謂る匠子運斧の巧ありと云ふ味ひである。應機善巧に非ず、然るに朗上座はこの來問に對する應答の機合が全く善巧を失して居つてマルキリつり合ひにならぬ、そこで見るに見かねて傍に在つた明招の德謙和尙が上座に代つて太傅に接せられたけれども、悲むに堪たり獨眼龍曾つて未だ牙爪を呈せず。悲しいことには切角待ちかまへた獨眼龍も牙も出さず爪も出さずに全く龍らしい働きがなかつた。そこで雪竇和尙は殘念でたまらぬものであるから、自ら牙爪開くと牙をむき爪をとぎたてゝ活龍の働きを出されたところが、一天忽ちにして黑雲を生じ雷電なりかゝやき、大雨霈然として降り來りて白浪滔天と逆水漲り怒濤ほとばしること幾回なるを知らぬと云ふ有り樣になつたと云ふので其の味ひを雲雷生ず逆水の波幾回をか經ぬると謠つて雪竇が自畫自讃をせられたものである。

第六節　頌評唱和譯

來問風をなすが若し。應機善巧に非ず、太傅の問處斤を運して風を成すに似たり。此れは莊子

に出づ。郢人壁をぬるに一小竅を餘す。遂に泥を圓めて擲ちて之れを補ふ。時に小泥ありて鼻端に落在す。傍に匠者有りて云く、公竅を補ふこと甚だ巧みなり。我れ斤を運らして爾がために鼻端の泥を取らんと。其の鼻端の泥蠅子翼の若し。匠者をして之を斲らしむ。匠者斤を運して風を成して之を斲る。其の泥を盡して鼻を傷けず。郢人立つて客を失す。所謂二たり俱に巧妙なり。朗上座其の機に應ずと雖も語に善巧なし。所以に雪竇道く、來問風を成すが若し應機善巧に非ず。悲むに堪へたり獨眼龍。曾つて未だ爪牙を呈せず。明招道ひ得て也た太だ奇特なり。爭奈んせん雲を拏ひ霧を攫む底の爪牙あらざることを。雪竇傍に肯はず。忍俊不禁にして他に代へて氣を出す。雪竇暗に去つて他の意に合へり。自ら他の茶爐を踏倒する語を頌す。牙爪開く雲雷を生ず。逆水の波幾回をか經る。雲門道く爾が逆水の波あることを望まず。但だ順水の意有らば亦得てんと。所以に道く活句下に薦得すれば永劫にも忘れずと。朗上座と明招と語句死に似たり。若し活處を見んと要せば、但雪竇の茶爐を踏倒せんと云ふを看よ。

【字解】一。此れは莊子に出づ。莊子の徐無鬼篇に莊子葬を送りて惠子の墓を過ぐ。顧みて從者に謂つて曰くとして此の下の故事が出て居る。圓悟は學究先生ではないから此の語は恐くは後人の妄添であらう。

二。逆水の波。　雲門錄に敢へて爾が逆水の波あるを望まず且つ順水の意あることも也た得難しと申してあるこれは背水の陣を張る底の丈夫は兎に角、勇猛精進の丈夫は又得難いと云ふのである。

三。朗上座と明招と語句死に似たり。　此の公案は雪竇の腦さで活きたと云ふのであるが皆さんどこが死句でどこが活句でありましよう。こゝはお互ひに密細に參究して見るべき處でありますぞ。

第四十九則　透網金鱗

第一節　垂示

垂示云。七穿八穴。攪レ鼓奪レ旗百匝千重瞻レ前顧レ後。踞二虎頭一收二虎尾一。未是作家。牛頭沒馬頭回。亦末レ爲二奇特一。且道過量底人來時如何。試舉看。

【讀方】七穿八穴して鼓を攪き旗を奪ふ。百匠千重前を瞻後を顧る。虎頭に踞て虎尾を收むるも未だ是れ作家にあらず。牛頭は沒し馬頭は回る。亦た未だ奇特となさず。且らく道へ過量底の人來るとき如何。試みに擧す看よ。

【講義】七穿八穴して鼓を攪き旗を奪ふ。彼の湊川の戰爭の時に忠臣楠公が弟正季公と七離七還して拔けつ潛りつ縱橫に敵をなやまされたが如く、戰場に於ては七穿八穴と申して攻勢を取つて敵中を拔けつ潛りつ縱橫無盡に戰ひて、遂に鼓を攪き旗を奪ふと敵の軍旗砲銃を悉く占領するに至るのであるが、サテ相手方に在りても百匝千重前を瞻後を顧るで砲臺を築き殘濠を掘り鐵條網を張り逆茂木を設けて百匠千重の要害堅固の上に、四方八方に哨兵を派して蟻一疋も通さじと飽く迄も注意の上に注意をして居る。然して其の戰鬪の策略に至りては、虎頭虎尾一時に收むと云ふ底の方針でありて敵をみなごろしにせずんば措かずと企てつゝあるのであるが、今我が師學

法戰場中の作用に見るに、其の主客應對の機鋒相讓らざる處は恰も兩軍對戰の如きものであり て、よし只に虎頭に騎るのみにあらず亦虎尾を把ふることを解す底の策略を有して居ても、未だ是れ作家に非ず、また〳〵十全の禪僧とは許されぬ。然して其の機合が牛頭は沒し馬頭は回ると如何にも敏捷迅速でありて擊石火の如く閃電光の如くであつても、亦た未だ奇特となさずで。捨二分とは申されない。然らば如何やうなる人を喚んで作家となし、又如何やうなる作略を以て奇特とするかと云ふに、且らく道へ過量底の人來る時如何、分量をのりこへても早や作家とも奇特と名くべからざる人が來た時には何としたものであらうぞ。試みに擧す見よ。三聖の慧然禪師の如き人があるから諸人能く禪師にあやかりて見よと本則を提出する。

第二節　本則

擧三聖問二雪峰一。透レ網金鱗。未審以レ何爲レ食。不妨縱橫自在。此問太高生。爾合只自知何必更問。峰云。待二汝出レ網來一。向レ汝道。滅人多少聲價。作家宗師天然自在。聖云。一千五百人善知識。話頭也不レ識。雷迅霹靂可煞驚聾。一任跨跳。峰云。老僧住持事繁。不在勝負。放過一着。此語最毒。

【讀方】　擧す三聖雪峰に問ふ網を透る金鱗未だいぶかし何を以てか食と爲さん。妨げず縱橫自在なることを。此問太だ高生。爾只自知すべし何ぞ必ずしも更に問はん。峰云く汝が網を出で來らんを待て汝に向て道はん。人の多少の聲價を滅ず。作家の宗師天然自在。聖云く一千五百人の善知識話頭だも也た知らず迅雷霹靂。はなはだ群を驚かす。跨跳するに一任す。峰云く老僧住持の事繁し　勝負に在らず。一着を放過ず。此語最も毒なり。

【字解】　一。三聖。鎮州三聖院の慧然禪師は臨濟大師の嫡嗣である。臨濟大師が唐の咸通七年丙戌四月十日、將に入寂せられんとする末後の上堂に、門下の諸子に向ひ吾が滅後に於て吾が正法眼藏を滅することを得ざれと言はれた。其の時三聖禪師が進み出でゝ、爭でか敢へて和尚の正法眼藏を滅却することを得んやと言へば。大師は若し人ありて爾に問はゞ他に向つて什麼とか道んと甲されたところが、三聖便ち喝すで禪師は大喝一聲カーツと怒鳴つた。大師は之れで安心ぜられたものと見へて、誰か知らん吾が正法眼藏の瞎驢邊に向つて滅却せんことなと印可して頌を說いて座遷ぜられた。有名な臨濟錄は卽ち師が集められたものである。臨濟の滅後禪師は諸方の名德を訪れて勘驗してあるいて、仰山、香嚴、德山、雪峯、寶壽等の當代の諸大德を悉く訪問せられた、此の雪峯との問答も恐らく其の頃のことであらう。

二。網を透る金鱗。　網を透りぬけて最早一切の束縛を離れて自由自在に悠々自適と思ふが儘に餌をあさり、欲するが儘におよぎまはる金鱗と云ふのである。金鱗は金魚とか緋鯉のことであらう。

三。妨げず縱橫自在なることを。　已に網の外へ出てしまつた魚であるから自由自在なわけである。爰が歸家穩座太平無事の身の上で三聖禪師の眞の境界であらう。

四。此の問太だ高生、　三聖禪師の此の問ひは如何にも向上高尙な問ひであると讃嘆する。

五。何ぞ更に問ふこと必とせん。　己れの食ひ物を慾々人に問ふにも及ぶまい。又問ふた處でわかるものでないから只自分自身に自知するより外はなからうと云ふ。

六。人の多少の聲價を滅ず。　これでは三聖が全く敎網の中に滯ふつて居るやうに聞へるから彼れの名譽にも關係することであらうと云ふ。

七。作家の宗師天然自在。　雪峰はさすがに作家の宗匠であるから天然自在なものであると稱讃する。

八。一千五百人の善知識。　雪峯語錄の序（王隨の撰にかゝる）に、南に歸りて名岩に居して妙法輪を轉じて宗教を聞くもの四十年、清衆を聚むること常に千五百人を下らずと見へて居るこれで雪峯の會下が如何にも盛であつたことが伺はれると思ふ。

九。迅雷霹靂はなはだ衆を驚す。　一千五百人の善知識を逆鱗した處は、迅雷霹靂で何ともするどい機鋒であると云ふ。

一〇。跨跳するに一任す。　これは三聖が云ひたいやうに云はせて置くより外はなからうと云ふのである。

一一。勝負に在らず。　三聖が負けたのでもなければ雪峯が勝つたのでもないからこれには負け勝ちの詮議はないわけである。

一二。一着を放過す。然しこゝで雪峯が三聖に一棒喰はすべきところであると云ふので雪峯一手ぬけた。圜悟ならば拔き手見せぬところぞと評する。

一三。此語最も毒なり。　老僧住持の事繁しとぬけた一語に實に嶮峻無比であると云ふので、前の爾が網を出で來るを待つてと烈しく云ふたよりも却つて此のスラリとぬけたところに惡水を頭からあびせかけた勢があると讃嘆する。

第三節　本則提唱

三聖問二雪峰一透レ網金鱗未審以何爲レ食。下語云。挑鈎搭索。金鈎垂二四海一。句裡晃レ機陞面來。

透レ網金鱗とは大悟底の人なり。何を以て食となすとは何を以て行とするぞと句中で問ふた句中のうちに釣つて問ふた處ぞ。先師の下語に探竿影草。言中有レ響。

峯云待二汝出レ網來一向レ汝道。下語云。深辨來風。倚勢欺人。滅二人威光一。

三聖をおしこないて汝の網を出で來るを待つて汝に向つて出でんと云ふたところは人の威光を滅じたものぞ。先師下語に麒麟現瑞。

聖云一千五百人善知識話頭亦不レ識。下語云。彩穿肘露。

此の和尚は食を與へられやうかと思へば食も與へず、物を云ふすべも御知りなきかと云ふ。雪峯を指して云ふたぞ。句中を露したぞ。先師下語に藏レ身露レ影。

峯云老僧住持事繁。下語云。似二知レ過必改一。

老僧住持の事繁しと云ふたは、よくもない答話との沙汰なり。食をも與へず惡しきなり。されども似二知レ過必改一と似と云ふ字句中備つたほどに似と云ふ字肝要ぞ。

大燈國師（大德寺開山宗峰妙超禪師）雪峰に代つて曰く、活剝二陜府鐵牛一と、春浦（名は宗熙大德寺第四拾一世なり、御土御門帝師の德望を聞き正續大宗禪師の號を賜ふ）云く爛二烹石處一活剝二泥牛一。東溪（名は宗牧。大德寺第七十三世なり。後柏原帝特に佛慧大圓禪師の號を賜ふ）。亦雪峰に代つて語く、這裡無二蝦蟆螺蚌一と。先師曰く此の活句を以て食を與へたらば三聖に代つて如何か道はん。云く、三聖に代つて禮したらばおとなしやかでよからうぞ。

第四節　本則評唱和譯

雪峰三聖然も一出一入一挨一拶すと雖も、未だ勝負を分たざることあり。且らく道へ這の二尊宿什麼の眼目をか具す。三聖は臨濟より訣を受けて諸方に徧歴す。此高寶を以て之れを待つ。看よ他箇の問端を致すことを。多少の人模索不着。且らく理性佛法に渉らず、却りて問ふて道く、網を透る金鱗何を以てか食と爲ん。雪峰は是れ作家、匹似閑に只一二分を以つて他に酬ゆ。却りて他に向つて道ふ、汝が網を出で來んを待ちて汝に向つて道んと。汾陽之れを呈解問と謂い洞下に之れを借事問と云ふ。須らく是れ倫を超へ類を絶して大受用を得て頂門に眼あつて之れを網を透る金鱗と謂ふべし。爭奈せん雪峰は是れ作家なることを。妨げず人の聲價を減ず。却りて云ふ汝が網を出て來んを待ちて汝に向つて道んと。看よ他の兩家封疆を把定して壁立萬仞なることを。若し是れ三聖にあらずんば只此の一句便ち去ることを得ず。爭奈せん三聖亦是れ作家なることを。方に他に向つて道ふことを解す、一千五百人の善知識話頭だも也た識らずと。雪峰却つて道ふ老僧住持事繁し、此の語恁麼に頑慢なることを得たり。他の作家の相見、一擒一縱强に逢ふては卽ち弱、賤に遇ふては卽ち貴、儞若し勝負の會をなさば未だ夢にも雪峰を見ざることあらん。看よ他の二人最初は孤危峭峻、末後は二りともに死郎當なることを。且らく道へ還りて得失勝負ありや。他の作家の酬唱必しも此の如くならず、三聖臨濟に在りて院主と作る。臨濟遷化に垂示して云く、吾れ去つて後吾が正法眼藏を滅することを得ざれ。三聖出でゝ云く、爭でか敢へて和尚の正法眼藏を滅却せん。濟云く。已後人あつて儞に問はゞ作麼生。三聖便ち喝す。濟云く、誰れか知らん吾が正法眼藏這の瞎驢邊に向つて滅却することを。三聖便ち禮拜す。他は是れ臨濟の眞子方に敢へて此の如く酬唱す。雪竇末後に只網を透る金鱗を頌して他の作家相見の處を顯す。頌に云く。

【字解】一。這の二尊宿什麼の眼目をか具す。　皆さん此の眼目が見へますかな。鐵眼銅睛であらうか、一目であらうか二目であらうか或はまた三目であらうか。お互ひに是非とも雪峯三聖二尊宿の眞面貌を拜見せなければなりませぬぞ。

二。網を透る金鱗尋常既に他の香餌を食はず知らず什麼を以てか食とせん。　網を透る金鱗と云ふは普通佛法の修行とか證悟とか云ふ程度を透り拔けて、所謂る歸家穩座太平無事の身となつたものは、最早座禪だの觀法だの題目だの念佛だの云ふ食物がないから、これからは何を食つて生活をしたものであらう。悟後の平生はどうであらう。極樂へ往生してしまふた後は何とするのであらうと云ふ。

三。匹似閑。　猶し等閑と云ふが如しで大樣に構へて云ふことである。

四。汾陽之れを呈解問と謂い。　これは人天眼目にある汾陽の十八問の中では呈解問にあたると云ふので、自分の悟りを呈出して他を調査をうけること、淨土門で申せば卽らお領解を述べることである。借事問は世間の事を借りて佛法の大事を商量することで今の金鱗網を透るなど云ふのがそれである。

五。封疆を把定して壁立萬仞なることを。　互にさかいをとられぬ樣に要塞をかまへて國境を防備すると云ふのである。

六。頑慢。　頑は頑鈍で慢は慢頂と熟する文字である。

七。看よ他の二人最初は孤危峭峻末後はふたり倶に死耶當なることな。初めは處女の如く終りは脱兎の如しと申して初めは如何にも立派な武者振りであつたが末後は死に面さげての愚痴ならべで。如何にも見苦しいことであると云ふ。

第五節　類則提唱

其一　臨際瞎驢邊

臨濟遷化垂示曰、吾去後不得滅却吾正法眼藏。下語云。寶劍光寒。截斷を用ひきつて云はれたぞ。自ら句中も備るなり。寒と云ふ字句中に用ふるぞ。

三聖出云、爭敢滅却和尚正法眼藏。下語云。路逢劍客須呈劍。不是詩人莫獻詩。

臨際にやがて知音して云はれたものぞ。

濟云、已後有人問儞向他道什麼。下語云。磨霜刃。截斷を用いきつて猶も其の上を云はれたぞ。

三聖便喝。下語云。破鋒刃。

臨際の截斷を用ひ切つて問はれたほどに、其の鋒をも打破してのけられたぞ。截斷句中自ら備つた也。

濟云、誰知吾正法眼藏向這瞎驢邊滅却。下語云。竹密不妨流水過。山高豈礙白雲飛。

抑揚の句なり。臨濟三聖の二人へかけて見るべし。拶して曰く何が抑で何が揚ぞ辨せよ。云く、竹密不妨流水過と云ふを三聖になし、山高豈妨白雲飛と云ふを臨濟になして用ふるなり。又云く、一句の中で竹密不妨と云ふを三聖になして用ひ、流水過と云ふを臨濟になして用ふ。又云く、山高を臨濟になして用ひ、豈礙白雲飛を三聖になして用ふるなり。誰知吾法眼藏向這瞎驢邊滅却すと云ふは、正法眼藏は本分なり。滅却の滅の字は本來無い處を云ふたぞ。又下語に千眼看不見、誰知吾正法眼藏向這瞎驢邊滅却すと云ふは、三聖より外に誰か知ふぞとの傳授の語ぞ。

三聖便禮拜。下語云。恩大難酬。

誰か知る吾が正法眼藏這の瞎驢邊に向つて滅却すと云ふたが賊なり。賊でなうては邪正を辨せず、邪正を辨せいてば相續がならぬなり。

第六節　頌

透レ網ヲ金鱗千兵易得一將難求。何似生。千聖不奈何。休レ云「滯レ水ニ向他雲外立。活潑地。且莫鈍置好。搖レ乾ヲ蕩レ坤ヲ作家作家。未是他奇特。處。放出箇伎倆。實弄出來不妨驚群。又何妨。振レ鬣ヲ擺レ尾ヲ誰敢辨端倪。做得箇伎倆。實弄出來不妨驚群。千尺鯨噴洪浪飛。轉過那邊去。不妨奇特。一聲雷震清驚起有眼如聾。有耳如聾。如盲。誰不悚然。清驚起在什麼處。喝天上人間知幾幾。雪峯牢把陣。頭三聖牢把陣。陣脚。撒土撒沙作什麼。打云爾在什麼處。

【讀方】　網を透る金鱗　千兵は得易く一將は求め難し。何似生。千聖も奈何ともせず。云ふことを休めよ水に滯ふると　他の雲外に向つて立つ。活潑々地。且らく鈍置すること無くんば好し。乾を搖し坤を蕩す　作家作家。未だ是れ他の奇特の處にあらず。放出すること又何ぞ妨げん。鬣を振ひ尾を擺ふ。誰か敢へて端倪を辨ぜん。箇の伎倆を做し得たり。實弄出で出て妨げず群を驚かす。千尺鯨噴て洪浪飛び。那邊に轉過し去る。妨げず奇特なることを。盡大地の人を一口に呑盡す。一聲雷震ふて清驚起る。眼あり耳あり聾の如く盲の如し。誰か悚然たらざらん。清驚起る什麼の處にか在る。咄。天上人間知んぬ幾幾ぞ　雪峯は牢く陣頭を把り三聖は牢く陣脚を把る。土を撒し沙を撒して什麼をか作さん。打して云く爾什麼の處にか在る。

【字解】　一。千兵は得易く一將は求め難し。　座禪ぢや念佛ぢやと佛見法見に滯ふつて居る不憐憫の漢は幾くらでもあるが、證悟の修行のと云ふ程度を透りぬけた謂ゆる歸家穩座太平無事底の衲僧は甚だ得難いと云ふ。

二。何似生。　古德は鳥飛んで鳥の如く魚行つて魚に似たりと申されたと云ふことであるが。皆さん此の金鱗は何に似て居ましようか、月に似て居るか、鼈に似て居るか。そこ目あいと見なければならぬと座下の諸人に覆らせる。

三。千聖も奈何ともせず。　既に佛祖の法網を脫し來つたものであるから、千仞高峯と雖も手のつけやうがないと云ふ。評に曰く、這の罰あたりめ。親兄弟にも見離されたのであらう。

四。他の雲外に向て立つ。　魚淵に跳ると申して此の魚はそんな汚はしい理水には滯つて居らぬ。諸人見よ遙か雲外に向つて飛び去つたにと云ふ。

五。活潑々地。　其の勢ひは實に活潑々地で自由自在なものである。

六。且く鈍置する莫んば好し。　然るに雪峰が網を透り來るを待たんなど云はれるは甚だ以て侮蔑した話であるから、決して聞き棄てにならぬと云ふ。

七。作家作家。　如何にも作家中の作家、僧中の僧であると稱揚する。

八。未だ是れ他の奇特の處にあらず。　天地を震動させる位ゐのことは此の金鱗に取つては尋常喫茶飯事でありて、さまで珍らしいことではない、若しそれ本分の力を出せば十方法界七花八裂で紛微塵になつてしまふであらうと云ふ。

九。放出すること何ぞ妨げん。　此の金鱗は何處へでも放つて見るが好い、このコップの中へでもはいるであらうと云ふ。

一〇。誰か敢へて端倪を辨ぜん。　雪竇は鬣を振ひ尾を擺ふと云はれるけれども、其の實は何とも形容し得られるものでない。

一一。箇の伎倆を做し得たり。　皆さんウツカリ買ひがふつてはなりませぬぞ。これは雪竇の俄仕立であるからと云ふ。

一二。實弄出で來て妨げず群を驚かす。　此の實弄の二字は衍文であると云ふことで不二方秀禪師は削つて居られるやうである。雪竇が何か云はれるやうであるから皆さん立ち寄つて聞くが宜しいと云ふ。

一三。那邊に轉過し去る。　千尺鯨噴て洪浪飛ぶと云ふ其の勢ひで何處へか去つてしまうたから。それ此の眼鏡で見られよと云ふ。

一四。妨げず奇特なることを。　如何にも奇特なことであると稱讃する。

一五。盡大地の人を一口に呑盡す。　皆さん油斷して鯨魚の腹中に葬られてはなりませぬぞと亦しても三聖を讃嘆する。

一六。眼あり耳あり聾の如く盲の如し。　三聖の正面攻擊を柳に風と受げながすところを眼があつても見えず耳があつても聞こへぬかのやうであると評する。これが卽ち雪峰の偉いところで所謂る大寂靜中にあつて大動亂に應ずる作用である。

一七。誰か悚然たらざらん。　其の平氣に沈着した威光には却つて誰れでも恐れるであらうと云ふ。

一八。什麼の處にかある。其の清風は何處にどう吹いて居るぞと云ふ。

一九。咄。シツと其の清風を咄破する。

二〇。雪峰は牢く陣頭を把り三聖は牢く陣脚を把る。　敵も味方も一分の隙まのないところを評したもので、サスガは法將の對陣であると二尊宿を稱揚する。

二一。土を撒し沙を撒して什麼をか作さん。これは雪竇の文才を抑へたやうに稱揚して學人をして其の句下に死在せしめざらんとする圜悟の爲人大悲である。

二二。打して云く儞什麼の處にか在る。　圜悟がヒシつと本分の正令を行して、諸人何處に居るの、雪竇にでも隱れて居りはせぬが、エ〻風の穴にとな。此のシミタレ者奴。雪竇が呼びたてちろ〻は。まかり出で〻一句を言へと云ふ。

【講義】　此の一頌は前後八句あつて、四言四句、七言三句に三言の句がまぢつて居る。網を透る金鱗云ふことを休めよ水に滯ふると。評唱に五祖大師の言葉をあげて只此の一句に頌し了れりと申してある。これは五祖山の法演禪師卽ち圜悟大師のお師匠樣が、此の休云滯水の一句を評して此の一句で以て一則の公案を頌し了つてあると申されたものである。網を透るの金鱗と云ふは此の魚は既に佛の法の坐禪の證悟のと云ふ佛祖の法網を透りぬけて來た魚であるから、いつまでも汚れた禪河濁水の中に束縛されて居やう筈がない。只悠々自適。或時は千仞の瀑下に跳り、或時は万仞の淵に浮ぶ、之れが透網の金鱗の境界である。と三聖禪師の出沒縱横なる樣子を讃嘆する。

乾を搖し坤を蕩して鬣を振ひ尾を擺ふ。然して其の勢ひは實にすさまじいもので雲霧を起し雷を拏いて天地もために震動せんす計りである。千尺鯨噴て洪浪飛び。これは三聖禪師が一千五百人の善知識話頭だも又た知らずと雪峯山下に攻め寄せられた勢ひは、恰も千尺の巨鯨が潮をふき出して山の崩れるやうな荒浪を飛ばせたやうで洪波浩渺實に何とも形容のして見やうもないことである。一聲雷震ふて淸飈起る。然るに一方雪峰の方を見ると、七穿八穴すさまじい勢ひで三聖法敵が攻め立て〻來たにも拘はらず、老僧住持のこと繁しとスラリと拔け去られた機合は、丁度彼の夕立のがりがりと天地もくつがへらん計りに鳴り轟いた後には忽ちにして一陣の淸風颯然として吹き來るがやうである。淸飈起る。古人は雨後の青山色うた〻新たなりと評されてあるが、實にその通りで夕立して後の夕顏棚の下涼みは何とも云へぬい〻心地である。天上人間知ぬ幾々ぞ。天上天下只淸風。十方法界只颯々、月は晃々として天外にかゞやき、淸風颯々として面をはらふ。これぞ實に千歲かはらざる雪峰山上の光景であると雪峰の眼光が宇宙に輝きわたる樣子を稱揚したものである。

第七節　頌評唱和譯

網を透る金鱗云ふことを休めよ水に滯ふると。五祖道く只此の一句に頌し了れり。既に是れ網を透る金鱗豈に居して水に滯んや。必ず洪波浩渺白浪滔天の處に在らん。且らく道へ二六時中何を以てか食となさん。諸人且らく三條椽下七尺單前に向つて試みに定當して看よ。雪竇道く此の事分に隨つて拈弄すと。金鱗の類の如くんば鬣を振ひ尾を擺ふ時。直に得たり乾坤動搖することを、千尺の鯨噴て洪浪飛ぶ。此れは三聖の一千五百人の善知識話頭だも也た識らずと道ふことを頌す。鯨の洪浪を噴くが如くに相似たり。一聲雷震つて清飈起るとは雪峰の老僧住持のこと繁しと道ふことを頌す。一聲雷震つて清飈起るが如くに相似たり。大網は他の兩箇の俱に是れ作家なることを頌す。清飈起る、天上人間知んぬ幾幾ぞ、且らく道へ這の一句什麼の處にか落在する。飈は風なり。清飈の起る時に當つて天上人間能く幾人あるをか知る。

【字解】一。水に滯ると。　瑯琊山の惠覺廣照禪師の上堂に、作麼生か是れ衲僧本分の事。や〜久しうして曰く網を透る金鱗猶ほ水に滯る途を同へすの石馬紗籠を出すと申してある。

二。大網他の兩箇の俱に是れ作家なることを頌す。　頌に一聲雷震つて清飈起るとある句は單に雪峰にのみに配せずに三聖にも當て〜見るが宜しい。之れが二尊宿未だ勝負を分たずと云ふ味ひである。

第五拾則　塵々三昧

第一節　垂示

垂示云。度二越階級一超二絶方便一機機相應。句句相投。儻非二入大解脫門一得大解脫用。何以權二衡佛祖一龜鑑宗乘。且道當機直截。逆順縱橫。如何道得出身句。試請擧看。

【讀方】垂示に云く、階級を度越し方便を超絶す、機々相應し句句相投ず。儻し大解脫門に入つて大解脫の用を得るに非んば、何を以てか佛祖を權衡し宗乘に龜鑑たらん。且らく道へ當機直截逆順縱橫如何が出身の句を道ひ得ん。試みに擧す着よ。

【講義】階級を度起し方便を超絶す。世間の事柄でも何事に拘はず其の目的を達するまでには、幾多の階級を經ねばならず又必らず其の目的に達すべき方法を實行し其の便宜を計らなければならぬことであるが、佛道修行もその通りで、先づ發菩提心と申して佛道修行の志を起してそれから愈々佛門に入り。色々の修行をする、其の修行の階段には五十二位と申して十信十住十行十回向十地と云ふ五十位を經て始めて等覺位に登り、それから更に進みて妙覺果滿の佛陀となるのである。サテ其の修行には苦集滅道の四諦。無明行識等の十二因緣。或は又布施持戒等の六度の行

と云ふ風に種々雜多の法門がある。それが卽ち方便道である。そこで是等の階級を經此等の方便道を修するに三大阿僧祇劫と云ふ長の年月がかゝる。かくして始めて其の目的地たる菩提涅槃の彼岸に到着し四智圓滿の佛陀となることが出來るのである。然るに我が佛心宗にありては直指人心見性成佛一超直入如來地と申して、都べて此等の階級を超越し其れ等の方便を超絶したる處を立脚地とし出發點として、更に其れ以上の働き卽ち百尺竿頭に更に一歩を進めるのであるから、機々相應じ句々相投ずで、師學應對の間に於て以心傳心とスッキリ水ももらさずに一器より一器へと相傳へ、句句契合するやうで無けらねばならぬ。若し大解脫門に入りて大解脫の用を得るにあらずんば何を以てか佛祖に權衡として宗乘に龜鑑たらん。解脫は解と云ふは束縛を離れたこと。脫と云ふは鳥の籠を飛び出して自由の身になることであるから卽ち吾々お互ひが煩惱妄念の束縛を離れて朝な夕なの一切萬事に眞實自在自在に働くことが出來る樣になることである。若し吾れ人が此の大解脫門に入つて此の自在の妙用を備へたならば兎も角。さもなければ何んとして佛祖の法則、宗乘の手本と申すことが出來よう。權衡は權は秤錘、衡は平也で卽ちはかりのことである。はかりと云ふものは何人と雖も必ず依用せなければならぬ。必ず守らねばならぬものであるから卽ち法則のことになる。龜鑑は龜は猶豫を決する所以なり鑑は妍蚩を辨ずる所以なりと申して卽ち手本と云ふ程のことである。大解脫の體用共に全き人でなくんば決して佛祖の佛祖たるの量を計る權衡となり、又直指單傳の宗乘を參究するもの丶龜鑑となることが出來やうぞと云ふのである。且らく道へ直截逆順縱橫如何が出身の句を道い得ん出身は卽ち解脫自由の意味であるから、大解脫の働きを以て自由自在思ひの儘に妙作用をあらはす底でなければ到底その出身無碍の妙句を提出することは出來ない。試みに擧す看よサテそれには爰に好き例があるから擧揚して見やう程に心を止めて此の雲門大師の出身の句を參究して見よと結ぶ。

第二節　本則

擧僧問雲門。如何塵塵三昧。天下鴉僧盡在這裏作窠窟。門云。鉢裏飯。桶裏水。

布袋裏盛錐。金沙混雜。將錯就錯。含元殿裏不問長安。

【讀方】 擧す僧あり雲門に問ふ。如何なるか是れ塵々三昧。天下の鴉僧盡く這裏に在りて窠窟を作す。滿口霜を含む。沙を撒し土を撒して什麼か作さん。門云く鉢裏の飯桶裏の水。布袋に錐を盛る。金沙混雜錯を將て錯につく。含元殿裡には長安を問はず。

【字解】 一。塵々三昧。華嚴經の賢首菩薩品の偈に、一微塵の中にて三昧に入りて一切の微塵定を成就すれども、而も彼の微塵も亦增せず、一に於ひて普く雜思の刹を現ずと說いてある。抑も華嚴經は稱性の本經とも、根本法輪とも申して釋迦老子成等正覺の最初に、文殊普賢等の諸大菩薩等に對して、佛の自所證の儘を開說せられた經典であるから、所謂る大小だの廣狹だのと云ふ凡夫の情量を超越して更に其の支配を受けぬ。そこで一寸見れば誠に異樣には見へるが然し眞實大

悟徹底の人の働きとしては誠にさうあらねばならぬことである。刹と云ふは世界のことで、世界と申せば餘程廣大なことのやうに思ひ。塵と云へば微少なものゝやうに思ふのは、お互ひが大小廣狹と云ふ凡夫現在目前の情量に支配せられて居るからのことである。サテ塵と云ふは卽ち微塵で今日申せば分子とか電子とか申して此れ以上分割すれば最早無に歸すると云ふ最極微細の塵埃のことである。其の塵埃の中に無量の刹卽ち此の廣大なる世界を數へつくすことが出來ない位澤山疊みこんでしまつても尙廣からず狹からず。一一の世界が更に其の自體を損することなくして原形の儘で收つてしまふと云ふのである。葉上一滴の白露にも天上の日月星辰雲霧を初め地上の山川草木悉く其の影を映すではないか。一塵中に十方法界を盡く攝する位のことは、眞實自由を得た人には𝕠ンの尋常一樣の喫茶飯事に過ぎぬ。此の境界を吾々個人個人の上に得るのが三昧卽ち三昧耶で。三昧は梵語茲には正受と翻する。正受は讀んで字の如く正しく受けるので、恰も明鏡の漢來れば漢現じ胡來れば胡の現ずるが如く、又彼の淸水の月を現じ雲を現じ花を現じ美人を現ずるが如く、歷々分明無私公平に何物をも映じて更にもらす處のないが卽ち正受である。若し吾々の心鏡にして一點の煩惱妄念なく何等の曇りもなかつたならば宇宙萬象ありのまゝと其の實相妙用をうつすやうになる。これが卽ち三昧である。

二。 天下の衲僧盡く這裏に在りて窠窟を作す。　三昧と申せば如何にも高尙らしいけれども其の實は誰も彼れも朝な夕な寢ても起きても此の三昧を離れて居らぬのであるけれども、稍もすれば彼の階級や方便に束縛せられて三昧と聞けば直ちに何か有り難いものが有るやうに思ふ。それでこう云ふ笑止な問題がおきるのである。

三。 滿口に霜を含む。　皆さんグツともスツとも云へますまいと云ふ。

四。 沙を撒し土を撒して什麼をか作さん。　塵々だの三昧だのと抹香臭いものを並べ立てゝ何にするぞとたしなめる。

五。 鉢裏の飯桶裏の水。　ナニ塵々三昧が。ソレハ飯鉢の中には飯があり、水桶の中には水がある。ソラ鐵瓶には湯がわいて居る火鉢には火がおきて居ると云ふ。之れが雲門大師の華嚴經である。

六。 布袋裡に錐を盛る。　皆さんソレ雲門の頭陀袋から錐先きが出ました。カツかりのぞいて目をつきなさるなと云ふ。これは方語に云く尖なるもの先づ出づとあると同じく雲門の機鋒の如何にも銳利な樣子を言ふたものである。

七。 金沙混雜。　皆さん丸呑みにしては胃腸を傷めますぞと云ふ。又。雲門大師が鉢裏水と申されたのは誠によく云ひ得てはあるけれども、更に一語も言句に云ひ顯さないのに如かぬから金沙混雜の感があると見るも宜しい。

八。 錯を將て錯に就く。　彼の僧が如何なるか塵々三昧と問ふたのが既に錯であるに、今又それに對して言句で以つて答へたのは所謂錯と錯との出遇ひであると云ふ。

九。 含元殿裡には長安を問はず。含元殿は唐の龍朔三年に景宗加皇帝が長安城內に建てられた宮殿で卽ち天子の居處である。既に長安城內にあるから含元殿の裡に居る以上は何も長安城は何處で御座ると問ふ必要はない。今もその通りで飯鉢には飯があり、水桶に水のあるのは當り前のことであるから言はずとも知れたことである。然るにそれを今更事新しく云ふのは誠に野暮な話であると云ふので之れが益々祖師門下の眞箇の三昧の眞意を開示したものである。

第三節　本則提唱

僧問如何是塵々三昧。下語云。竪窮三世横貫十方。

三句備るなり。先師下語に句裏呈ス機。

門云鉢裏飯桶裏水。下語云。耳朶雨片皮。竪窮三世横貫十方。

初問を受ての答ぢや程に是れも三句體調備つたぞ。又塵々三昧は色相の上のことよとて鉢裡の飯桶裏の水と答へられたものぞ。先師下語に幽澗泉淸中峯月白。天上星地下水。

第四節　本則評唱和譯

還つて定當得すや、若し定當得せば雲門の鼻孔諸人の手裡にあらん。若し定當不得ならば諸人の鼻孔雲門の手裡にあらん、雲門に斬釘截鐵の句あり。此の一句の中に三句を具す。有る底は問着すれば便ち道ふ、鉢裏の飯は粒々皆圓かに、桶裏の水は滴々皆濕ふと。若し恁麼に會せば、且つ雲門端的爲人の處を見ず。頌に云く。

第五節　頌

鉢裏飯桶裏水　露也。撒沙撒土作什麼。漱口三年始得。多口阿師難下嘴　爲什麼却舌頭。識法者懼。北斗南星位不殊　喚東作西作什麼。坐立嚴然。白浪滔天平地起　脚下深歟丈。實主互換。長者長法身短者短法身。嚴然在爾頭上。爾又作麼生。打。擬不擬　蒼天蒼天。咄。止不止　添説什麼。怨苦。更箇箇無挹長者子　傍觀者哂。耶當不少。麼生。打。

【讀方】鉢裏の飯桶裏の水露なり。沙を撒し土を撒して什麼をかなさん。口を漱ぐこと三年にして始めて得ん。多口の阿師も嘴を下し難し。舌頭を縮却す。法を識る者は懼る。什麼としてか却つて恁麼に擧す。北斗南星位殊ならず　東を喚で西と作して什麼をかなさん。坐立嚴然。長者は長法身短者は短法身。白浪滔天平地に起る。脚下深きこと數丈。實主互換。驀然として爾が頭上に在り。爾又作麼生。打す。擬不擬。蒼天蒼天。咄。止不止。什麼とか説かん。怨苦を添ふ。箇々無挹の長者子　耶當少からず。傍觀の者哂ふ。

【字解】一。露なり。　公案のまゝ出しである。皆さん〔禍界曾つて識せざるところが見えますかなと云ふ。

二。沙を撒し土を撒して什麼をか作さん。　如何に結構な金粉銀沙でも眼中に入れば沙土も同然。只醫となるばかりであるが。それと同じく如何に奇警なる妙句と雖も口に出してはもう駄目であると云ふ。

三。口を漱ぐこと三年にして始めて得ん。　一本に口を漱ぐこと三十年にしてとあるが、どちらにしても宜しい。麼々三昧なぞゝ佛法臭くして鼻持ちがならぬから、よく口を洗つて來いと云ふのであらう。

四。舌頭を縮却す。　それは舌を縮めて居るから、嘴が下し難いのであるから、舌を伸しさへすれば何とでも云へるであらうと云ふ。

五。法を識る者は懼る。　言ふて言へぬことはないけれども言ふべからざることは言はぬが法である。

六。什麼としてか却つて什麼に擧す。自ら嘴を下し難しと申して置きながらなぜにそのやうなことを申されるかとなぢる。

七。東を喚んで西と作して什麼をか作さん。　火は熱いもの水は冷いもの。花は紅いもの柳は綠のもの、爾が鼻は元來目の下に在る。それに別の心配はなからうと云ふ。

八。坐立嚴然。　坐するも嚴然。立つも嚴然。實主歴然として少しの亂れもない。

九。長者は長法身短者は短法身。　鶴は長い脚の其のまゝにして長脚佛。鴨は脚の短い其なりで短脚如來であるから增すこともへらすこともいらぬと云ふ。

一〇。脚下深きこと數丈。　イヤその滔天の波がお互ひの脚跟下にと云ふて。油斷して溺れるなよと注意する。

一一。實主互換。　北斗南星と白浪滔天とが互ひに主となり伴となりて主伴少しも亂れることはない。

一二。驀然として爾が頭上に在り。　何にも脚下のみには限らない。ソレ頭上にも漫々たりだと云ふ。

一三。爾又作麼生。　能く眼あいて見よと學人を警誡して。

一四。打す。　ヒッシと打つてまごつくと許さぬぞと云ふ。
一五。蒼天蒼天。　其の擬議し得られぬ場合に於ては只仰いで天に訴ふるのみである。
一六。什麼とか說かん。　何とも言ふて見やうがない。
一七。怨苦を添ふ。　嗚呼嗚呼とうなだれる。
一八。耶當少なからず。　死面さげてヨボ〳〵とすると評する。
一九。傍觀の者哂ふ。　偖ても淺間しいことお耻しい次第ではないかと云ふ。

【講義】　鉢裏の飯桶裏の水。これは例の如く公案其の儘を指し來つたものである。多口の阿師も鍋を下し難し。この鉢裏の飯桶裏の水と云ふは雲門大師の華嚴經六拾卷であるが、皆さんこれの有り難いか有り難くないか。甘いか辛いかを味つてごろうじ。此のうまみは丁度彼の飯の味が充分に說明し難いのと同じこと。又水の味が完全に言いあらはせぬのと同じことで、如何ほど多辨饒舌な人でも何とも說明のして見やうもなく、又辨駁して見ることも出來ないであらうと云ふ。これで本則は頗し了つたのであるが、雪竇和尙は更に文才を弄して、北斗南星位殊ならずと謠ひ出した。北斗星はいつも北にありて輝き、南極星は恒に南方にありて照る。花は年々歲々紅に咲き、柳は年々歲々綠に芽出す。爾の鼻孔は常に眼下に在りて下に開き。爾の兩耳は恒に頭の兩側にありて位す。卽ち位不殊で何も別段に思量して彼れの此れのと心配するには及ばないこと。未來永劫無事太平である。何も口が鼻の下にあるからとて悲觀して華嚴の瀧などへ飛び込むではなりませぬぞ。白浪滔天平地に起る。サア何としたものであらう。油斷して溺れてはなりませぬぞと云ふ。此の白浪滔天と前の北斗南星とは同じ姿であらうか又しは別の物であらうか、若し此の間に一歩でも踏みちがへたならば夢にも塵々三昧に入ることは出來ませぬ。擬不擬止不止。爰の處を一本には此の二句を連書して、咄。蒼天々々と云ふ二着語を下して、什麼をか說かん。更に怨苦を添ふと云ふ二つの著語を削つてあるやうであるが、どちらにせよ意味に於ては大した變りはない。これは擬議せんとすれども擬議せられず。止まらんとすれども止まらずと云ふので彼の孔子が道は須臾も離るべからず離るべきは道にあらずと申されたと同じ味ひである。箇々無掘の長者子。これは法華經の信解品に出て居る有名な長者窮子の譬を出したものである。無掘と云ふは貧窮の極なりと申して、掘は噴鼻掘のこと。そのふんどし一枚もないと云ふから赤裸體の貧乏人と云ふことである。昔し或る大福長者の子が家出して誤つて乞食となりて、其の身の長者の子たることをも知らなかつた。然るに親のなさけによりて再び元の長者の子となり遂ひに其の家を嗣いだと云ふ物語りがある。これはツマリ本來成佛奮來成佛の吾々がそれを知らざるよりして煩惱生死の凡夫になつて居ると云ふことに喩へたものである。寒山詩に、"方極常嬰レ苦、九維徒自論、有才遺ニ草澤一。無レ勢閉ニ蓬門一。日上巖猶暗、烟消谷尙昏、其中長者子、箇々總無掘"とあるがこれを歌ふたものである。身は大福長者の子と生れたものが噴鼻掘一枚もたぬとは、誠になさけないこと

である。吾々御互ひも、舊來成佛とオギャッと泣かぬ其の前から釋迦何人ぞ我何人ぞと云ふ三十二相具足の立派な佛でありながら、ヤレ五十二段の階級ぢやの六度の行で御坐るのといらぬ閑葛藤にとらはれて少しも大解脫自由無碍の妙用をあらはし得ぬと云ふは、そも何たることであらう。お互ひに貧乏神がはなれぬから、玉かけながら迷ひこそすれで、折角の自家の珍寶をさへ使ひ得ぬのである。何んと耻かしいことではないか、氣の毒なことではないか。此の雪竇など可笑して〳〵お臍にぶんぶく茶がわき申すわと云ふ。

第七節　頌評唱和譯

雪竇前面に雲門對一說の話を頌するに道く、對一說、太だ孤絕、無孔の鐵鎚重ねて椑を下すと。後面に又馬祖の四句を離れ百非を絕する話を頌するに道く、藏頭白海頭黑、明眼の衲僧も會不得と。若し此の公案に於て透得せば便ち這箇の頌を見ん。雪竇當頭に使ち道ふ。鉢裏の飯桶裏の水と。言中に響あり句裡に機を呈す。多口の阿師も觜を下し難し、後へに隨つて使ち爾がために註脚を下すなり。爾若し這裏に向つて玄妙の道理を求めんと要して計較せば、轉た觜を下し難し。雪竇只這裡に到つて也た得たり恁麼に頭上に先づ把定することを愛す（一本に只到這裡也得他愛恁麼の十字を削る）家中に具眼の者ありて覩破せんことを恐れてなり。後面に到つて須らく一着を放過して俯して初機の爲めに打開頌出して人をして見せしむべし。北斗は舊によりて北にあり、南星は舊に依りて只南に在り。所以に道ふ、北斗南星位殊ならずと。白浪滔天平地に起る。忽然として天地上に波瀾を起さば又作麼生。若し事上に向つて覩ば則ち易く、若し意根下に向つて尋ねば卒に模索不着ならん。這箇鐵橛子の如くに相似たり。擺撥することを得ず。嘴を挿むことを得ず。爾若し擬議せば會せんと欲すれども會せず。止らんとすれども止まらず。亂りに懞袋を呈せば正に是れ箇々無掘の長者子。寒山の詩に道く。六極常に苦に嬰る。九維徒らに自ら論ず。才有つて草澤に遺られ、勢無くして蓬門を閉づ。日上つて巖猶ほ暗く、煙消えて谷尙ほ昏し。其の中の長者子、箇々總に掘無し。

【字解】一。雲門對一說の話に道く。　百則の中第拾則であるから參照して見るが宜しい。
二。馬祖の四句を離れ百非を絕する話。　百則の中第七拾三則を見るべし。
三。若し事上に向つて覩ば則ち易く等。　兩頭共に非なれども丸呑みなればまだしものこと。意根下に死在しては佛祖も救い難いであらうと云ふ。
四。六極九維。六極は天地四方で九維は東西南北四維に天を加へたものである。

第五拾一則　雪峰兩僧

第一節　垂示

垂示云。纔有是非。紛然失心。不落階級。又無模索。且道放行卽是。把住卽是。到這裏。若有一絲毫解路。猶滯言詮。尙拘機境。盡是依草附木。直饒便到獨脫處。未免萬里望鄉關。還構得麽。若未構得。且只理會箇現成公案。試擧看。

【讀方】　垂示に云く、纔に是非あれば紛然として心を失す、階級に落ちざれば又模索すること無し、且らく道へ放行するが是か把住するが是か。這裏に到つて若し一絲毫の解路ありても猶ほ言詮に滯ふり尙ほ機境に拘はらば盡く是れ依草附木、直饒便ち獨脫の處に到るも、未だ免れず萬里に鄉關を望むことを、還つて構得すや、若し未だ構得せずんば且らく只箇の現成公案を理會せよ。試に擧す看よ。

【講義】　纔に是非あれば紛然として心を失す。これは三祖僧璨大師の信心銘に出て居る語で、何事にかぎらず總べて物事に關して彼れが善いとか是れが惡いとか云ふやうに、是非善惡を云爲する心が動き初めたならば、既に此れ本心本性を失ふたもので、是れが抑も迷ひのもとゝなるの

である。花の咲いたに善惡があらうか。月の照るのに邪正があらうか。風の吹くのに曲直があらうか。紅葉の散るのに是非があらうか。本心本性は元來是なく非なく善なく惡なく、正なく邪なく曲なく直なき底のものでありて、何とも分別して見やうのないものである。それにあれが善いの此れは惡いの、奇麗の汚穢のと云ふのは、皆人間の妄想から來たものでありて、花は紅いの儘にして之れ佛、蝶は舞ふたなりしにて之れ如來と云ふ實相天然佛を傷ける五逆の大罪の一であると申さねばならぬ。

階級に落ちざれば又模索することなし。一足飛びにして小僧が長老となる譯にはゆかぬ。兵卒が大將になることは出來ぬ。既に久しく煩惱妄念の深淵に沈んで居つたものが、何として一超直入に如來地に進入することが出來やうぞ、何れの處にか天然の彌勒自然の釋迦あらんや。必ず や修證の功を經て追々と階級を進んで行かねばならぬのである。且らく道へ放行するが是か把住するか是か。許して自由に働かせるがよいか、奪つて動かれないやうにするがよいか。ソコハ衲僧の學人を接する手段掛け引と云ふものである。這裏に到つて若し一絲毫の解路あり猶ほ言詮に滯ふり尙ほ我境に拘はらば盡く是れ依草附木。若し毫髮の解路あらば則ち言論に滯ふり亦機境にかゝはる。若し言詮に滯ふり亦た機境にかゝはらば則ち此れ依草附木の精靈なりと申して、靈は鬼、鬼は死人なりで卽ち幽靈のことである。人の體を離れた據なさに草に依り木に附して種々の姿をあらはすのが幽靈である。今把住と抑へて働かせざるも、放行と許して自由に働かせるもそれは臨機應變であるけれども、少しでも理窟に涉つたり或は言葉に着き廻つたり、見るもの聞くものゝために動かされて妄想分別に迷ふて居たならば、彼の依草附木の幽靈と何の異る所もないのである。直饒便ち獨脫の處に到るも未だ免れず萬里に鄕關を望むことを、獨脫は獨立脫體で決して他人の支配をうけない自由の境界のことである。よしその境に到り得たにしても鄕關萬里、また及びもないことでありて眞實の寶處、無量光明土は遙かに十萬億土の彼方に望むより外はないのである。還つて構得するや、何んと諸人斯やうに音信不通のところであるが果して能く眞實の報土へ到り得られるものであらうかどうであらう。若し未だ構得せずんば且らく只箇の現成公案を理會せよ。箇の現成公案こそ本分の作用であるからとくと參究して見るが宜しいと云ふので試みに擧す看よと本則を呈出する。

第二節　本則

擧雪峯住庵時。有二兩僧一來禮拜狀領過一峯見レ來。以レ手托二庵門一。放レ身出云。是什麼鬼眼睛。無孔笛子。擊頭戴角。僧亦云。是什麼泥彈子。跳柏板。箭鋒相拄。峯低頭歸レ庵。蹋泥裏有刺。如龍無足似蛇有角。就中難爲措置。僧後到二巖頭一。也須是問過初得。同道方知頭問。什麼處來。也須是作家始得。這漢往往納僧。嶺南ヨリ敗闕。若不是同參消乎放過。

來。傳得什麼消息來。也須是頭云。曾到雪峯麼。勘破了多時。不可道不到。儀云。曾到。實頭人難得。頭云。通箇消息。還見雪峯麼。不信。打作兩橛。

有何言句。便恁麼去也。僧擧前話。便恁麼去也。頭云。他道什麼。好劈口便打。失鼻孔了也。僧云。他無語低頭歸庵。又納敗闕。儞且道他是什麼。頭云。噫我當初悔不向他道末後句。白浪滔滔。若向伊道天下人不奈雪老何。縱兒牽伴。不必。須彌也須粉碎。且道他圖續在什麼處。僧至夏末再擧前話請益。已是不惺々。正賊去了多時。賊過後張弓。頭云。何不早問。好與掀倒禪床。過也。僧云。未敢容易。這棒本是這僧喫。穿鼻孔。停囚長智。已是兩重公案。頭云。雪峯雖與我同條生不與我同條死。漫天網地。要識末後句。只這是。驚殺一船人。我也不信。消乎分疎不下。

【讀方】　擧す雪峯住庵の時兩僧あり來りて禮拜せんとす什麼をか作す。一狀に領過す。峯來るを見て手を以て菴門を托して身を放つて出づ。鬼眼睛。無孔の笛子。頭を擊げ角を戴く。僧亦云く是れ什麼ぞ。泥彈子。氈柏板。箭鋒相拄ふ。峯低頭して庵に歸る。爛泥裏に刺あり。龍の足なきが如く蛇の角あるに似たり。中に就く措置を爲し難し。僧後に巖頭に到る。也た須らく是れ問過して始めて得べし。同道方に知る。頭問ふ什麼の處よりか來る　也た須らく是れ作家にして始めて得べし。這の漢往往敗闕を納る。若し是れ同參にあらずんば消息を放過せん。僧云く嶺南より來る　什麼の消息をか傳へ來る。也た須らく是れ箇の消息を通ず。還つて雪峯を見るや。頭云く曾つて雪峯に到るや。勘破し了ること多時。到らずと道ふべからず。僧云く曾つて到る實頭の人は得難し。打て兩橛と作す。頭云く何の言句かありし。便ち恁麼にし去るや。僧前話を擧す。便ち恁麼にし去るなり。重々敗闕を納る。頭云く他什麼とか道いし。好し劈口に便ち打たん。鼻孔を失却し了れり。僧云く他無語低頭して庵に歸る。又敗闕を納る。儞且らく道へ他は是れ恁麼ぞ。頭云く噫我れ當初悔ゆらくは他に向つて末後の句を道はざりしことを、洪波浩渺白浪滔天。若し伊に向て道いたらましかば天下の人雪老を奈何ともせざらんに。癩兒伴を牽く。必とせず。須彌も也た須らく粉碎すべし。且らく道へ他の圖續什麼の處にか在る。僧夏末に至りて再び前話を擧して請益す　已に是れ慢慢ならず。正賊去り了ること多時。賊過ぎて後に弓を張る。頭云く何んぞ早く問はざる　好し與めに禪床を掀倒するに。過なり。僧云く未だ敢へて容易ならず　這の棒本と是れ這の僧喫せん。鼻孔を穿却す。囚に停つて智を長ず。已に是れ兩重の公案。頭云く雪峯我と同條に生ずと雖も我と同條に死せず、漫天網地。末後の句を識らんと要せば只這れ是れ。一船の人を驚殺す。我も也た信ぜず。消んど分疎不下。

【字解】一。雪峯住庵の時。　唐の武宗の會昌五年に廢佛の勅命を出して天下の寺院を毀ち僧尼を還俗せしめたことがあつた。其の時に雪峯山の義存禪師は雖を嶺南の地に避けて小庵を結んで住持して居られたが、師兄の巖頭全豁禪師は鄂渚湖と云ふ湖水の渡子卽ち渡守となつて世を避けて居られた。公案の事實は其の時分の出來ごとらしい。此の兩師は共に德山宣鑑禪師の法嗣である。

二。什麼をか作す。　兩僧が禮拜せんとするを咎めたものである。皆さん此の兩僧が何をするかをしかと見とゞけて置かればなりませんぞと云ふ。

三。一狀に領過す。　迂路々々と他人の足下に禮拜などしてあるくやつは一所に罰してやるが好いと云ふ。

四。鬼眼睛。　可畏也と申して恐ろしい見幕ぢやと云ふのである。

五。無孔の笛子。穴のない笛であるから吹いて見やうがあるまいとほめる。皆さん此の笛が吹けますかな。ソレ此の音をきいてごろうじ。

六。頭を擎げ角を戴く。　是れは抑も何鬼であらう。なにの鬼ぞ。龍であらうか蛇であらうか。ソレ見てごろうじと云ふて、恐ろしくて寄り附けまいぞと注意する。

七。泥彈子。　子供が泥を丸めて竹の筒で彈かせて戯ごとをするものである。泥玉鐵砲では雀も取れまいと云ふ。まして雪峰をうつわけには往くまい。

八。氈柏板。　毛氈張りの太鼓では幾らたいたいたところでなりそうにもないと云ふ。

九。箭鋒相拄ふ。　雪峰も是れ什麼ぞ。兩僧も是れ什麼ぞ。同じく是れ什麼ぞで少しも勝負はつかぬと云ふ。

一〇。爛泥裏に刺あり。　雪峰の默して庵へ歸つた作略と云ふものは、臨濟の喝や德山の棒のやうに激烈な所作ではないけれども、溫柔の處に容易ならぬ嶮峻な鋒刃を藏して居るぞと云ふ。評に云く、笑中に刺あり。

一一。龍の足なきが如く蛇の角あるに似たり。　龍でもなく蛇でもなく實に珍らしいけだものであるから、險隘でうつかり寄りつくことも出來まいぞと云ふ。

一二。就中措置を爲し難し。　平生でも雪峰の機鋒は手のつけて見やうもないが、とり分けて今は又格別であると云ふ。

一三。也た須らく是れ問過して始めて得べし。　巖頭に問ふたならば定めし雪峰が無語で低頭歸庵した消息がわかるであらうと云ふ。

一四。同道方に知る。巖頭も雪峰と同じ穴の狸であるから、定めて能くうちうちを知つて居るであらうと云ふ。評して曰く蛇の道は反鼻。

一五。也た須らく是れ作家にして始めて得べし。　凡庸の漢では致し方がないと云ふ。

一六。若し是れ同參に非ずんば洎んど放過せん。　雪峰と巖頭とは同參の兄弟であるから大丈夫であるが。もし他人であつたならば必ずや取り逃がしてしまうであらう。

一七。這の漢往々敗闕を納る。　此の僧は至る處でしくじつてあるいて、イヽ耻がきをしよると云ふ。

一八。什麼の消息をか傳へ來る。　何か能いおとづれもあるであらう。嶺南は六祖以來の靈場であるからと云ふ。

一九。也た須らく是れ箇の消息を通ず。　確かな消息を通じないでは詰りませぬぞと云ふ。

二〇。還つて雪峰を見るや。　何んと皆さん雪峰山のあの好景色を見ましたかなといふ。

二一。勘破し了ること多時。　巖頭は此の僧が必ず雪峰に參したものであると云ふことを疾に勘破して居るから必ず到らずとは云はるゝなよと注意する。

二二。實頭の人は得難し。　曾つて到れりとば正直は正直であるが、然し實に到つたかの。圜悟合點が行かぬと裏から撞いて見る。

二三。打つて兩橛と作す。　元來本分の地は到れりとも到らずとも商量すべきではないに、それを到れりなどゝは早や兩端に渉つて居ると云ふ。

二四。便ち恁麼にし去るや。　巖頭和尚に向つて、そんな手ぬるいことを云ふて居らずに、直ちに本分の令を行すれば好いにと云ふ。

二五。便ち恁麼にし去るなり。　此僧不利潑な。釣られたなと叱る。

二六。重々に敗闕を納る。　重れ〳〵の失敗で誠に見苦しいことであると云ふ。

二七。好し劈口に便ち打たん。　巖頭和尚に向つて、それでは手ぬるい。圜悟ならば拔く手も見せまじきにと云ふ。

二八。鼻孔を失却し了れり。　巖頭鼻孔を失はれた。面目次第もないと云ふ。

二九。又敗闕を納る。　重々の耻さらしで。如何にも不憐悧な男であると云ふ。

三〇。爾且らく道へ他は是れ什麼ぞ。　貴公はその雪峰の作略が何であるのか分らないのかと叱る。

三一。 洪波浩渺白浪滔天。　巖頭が末後の句と云はれたのを評してその云ひ草が如何にも滔波滔天の勢ひであると稱揚する。

三二。 癩兒伴を率く。雪峯と巖頭とは好い道伴れであるが、然しカッタイ同士で甚だ見苦しいと云ふ。

三三。 須彌も也た須らく粉碎すべし。其の末後の句には須彌五岳までも粉碎する活作用があると云ふ。

三四。 且らく道へ他の圈續什麼の處にか在る。そう申される圈續とはそも何れにあるであらう。皆さん決して油斷して落ち込むではなりませぬぞと一般の後學に叅究を勸誡する。

三五。 已に是れ惺々ならず。　何處までも馬鹿な男であると罵る。

三六。 正賊去り了ること多時。　今そこですれちがつた筈であるに、それを何んと見たぞと答める。

三七。 賊過ぎて後に弓を張る。　遲くて何の役にも立たぬと云ふ。

三八。 好し與めに禪床を掀倒するに。　若し圈悟ならば巖頭がそう云ふた時に巖頭の禪床を引き倒して痛い目に遭せてやるべきであるにと云ふ。

三九。 過也。もう遲い。殘念なこと〻云ふ。

四〇。 這の棒本是れ這の僧喫す。　圈悟が拄杖をトン卜一卓して、持合せの此の棒こそ嘗つて味ふた一棒であるにと云ふ。

四一。 鼻孔を穿却せん。到頭巖頭のために鼻づらへ繩を通されてしまふたに夫れを知らぬとはなさけないと云ふ。

四二。 囚に停つて智を長ず。　一夏九十日の工夫が漸く夫れ式のことかと云ふ。囚に停つて智を長ずと云ふは獄中で罪の云ひぬけやうを考へると云ふことである。

四三。 已に是れ兩重の公案。　最初にも不會であつたのが今又夏末に不會であるから、つまり兩重の不會である。

四四。 漫天網地。　巖頭の機用を稱揚して天地六合に充足すと讃嘆する。

四五。 一船の人を廣殺す。　末後の句と妙なことを云ふものであるから、一夏九十日間の閑工夫同船者の迷惑此上なしであると云ふ。

四六。 我も亦信ぜず。只這れ丈けのことでは圈悟は承知が出來ませぬと云ふ。

四七。 泊んど分疎不下。巖頭和尚は埒もないことを申されるが、ソレハ何のことでありますか、ムニヤ〳〵。偖もわからぬこと〻云ふ。これは總べての解路言詮を打ち拂ふたものである。

第三節　本則提唱

雪峰住菴ノ時有二兩僧一來禮拜。先師下語して曰く梁生招レ箭。峰見レ來以レ手托二菴門一放レ身出云是什麼。下語云。撓鈎搭索。

兩僧を如何と試みて身を放ちて出たなり。句中ぞ。先師下語に提不レ起。銀山鐵壁。

僧亦曰是什麼。下語云。似二箭鋒相拄一。

生得は不足な僧なれども、こゝでの働きは能く云ふたほどに似二相拄一と云ふ句を用ふるなり。似と以ふ字で奥の働がしられたなり。又云く、是れ什麼ぞと云ふたは粥僧の働きには似たれども、後語のなき處を不足に見て似二箭鋒相拄一と下語したぞ。似の字字眼なり。先師下語に壁不開。銀山鐵壁。

峰低頭歸レ菴。下語云。鋼泥裏有レ棘。鐵包二猯石一。

句中を露はさず。おしだるんで庵に歸られたは、恐ろしき手段ぞ。先師下語に金鎚影動。無孔鐵鎚。

僧後到岩頭。下語云。徒蹈破草鞋。

什麽の道理もなく岩頭へ行つたほどにいたづらあるきなり。先師下語に白日達須彌。

頭問從何處來。下語云。似要知來處。秤尺在手。

先師下語に爛泥裏有棘。探竿影草。

僧云嶺南來。下語云。一死不再活。一處不通兩處失功。脚跟不點地。死來多少時。

句中を心得ず眞直に云つたなり。初問の處で似箭鋒相拄と云ふ句を用ゆるは、後の働不足なを見かけてのことなり。似と云ふ字爰で用にたつなり。先師下語に爛泥裏有棘。句裏呈機。恭逢敵手難藏手。

頭云曾到雪峰麽。下語云。提欝見肘。

先師下語に春風逼戸寒。試人端的。

僧云曾到。下語云。脚不蹈實地。

眞實を得知らずして彼方此方足をたゞめかしたなり。先師下語に錯。會名言相隨來也。

頭云有何言句。下語云。生薑終不改辛。青於藍。

句中を改めずして問ふなり。先師下語に落草求人。

僧擧前話。下語云。至不知非不足醫。貧兒思舊債。

先師下語に蹉過也不知。

頭云他道什麽。下語云。冷於水。苦瓠連根苦。春風來未休。甘瓜徹蔕甜。

先師下語に獅子咬人。以語試人。

僧云他無語低頭歸菴。下語云。鼠口終無象骨。

先師下語に云く、迷己逐物。敗闕不少。

頭云噫我當初悔不向他道末後句若向伊道天下人不奈雪老何。下語云。莫道非々想天無人。

非々想天は三十三天なり。三十三天は空界なり。非々想天に人もないとて賊を仰せらるとの義なり。又云く、道ふ方は安けれども天下の人が雪老を何んとせうぞと云ふ義なり。世上には人もなげに云ひたいまゝに云はれたと云ふ方なり。先師下語に殺人刀活人劍。一手擡一手搦。

僧至夏末再擧前話請益。下語云。惱亂春風卒未休。

同じことをたちかへつて問ふたほどに惱亂春風卒未休と見るなり。先師下語に貪看天上月

失却掌中珠。

頭云、何不早問。下語云。路入桃源深更深。

句中が猶も深うなりたぞ。先師下語に水中鹽味色裡青膠。虛多不如實少。可痛可悲。

僧云、未敢容易。下語云。强惺々。

前話をば擧したれども途に心得ざるなり。强惺々は酒に醉はぬふりをするやうなことぞ。又知らぬことを知つたふりをするをも强惺々と云ふ。前話をば擧揚したれども得知らぬなり。

頭云、雪峰雖與我同條生不與我同條死要識末後句只這是。下語云。曲直分明。

句中をあらためず云ふた方もあり。又只是と云ふには本分を指して云へり。兩面目備つたなり。曲は句中の方、直は本分の方。一句に落しつかぬ處が分明なり。先師下語に一手擡一手搦。殺人刀活人劍。眼看東南心在西北。日出月沒。

第四節　本則評唱和譯

大凡そ宗教を扶竪せんには、須らく是れ箇の當機を辨じ進退是非を知り殺活擒縱を明むべし。若し忽ち眼目迷黎懺懼ならば、到る處問ひに逢ふては便ち問ひ、答に逢ふては便ち答ふ。殊に知らず鼻孔別人の手裡に在ることを。只雪峰巖頭の如んば同じく德山に參ず。此の僧雪峰に參ず、見解只恁麼の處に到る。巖頭を見るに及んで、亦曾つて一事を成し得ず。虛しく他の二尊宿を煩す。一問一答一擒一縱。直ちに如今に至つて天下の人節角譌訛と成りて分疎不下なり。且らく道へ節角譌訛什麼の處にか在る。雪峯諸方を遍歷すと雖も、末後に贅山店に於いて巖頭因つて之れを激して方に勦絕して大徹することを得たり。巖頭後に沙汰に値ふて湖邊に於いて渡子となる。兩岸各々一板を懸く。人あり過ぎて板を敲くこと一下すれば、頭云く儞那邊に過ぐと。遂に蘆葦の間より棹を舞して出づ。雪峯嶺南より歸つて住庵す。這の僧亦是れ久參底の人、雪峯來るを見て手を以て庵門に托し身を放つて出でゝ云く是れ什麼ぞと。如今有る底は什麼に問着すれば、便ち他の語下に去つて咬嚼す。這の僧亦怪しむべきなり。只他に向つて道ふ是れ什麼ぞと。峯低頭して庵に歸る。往々に喚んで無話の會となし去る。這の僧便ち模索不着。有る底は道ふ雪峯此の僧に一問せられて直ちに得たり無語庵に歸ると。殊に知らず雪峯の意毒害の處にあることを。雪峯便宜を得と雖も、爭奈せん身を藏して影を露すことを。這の僧後に雪峯を辭す。此の公案を持して巖頭をして判せしむ。既に彼處に到る。巖頭問ふ什麼の處よりか來る。僧云く嶺南より來る。頭云く曾つて雪峯に到るや。若し雪峯を見んと要せば只此の一問也た好し眼を着けて看るに。僧云く曾つて到る。頭云く何の言句かありし。此の語亦空しく過ごさず。這の僧曉らずして只管に

他の語脈を逐ふて轉ず。頭云く他什麽とか道ひし。僧云く、他低頭して無語歸庵と。這の僧殊に知らず、巖頭草鞋をつけて他の肚皮裏に在つて行くこと幾回し了ることを。巖頭云く、噫、我れ當初悔らくは他に向つて末後の句を道はざりしことを。若し他に向つて道はく天下の人雪老を奈何ともせずと。巖頭也た是れ强を扶けて弱を扶けず、這の僧舊に依つて黑漫々地にして緇素を分たず、一肚皮の疑を懷て眞箇道ふ雪峯會せずと。夏末に至つて再び前話を擧して巖頭に請益す。頭の云く何ぞ早く問はざる。這の老漢計較生せり。僧云く未だ敢へて容易にせず。頭云く雪峯我れと同條に生ずと雖も我れと同條に死せず。末後の句を識んと要せば只這れ是れ巖頭はなはだ眉毛を惜まず。諸人畢竟作麽生か會せん。雪峯德山の會下に在つて飯頭となる。一日齋晚し。德山鉢を托して下りて法堂に至る。峯云く鐘未だ鳴らず鼓未だ響かず這の老漢什麽の處に向つてか去る。山無語、低頭して方丈に歸る。雪峯巖頭に擧似す。頭云く、大小の德山末後の句を會せず。山聞いて侍者をして喚んで方丈に至らしむ。問ふて云く、汝老僧を肯はざるか。頭密に其の語を啓す。山來日に至つて上堂。尋常と同じからず。頭僧堂前に於いて掌を撫して大笑して曰く、且喜すらくは老漢末後の句を會することを。他後に天下の人他を奈何ともせず。然も是くの如しと雖も只三年を得んと。此の公案の中雪峯の如くんば德山の語なきを見て將に謂へり、便宜を得たりと。殊に知らず賊を着け了れることを。蓋し他曾つて賊を着け來るがために、後來賊となることを解す。所以に古人道く、末後の一句始めて牢關に至ると。有るものは道ふ巖頭雪峯に勝れりと。則ち錯つて會し了れり。巖頭常に此の機を用ふ。衆に示して云く、明眼の漢窠臼を沒し物を却るを上となし物を逐ふを下となすと。這の末後の句設使ひ親しく祖師に見へ來るとも也た理會すことを得ず。德山齋晚し、老子自ら鉢を捧げて法堂に下り去る。巖頭道く、大小の德山未だ末後の句を會せざること在りと。雪竇拈して云く。曾つて聞說く箇の獨眼龍と。元來只一隻眼を具す。殊に知らず德山是れ箇の無齒の大蟲なることを。若し是れ巖頭の識破するにあらずんば、爭でか昨日と今日と同じからざることを知得せん。諸人末後の句を會せんと要すや、只老胡の知を許して老胡の會を許さず。古より今に及んで公案萬別千差なり。荊棘林の如くに相似たり。儞若し透得し去らば天下の人奈何ともせず。三世の諸佛も下風に立在せん。儞若し透不得ならば巖頭道く、雪峯我れと同條に生ずと雖も我れと同條に死せず、只這の一句自然に出身の處あり、雪竇の頌に云く。

【字解】一。大凡そ宗教を扶竪せんには等。　人の師匠となるには並大抵のことにてはいかぬ。能く其の根機根機を見やぶりて時に臨み節に應じて教を施設し學人を導かねばならぬと云ふ。

二。迷黎麻羅。　人天眼目の岩頭三句上堂の章には彌梨摩羅としてあるが、これは瞇瞶瞶の字を寫したもので、瞇は眇目の義。瞶は視るなり、瞶は緩く見るなり、瞶は目に色なきなりで卽ち無眼子と云ふ程のことである。兎の眼の樣にパチ〳〵して迂路たへまはるやうではしかたがないと云ふのであらう。

三。一問一答一擒一縱直ちに如今に至つて天下の人節用誦訛となりて、分疎不下なり。　巖頭と雪峰の二尊宿の弄處は古より今に至りて節となり角となりて幾多の人の腦をなやます大問題となりたと云ふのである。

四。勘絶して大徹することを得たり。　一切掃蕩して始めて大悟徹底することを得たと云ふのである。

五。沙汰に値ふて湖邊に於て渡子となる　唐の武宗の會昌五年に廢佛の令を出して天下の佛堂を毀ち僧尼を逐ふたことがある。此の時麗頭全　證禪師は難を鄂渚湖の邊に避けて渡船子となりて其の中にも學人の提撕をつゞけられた。雪峰禪師は此の時難を飛猿嶺の南方に避け小庵を結んで禪客に接して居られたと云ふことである。

六。爭奈せん身を藏して影を露はすことを。　雪峰はよきかくれ家を得られたけれども切角ながら尾が見へるから可笑しいと云ふ。

七。若し雪峰を見んと要せば只此の一問也た好し眼を着けて看るに。　これは地理的の雪峰山ではありませぬぞ。

八。頭に其の語を啓す。　正覺山上の幾萬の蟻蟲が小僧に向つて巖頭の一語大雷鳴の如く耳底に徹し去ると申しますが何んと皆さんこの聲が聞こえますかな。

九。古人道く。　これは夾山善會禪師の法を嗣いだ濮州樂普山の元安禪師の言葉である。禪師一日衆に示して、末後の一句始めて牢關に至る。要津を鎖斷して凡聖を通ぜざれ。上流の士を知らんと欲せば將に祖佛の見解を以て額頭に貼在せざれ。靈龜の圖を負ふて自ら喪身之本を取るが如しと申されたと云ふことである。

一〇。蓋し他曾つて賊を着け來るがために後來亦賊と做ることを解す。　今までたび〳〵賊を着せられた御陰で、雪峰も亦賊手段の名手となられたと云ふのである。

一一。德山是れ箇の無齒の大蟲なることを。　德山和尚は老ぼれて牙はないが、然し蓋天蓋地の米食び蟲であると云ふのである。

第五節　類則提唱

其一　托鉢

雪峯在二德山一會下一作二飯頭一。一日齋晩德山托レ鉢下至二法堂一。下語云。這老賊。無風起レ浪。

托鉢は鉢を聞くことぞ。齋の晩いを能く知りながら、ソラトボケして鉢を開いて這の働きをしたは怖らしい賊ぞ。ソラトボケと云ふ辨が肝要なり。

峯云。鐘未レ鳴鼓未レ響托鉢向二什麼處一去。下語云。唯見二錐頭利一不レ知二錐針方一。一釣卽上。負命者上レ鈎來。

斯くの如く拶せられんとて德山のソラトボケして賊をふるまふたが。雪峯も無眼子ではないぞ。隨分の人なれども字面ばかり心得て賊を知らざるぞ。又下語に不二風流一處也風流。雪峯の上をたすけてしたる下語ぞ。

山無語低頭歸二方丈一。下語云。糊泥裏有レ棘。前箭輕後箭深。劍握二甑人一手。

此句は學者契ひ難し。此古則の秘曲なり。暫く學者を抑へらるゝと先師の沙汰なり。山法師の長太刀で得手の具足なり。劍を甑人の手に握つてはたらく德山の怪我をした

やうに、雪峯を如何と釣りに出たが前よりも猶恐ろしい振舞ぞ。雪峯の鐘未だ鳴らず皷未だ響かず托鉢して什麼の處に向つてか去ると云れたは隨分の人なれども賊の働きを心得ずして云はれたぞ。鐘未だ鳴らず皷未だ響かざるに托鉢したは錯で候と怖ろしい心を低頭して方丈に歸つたぞ。語なくして歸りたが深い手段なり。又下語に毒龍行處草不生。句中の怖ろしい處を見かけての句なり。

雪峯舉似岩頭。下語云。問得可始得。

頭云大小德山不會末後句。下語云。釣竿截盡重栽竹。重而事生也。

德山の賊を思ふさまに振り舞ふたを、岩頭の大小德山ものを云はずして方丈に歸つたは末後の句を會せずしてかと、側から賊を引き起して云ふた處が重栽竹なり。

山聞令侍者喚至方丈問云汝不肯老僧那。下語云。獅子咬人不露牙。後句不露牙。

老僧を肯はざる那と賊を知りすまして鋒鋩を露はさゞるは怖ろしい心ぞ、又下語に蜜裡裏砒霜。

岩頭密啓其意。下語下云。恰似蠕欵。

前に末後句を會せずと云ふて、又密に其の意を啓すと云ふたは錯りで候ふ其の過を蠕欵して悉く和尚へ尋ね申さんと云ふ義なり。蠕欵は白狀に立ち却りて物を云ふ方ぞ。

山至來日上堂與尋常不同。下語云。莫道非々想天無人。

非々想天と云ふは天より上のことぞ。あまりに人無いと思ふて云ひたき儘になる云はれぞ。耳聞きがありて聞くぞと云ふ義なり。

頭於僧堂前撫掌大笑云且喜老漢會末後句。下語云。不僧道。

末後の句を會せずと云ひて又其意を啓すと云ひ、又は末後の句を會すと云ふ。斯く色々に賊を云はるゝほどに、何れをとらへて信にせうやら知らぬと云ふ義なり。

他後天下人不奈他何雖然如是只得三年活。下語云。耳朶兩片皮。

活と云ふた字をとがめて色相に用ふるなり。死活と云ふことは本分上にはありてこそ。岩頭奇瑞のある人で後のことを知りて云へり。

德山果三年後遷化。下語云。牙齒一具骨。一句合頭話。

三年の活を得ると云ふたに、果して三年後に遷化したは、云ひ合ふたことではあれども、正知正見の上には狗の糞ぞ。天から降りた如く奇特ではあれども用にたゝぬこちぢやと打つてのけて用いたものなり。

第六節　頌

末後句。已在言前。將謂眞爲君說。舌頭落也說不着。有頭無尾有尾無頭。明暗雙雙底時節。葛藤箇。覿着則瞎。

老漢。如牛無角似虎。此彼是恁麼。同條生也共相知。是何種族。彼此汲交涉。君向瀟湘我向秦。不同條死還殊絕。挂杖子在我手裏。爭怪得山僧。爾鼻孔爲什麼在別人手裏。還殊絕。還要喫棒麼。有什麼模索處。黃頭碧眼須甄別。盡大地人亡鋒鏑却不恁麼。只許老胡會。南北東西歸去來。收。脚跟下猶帶五色線在。乞爾一條挂杖子。夜深同看千巖雪。猶較半月程。大地雪漫漫。滿塡溝塞壑無人會。也只是箇瞎漢。還識得末後句麼。便打。

【讀方】　末後の句。已に言前に在り。將に謂へり眞箇。覿着すれば瞎す。君が爲めに說く。舌頭落地。說不着。頭あり て尾なく尾ありて頭なし。明暗雙々底の時節葛藤の老漢。牛の角なきが如く虎の角あるに似たり。彼此是れ恁麼。同條生也共に相知る。是れ何の種類ぞ。彼此汲交涉。君は瀟湘に向ひ我は秦に向ふ。不同條死や還つて殊絕。挂杖子は我が手裡に在り。爭でか山僧な怪み得てん。爾が鼻孔什麼としてか別人の手裡にあり。還つて殊絕す。還つて棒を喫せんと要するや。什麼の模索の處かあらん。黃頭碧眼も須らく甄別すべし。盡大地の人鋒を亡し舌を結ぶ。我は也た恁麼他人は却つて不恁麼。只老胡の知ることを許して老胡の會することを許さず。南北東西歸去來。收。脚跟下猶ほ五色の線を帶ぶることあり。爾に一條の挂杖子を乞へん。夜深けて同く看る千巖の雪。猶ほ半月程に較れり。從他あれ大地雪漫々。滿に塡ち壑に塞りて人の會するなし。也た是れ箇の瞎漢。還つて末後の句を識得すや。便ち打つ。

【字解】一。已に言前に在り。　雪竇に承らいでも疾の昔に存じて居りますと云ふ。

二。將に謂へり眞箇と。　何か眞箇末後の句があるのかと思ふて居たがホンノからおどしであつたと云ふ。

三。覿居すれば瞎す。　若しも別に末後の句を見やうとするならば目がつぶれるぞと云ふ。

四。舌頭落地。　雪竇は君が爲めに說くと仰せられたけれども、若しもその末後の句を說いたならば、そのお舌が拔けてしまいましようぞと云ふ。

五。說不着。　その末後の句なるものは到底說けるものでもなければ又說くべきものでもありませぬと云ふ。

六。頭ありて尾なく尾ありて頭なし。　是れは果してあるものであらうかないものであらうか。恐らくは盡未來際說きに說きても說きつくすことは出來ますまいと云ふ。

七。葛藤の老漢。　雪竇いらぬ文句は云はぬ方が花であるから。チトたしなまれたが宜しからうと注意する。

八。牛の角なきが如く虎の角あるに似たり。　有つたものが無くなつたやうにもあり。無かつたものが出來たやうにもあり。有と思へば無、無と思へば有、何とも形容のして見やうがありませぬと贊成する。

九。彼此是れ恁麼。　あちらも明暗双々で、宇宙萬物皆かくの如くであるから經には如是相と說いてありますと云ふ。

一〇。是れ何の種類ぞ。　その同條に生じたと云ふのは抑も何の人種であらう。大和民族であらうかアイヌ民族であらうか或は又白皙人種であらうか。お互ひに能く參究して見なければなりませぬと云ふ。

一一。彼此汲交涉。　雪竇は共に相知るなどゝ申されるけれども、然し何も同條に生れやうなどゝ互ひに交涉があつた譯でもあるまいと云ふ。

一二。君は瀟湘に向ふ我は秦に向ふ。　櫻と梅とは同じく春暖に催されて咲くけれども梅には櫻の色はなく。櫻には梅の香がない。人々自ら光明の在るあり。藥師には十二の大願があり。彌陀には六八の本願がある。柳は綠、花は紅、これが世の中

の頭白いところであらう。

一三。拄杖子は我が手裡に在り。　圜悟一棒以つて叅りたいがとチラリト見せて、之が圜悟殊絶の本分であると云ふ。

一四。爭で山僧を怪み得てん。　何の不思議なこともありませぬとスマシこむ。

一五。爾の鼻孔什麼としてか別人の手裡にある。　皆さんはなぜに雪竇計りに大口をきかせますぞ。人々各自に自分の鼻で息することを知らればならぬと注意する。

一六。還つて棒を喫せんと要するや、どうれ、イヨ〳〵圜悟の本分を行して見せうと云ふ。

一七。什麼の模索の處かあらん。　然し其の殊絶のところは、何にもそう事むづかしく模索するにも及ばぬ。それ諸人見ふと足の裏を見せる。

一八。盡大地の人鋒を亡し舌を結ぶ。　如何さも殊絶向上の處は手出しの出來るものでないと云ふ。

一九。我は也た恁麼他人は却つて不恁麼。　汝は汝たり吾れは吾れたり。柳と櫻。梅と桃。何も甄別し難いことはないと云ふ。

二〇。又老胡の知ることを許して老胡の會することを許さず。　酒は醉ふものぢやと云ふことは誰れでも知つて居るけれども其の醉い心持と醉いさめの水は當人より外に合點するものはないのである。

二一。脚跟下猶ほ五色の線を帶ぶることあり。　雪竇は歸去來と云はれるけれども然も足元が覺束ないぞと云ふ。

二二。收。　南北東西歸去來。サア皆の者謠ひ收めぞと云ふ雪竇の大號令に目出度く舞ひ收めたと云ふ。

二三。爾に一條の拄杖子を乞へん。　愈々お歸りならだドレ杖でもお貸し申そうと云ふ。

二四。猶ほ半月程に較れり。　若し之れを以て末後の句と認めたならば　鄉關萬里遠くして遠いことであると云ふ。

二五。さもあらばあれ大地雪漫々。　一天銀世界となり枯木花なつゃるで千巖のみならず萬目之れ好雪景である。

二六。溝に塡ち壑に塞りて人の會するなし。　然も誰ありて是の風光を眞實に會するものゝないのは如何にも殘り多いことである。

二七。也た是れ箇の嘯湊。　實にあき盲どもの集合であると嘆息する。

二八。還つて末後の句を薦得するや。　ドウヂヤ分るかなと云ひもあへず。

二九。便ち打す。　ヒシツと打つて末後の句を識り得たと云ふも三十棒。識り得ぬと云ふも三十棒、同條も不同條も雙明も雙暗も一切皆勦絶してしまうたのである。

【講義】　此の一頌は總べて、九句ありて三言二句、七言三句、三言一句、七言三句と云ふ順序である。先づ初めに例の如く末後の句と本則の眼目を拈提し來りて、君が爲めに說く。巖頭全豁禪師は、曾つて他に向つて道はざりしを悔ゆと申されたが、雪竇は今諸君子のために說かう程に、それ耳を傾けて充分に聞けと云ふ。明暗雙々底の時節。明暗雙々は雙明雙暗と云ふも同じことで、明は物のよく見へることであるから卽ち萬象差別の姿。暗は見へぬことであるから卽ち平等一相無差別のところを申したものである。先きに巖頭禪師が今此の末後の一句只這れ是れと言はれた立場は明とも暗とも悟とも迷とも佛とも衆生とも云ふて見やうのない處であるからこれが明暗雙雙底の時節である。同條生や共に相知る。これは本則に雪峯我れと同條に生ずと雖も我れと同條に死せずと巖頭の云はれたのを謠ふたものである。然しながら何も巖頭と雪峯とに限つたことではない。天地間にありとしあらゆるもの皆同條に生じて同條に死せざるもので、之れを古人は春風高下なし花枝おのづから短長と謠ふて居られる。隣の猫と家の犬とは同條に生じて其の生や同胞で

あるけれども猫はニャンと鳴き犬はワンと吠へる。桃と櫻とは同條に春風に咲くけれども櫻に桃の色はなく桃には櫻の趣きがない。山と川とは同條に生じて其の生や同胞であるけれども山は自ら高くして川は自ら低い。日と月とは同條に生じて同じく天體であるけれども日は晝を照し月は夜を照して其の趣きや一でない。萬象森羅皆是くの如しで其の同條に生ずる底に於ては其の趣きや全く一でありて同胞兄弟。互ひ互に能く相知り合ふて居るのである。不同條死や還つて殊絶。天の高きは地の知るところに非ず、地の低きは天の關る處にあらず。柳の綠なるは花の知るところにあらず。花の紅いなるは柳の知つたことでない。藥師には十二の大願があり彌陀に四拾八の本願がある。人々自ら光明のあるあり。犬は兎を逐ひ、猫は鼠を捕ふ。權兵衞の種蒔くのも、太吾作の鼻歌謠ふのも之れ人人各用の作用。本來獨特の妙技でありて其の妙味は他人のあづかり知つたことでないのである。還つて殊絶、サテ前件の殊絶向上の田地は、黃頭碧眼も須らく甄別すべし。黃頭は釋迦のこと碧眼は達磨のことで、此の殊絶なる不同條死の境界は釋迦も達磨も互ひに相知ることは出來ないのである。かくて雪竇は大號令を下して、南北東西歸去來。サアお互ひに歸るべき處へ歸りましようぞと云ふ。然らば其歸つて往く落ち着き場所はと云ふに、夜深けて同じく看る千巖の雪。卽ち明暗雙々底の好風光である。夜深けて眞黑の處に白皚々たる千巖の雪で、天地萬物只見る一色銀世界。これが本地の風光であり宇宙法界の眞景であるのである。

第七節　頌評唱和譯

末後の句君がために說く、雪竇此の末後の句を頌す、他の意極めて落草して相ためにすることあり。頌することは則ちはなはだ頌す。只毛彩の些子を頌す。若し透見せんと要せば也た未だあらず。更に敢へて大口を開いて便ち道ふ、明暗雙々底の時節と、儞がために一綫路を開いて亦儞がために一句に打殺し了れり。末後更に何がために註解す。只招慶の如くんば、一日羅山に問ふて道く、巖頭道く、恁麼恁麼不恁麼不恁麼と意旨如何。羅山召して云く、大師。師應諾す。山云く雙明また雙暗。慶禮謝して去る。三日の後又問ふ。前日和尙の慈垂を蒙る、只是れ看不破。山云く情を盡して儞に向ひ道ひ了れり。慶云く、和尙是れ火を把つて行け。山云く若し恁麼ならば大師の疑處によつて問ひ將ち來れ。慶云く如何なるか是れ雙明また雙暗。山云く同生亦同死。慶當時禮拜して去る。後に僧あり招慶に問ふ。同生また同死の時如何。慶云く狗口を合取せよ。僧云く大師口を收取して飯を喫せよ。其の僧却來して羅山に問ふて云く。同生不同死の時如何。山云く牛の角なきが如し。僧云く同生また同死の時如何。山云く虎の角を戴くが如し。末後の句正に是れ這箇の道理。羅山の會下に僧あり便ち這箇の意を用いて問を招慶に致す。慶云く彼此皆知る、何が故ぞ我れ若し東勝身州に一句を道へば西瞿耶尼州にも也た知り、天上に一句を道へば、

人間に也た知る。心心相知り眼々相照すと。同條生は則ち猶見易し、不同條死は也た還つて殊絶なり。釋迦達磨も也た模索不着。南北東西歸去來。些子の好境界あり。夜深けて同じく看る。千巖の雪。且らく道へ是れ雙明か雙暗か。是れ同條生か是れ同條死か、具眼の衲僧試みに甄別して看よ。

【字解】一。若し透見せんと要せば未在。　若し末後の句を見んとならばチットは齒にかゝることもあらうと云ふ。

二。只招慶の如くんば。　普通に招慶と云へば長慶慧稜禪師の法を嗣いだ泉州招慶院の道匡禪師を云ふのであるが。今は傳燈錄や會元等に保福從展禪師羅山に問ふと見へてあるから、茲に招慶と云ふは、恐らくは從展禪師が招慶院に住して居られた時のことであらうと思ふ。從展禪師は雪峰義存禪師の法嗣でありて、唐の天成三年になくなられた人である。

三。羅山。　羅山道閑禪師は巖頭全豁禪師の法を嗣いだ人で、法寶大師とあがめられた高僧である。

四。和尙是れ火を把つて行け。暗夜に提燈か以て導くが如く明かに示し玉へと請ふたものである。

五。狗口に合取せよ。　誰人も知つたことであるから申さゝゝ迄もないと云ふ。

六。大師口を收取して飯を喫せよ。　和尙其のお口に飯をまゐらせよと云ふ怜悧な挨拶である。

七。心心相知り眼々相照す。　巴里の旅館にナイフを取つて上野の精養軒の料理を食へると云ふのが吾宗の無線電信。逢磨發明の無線電話である。

第八節　類則提唱

其二　招慶問羅山

招慶一日問二羅山一云、巖頭云、恁麼恁麼。下語云。耳朶兩片皮。不恁麼不恁麼。下語云。牙齒一具骨。恁麼と云ふも不恁麼と云ふも皆色相の上のことと云云。

又恁麼恁麼不恁麼不恁麼の意旨如何。下語云。問得可二始得一。

羅山召云大師。下語云。雨下地上濕。

甚の道理もなく喚び出したなり。現成の方ぞ。地上はスンデも(チシヤウ)ニゴリても(ヂジャウ)よむぞ。

師應諾。下語云。日出乾坤耀。

山云雙明亦雙暗。下語云。一槌兩當。恰是。萬里一條鐵。

雙明はあきらかなる方、實ぞ。雙暗は暗き方、權ぞ。かやうに辨ずる時は權實備つたなり。又恰是と下語するぞ。此の句はまづさうぢやと云ふ方ぞ。又臨終に兩方の目をあきつふさぎつするを云ふと云ふ說あり。

明ぢや暗ぢやと云ふは色相の上よ。又明なるものがどこにあるぞ。又暗なるものがどこにあるぞ。雙明雙暗となきことを云ふたは賊ぞ。一條鐵ぞ。語話に云く。そうべつ明暗と云ふは色々の境界なり。衲僧の穩顯にも用ゆるぞ。穩顯とは權實を云ふぞ。

慶禮謝而去。下語云。夜深共見千岩雪。

慶の山に知音して禮謝して去られたぞ。

其二　岩頭恁麼

岩頭云、恁麼恁麼不恁麼不恁麼畢竟如何。下語云。月白風清。

本分上に到りては恁麼と云ふことも不恁麼と云ふこともあつてこそ。落居其の道理もない處を現成に用ゆるなり。

第五拾二則　趙州石橋

第一節　本則

舉僧問趙州。久嚮趙州、石橋到來只見略彴。也有人來撈虎鬚。州云。汝只見略彴。且不見石橋。慣得其便。這老漢賣身去也。僧云如何是石橋。上釣來也。果然。州云。渡驢渡馬。一網打就。直得靈大地人無出氣處。一死更不再活。

【讀方】　舉す僧趙州に問ふ久しく趙州の石橋と嚮く到り來れば只略彴を見る　也た是れ納僧本分の事。也た人あり來つて虎鬚を撈づ。州云く汝只略彴を見て且らく石橋を見ず。其の便を得るに慣たり。這の老漢身を賣り去れり。僧云く如何なるが是れ石橋　鈎に上り來れり。果然。州云く驢を渡し馬を渡す。一網に打就す。直に得たり靈大地の人氣を出すに處なし。一死更に再活せず。

【字解】　一。趙川。　趙州の從諗禪師の住して居られる觀音院は趙州の東にあつて有名な趙州の石橋を去ること十里と云ふから吾が日本里數の二里と云ふ處である。この石橋は南嶽の石橋天台山の石橋と合せて三石橋と稱せられ天下の名所になつて居ると云ふことである。

二。略彴。　略彴は古抄に木を横へて水を渡るを彴と曰ふとも。横木橋を略彴と云ふとも。或は獨木の橋を權と云ひ亦は彴と云ふ水上に一木を横へて渡をなすを謂ふなりと見へてあるから卽ち一本橋のことである。

三。也た人あり來つて虎鬚を撈づ。　この命知らずめ。趙州如き虎の鬚をなでゝ今に咬み殺されてしまふであらうにと云ふ

のである。

四。也た是れ禍僧本分の事。　さすがは商賣柄であるとほめたものである。

五。其の便を得るに慣れたり。　サスがは趙州和尚であるから、人を接することには慣れたものであると云ふ。

六。這の老漢身をうり去れり。　趙州和尚は己が身を餌にして釣を垂れられるが如何にも慈悲深いことであると云ふ。又一僧にかけて貴公が眞實の趙州老漢を見ることが出來まいと云ふたのは己れと己れの身を餌にして釣を垂れるやうなものであると云ふ。

七。釣に上り來れり。　ソラ釣れましたが、然し鱠であらうと云ふ。

八。果然。　思つた通り釣れましたと云ふ。

九。一網に打就す。　鱠も蛙も何も彼も皆一網に引き上げてしまふたぞと讃嘆する。

一〇。直ちに得たり盡大地の人氣を出すに處なし。　斯うおつかぶされては滿天下誰人でも動きはとれますまいと云ふ。

一一。一死再活せず。　釋迦も達磨も諸佛も祖師も皆脈が上つて悉く死人になつてしまうたと云ふ。

第二節　本則提唱

僧問趙州久響趙州石橋到來唯見略彴。下語云。拳來踢報。人得一牛人還一馬。痛處下針錐。

略彴は獨木橋なり。句中の方から州を試みて云ふたなり。

先師下語に句裡呈機。梁生招箭。

州云汝唯見略彴不見石橋。下語云。要減人聲價。倚勢欺人。

此僧の後語の惡處を今日學者の眼から見たてゝ痛處下針錐と下語したぞ。先師下語に藏身露影。作賊人心虛。

僧云如何是石橋。下語云。隨語轉。隨傍憙。

同事を轉せずして問ふなり。初問にかはつて不足なり。先師下語に蹉過也不知。未見其表。

州云渡驢渡馬。下語云。倚勢欺人。舌頭有骨。指槐樹罵柳樹。

渡驢渡馬と云ふて此の僧を指示したほどに畜生よと響いたぞ。驢馬の上を云ふたれども此の僧をさしたほどに指槐樹罵柳樹たものよ。又痛處下針錐と云ふ句もあるが此の前に付けたは不審〳〵考ふべし。

第三節　本則評唱和譯

趙州に石橋あり蓋し李膺造れり。今に至りて天下名あり。略彴は卽ち是れ獨木橋なり。其の僧故意に他の威光を減じて他に問ふて道く、久しく趙州の石橋と響く。到來すれば只略彴を見る。趙州便ち道ふ、汝只略彴を見て且く石橋を見ず、他の問處に據らば也た只是れ平常の說話に相似たり。趙州用ひ去つて他を釣る。這の僧果然として釣に上つて、後に隨つて便ち問ふ。如